(財)八尾市文化財調査研究会報告120

矢作遺跡

第7次調査

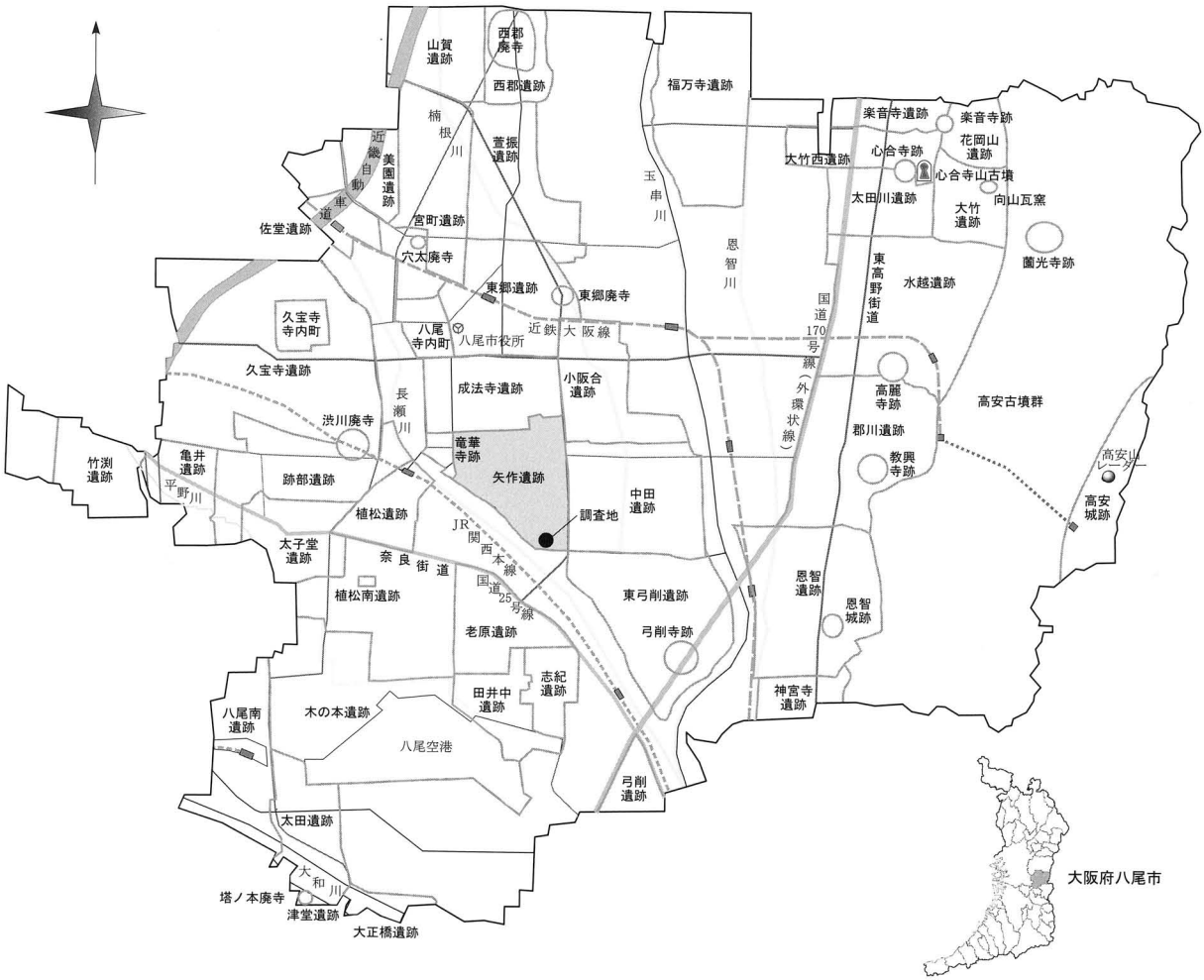
2008年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

(財)八尾市文化財調査研究会報告120

矢作遺跡

第7次調査



2008年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央に位置し、東に生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域です。この豊かな自然環境のもとで、古くから人々の生活の場として繁栄していた地域であり、地面の下には、先人達が残した貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。

これらのかけがえのない埋蔵文化財は、地域の歴史と文化を伝える貴重な史料であり、地域の人々の共有の文化遺産であります。開発により消失するこのような埋蔵文化財の記録保存を行うと共に、これらの成果の活用を広く図り、後世に伝えていくことが現代に生きる我々の大きな責務と認識しています。

このたび、平成19年度に実施しました矢作遺跡(第７次調査)の発掘調査の整理が完了致しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。矢作遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と隣接する地域に立地し、河川の氾濫を永く受けながら、弥生時代中期から近世まで連綿と集落が存在してきた遺跡であります。今回の調査地でも、平安前期頃に起きた大規模な河川氾濫後、集落及び連綿と続く耕作地として利用されており、土地利用の変遷を知る上で重要な成果と言えます。

本書が地域史の解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及に広く活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成20年12月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　岩　﨑　健　二

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市安中町八丁目で実施した市営安中住宅４・５・６号館建替えに伴う矢作遺跡第７次調査（ＹＨ2007－７）の発掘調査報告書である。
1．調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成19年12月11日～平成20年２月29日にかけて河村恵理が担当した。調査面積は1104㎡である。現地調査においては、赤松英幸・浅井宏美・飯塚直世・伊藤静江・川崎純弘・竹田貴子・田島宣子・中野一博・西出一樹・村井厚三・吉川一栄・和田直樹が参加した。
1．整理業務は、平成20年７月～12月に実施した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤・徳谷尚子、遺物・遺構トレース－村井俊子、デジタルトレース－河村、遺物写真－北原清子、遺物写真図版－尾崎良史・北原、遺構写真図版－河村が行った。
1．本書の執筆・編集は河村が担当した。
1．測量は富士測量株式会社に委託した。
1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図（昭和61年測量・平成６年修正・平成８年７月編纂）、八尾市教育委員会の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成19年度版）を使用した。
1．本書で用いた標高の基準は、T.P.（東京湾標準潮位）である。
1．本書で用いた方位は、国土座標第Ⅵ系〔世界測地系〕の座標値である。
1．土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年期版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。
1．遺構は下記の略号で示した。
　井戸－ＳＥ　　土坑－ＳＫ　　溝－ＳＤ　　小穴－ＳＰ　　落ち込み－ＳＯ
1．遺構図面の縮尺は、適宜設定した。
1．遺物図面の縮尺は、1/4を基本とし、石製品については2/3とした。遺物の断面については、陶磁器・瓦器・土師器・土製品・鉄製品は白、須恵器は黒、灰釉陶器・石器・瓦は斜線、黒色土器は粗い水玉を用いた。土器の施釉部分は細かい水玉を用いた。
1．土器の形式・編年で基準とした文献については、目次の末尾に提示した。
1．第１章で参考とした文献についてはP.３、第４章で参考とした文献についてはP.44に提示した。

本　文　目　次

はしがき
例言・凡例
第１章　遺跡概要とその環境……1
第２章　調査の方法と経過……8
第３章　調査概要……10
　第１節　基本層序……10
　第２節　検出遺構と出土遺物……14
　（1）１区……14
　（2）２区……25
　（3）３区……36
第４章　まとめ……43

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺位置図……4
第２図　調査地周辺の既往調査成果……7
第３図　調査区配置図……8
第４図　１区南壁断面図……11
第５図　１区第１・２面平面図……12
第６図　１区第３・４面平面図……13
第７図　第１層出土遺物実測図……14
第８図　第２面出土遺物実測図……18
第９図　第４層出土遺物実測図……19
第10図　1317・1318ＳＰ、1319・1320ＳＫ断面図……20
第11図　第５層出土遺物実測図……20
第12図　1406ＳＫ・1407ＳＥ、1417ＳＤ出土遺物実測図……21
第13図　1404～1406ＳＫ断面図……22
第14図　1407ＳＥ平面図・断面図……22
第15図　1509ＳＤ土器出土状況平面図・立面図……23
第16図　1501～1503ＳＤ、1504～1506・1511～1513ＳＫ断面図……24
第17図　1504・1508ＳＫ、1509ＳＤ出土遺物実測図……24
第18図　1508ＳＫ土器出土状況平面図・立面図……25
第19図　第７ｂ層出土遺物実測図……25
第20図　２区東・北壁断面図……26

第21図　２区第１～３面平面図……27
第22図　第２層出土遺物実測図……28
第23図　2110・2115・2118・2122～2124・2135ＳＤ出土遺物実測図……29
第24図　2120-①ＳＥ・2120-②ＳＰ平面図・断面図……31
第25図　2139ＳＫ断面図……32
第26図　2206ＳＫ、2207ＳＯ出土遺物実測図……33
第27図　2205・2206ＳＫ、2207ＳＯ断面図……33
第28図　2301～2310・2315ＳＤ出土遺物実測図……35
第29図　2306・2317・2321ＳＫ断面図……35
第30図　３区西・南壁断面図……37
第31図　３区第１～３面平面図……38
第32図　3101・3102ＳＯ、3108ＳＤ出土遺物実測図……39
第33図　3201ＳＯ、3202ＳＫ出土遺物実測図……41
第34図　3202ＳＫ断面図……40
第35図　3301ＳＯ出土遺物実測図……42
第36図　3201・3301ＳＯ断面図……42
第37図　3305ＳＫ断面図……43
第38図　第７ｂ層出土遺物実測図……43

表　目　次

第１表　周辺の発掘調査一覧表……５・６
第２表　１区第１面耕作溝（ＳＤ）法量表……15
第３表　１区第１面土坑（ＳＫ）法量表……16
第４表　１区第２面溝（ＳＤ）法量表……16
第５表　１区第２面島畠・畦畔法量表……18
第６表　１区第３面耕作溝（ＳＤ）・土坑（ＳＫ）法量表……19
第７表　１区第４面耕作溝（ＳＤ）法量表……21
第８表　２区第１面耕作溝（ＳＤ）法量表……29
第９表　２区第２面耕作溝（ＳＤ）法量表……33
第10表　２区第３面耕作溝（ＳＤ）法量表……34
第11表　３区第１面耕作溝（ＳＤ）法量表……40
第12表　３区第２面耕作溝（ＳＤ）法量表……41
第13表　３区第３面耕作溝（ＳＤ）法量表……42

写　真　目　次

写真１　調査前状況……9
写真２　１区機械掘削状況……9
写真３　1207島畠西肩部断面……17
写真４　1209島畠西肩部断面……17
写真５　1213島畠断面……17
写真６　1214島畠断面……18
写真７　耕作痕跡及び足跡検出状況……19
写真８　1423畦畔断面……23
写真９　噴砂検出状況……28
写真10　2111島畠北壁断面……31
写真11　2116島畠・2208畦畔断面……31
写真12　牛の足跡検出状況……32

図　版　目　次

図版一　調査地遠景
　　１区第１面全景
図版二　１区第２・３面全景
　　１区第２面1211畦畔検出状況
　　１区第２面1213・1214島畠検出状況
　　１区第２面宋銭①・1212ＳＰ検出状況
　　１区第３面1301～1316検出状況
図版三　１区第４・５面全景
　　１区第４面1407ＳＥ断面
　　１区第４面1407ＳＥ曲げ物検出状況
　　１区調査区南壁断面
　　１区東端部下層確認状況
図版四　１区第５面1508ＳＫ・1509ＳＤ検出状況
　　１区第５面1508ＳＫ土器出土状況
　　１区第５面1509ＳＤ土器出土状況
図版五　２区第１・２面全景
　　２区第１面2120-①ＳＥ断面
　　２区第１面2120-①ＳＥ木枠検出状況
　　２区2139ＳＫ断面

２区第２面2207ＳＯ断面
図版六　２区第３面全景
２区第３面北半遺構検出状況
２区第３面2306ＳＫ断面
２区調査区東壁断面
２区中央部下層確認状況
図版七　３区第１面全景
３区第２面全景
図版八　３区第３面全景
３区第２面3201ＳＯ獣骨①出土状況
３区調査区西壁断面
３区調査区南壁断面
３区西端部下層確認状況
図版九　１区第１層、第２面、第４層、1407ＳＥ、1508ＳＫ、1509ＳＤ出土遺物
図版一〇　１区1508ＳＫ、1509ＳＤ、1504ＳＫ
２区第２層、2110ＳＤ、2115ＳＤ、2207ＳＯ出土遺物
図版一一　２区2315ＳＤ
３区3102ＳＯ、3108ＳＤ、3201ＳＯ、3301ＳＯ、第７ｂ層出土遺物

遺物の参考文献

尾上　実・森島康雄・近江俊秀1995「Ⅲ土器・陶磁器　６．瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
九州陶磁近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
古代の土器研究会1993『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会1994『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』
古代の土器研究会1996『古代の土器４　煮炊具(近畿編)』
篠　弘1992「瓦」『法隆寺の至宝－昭和資財帳－第15巻』法隆寺昭和資財帳編集委員会　小学館
立石賢志・鋤柄俊夫1995「Ⅲ土器・陶磁器　10瓦質土器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
永井久美男1996『日本出土銭総覧1996年版』兵庫県埋蔵銭調査会
百瀬正恒・近江俊秀1995「Ⅱ各地の土器様相　７．近畿」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
森　隆1995「Ⅲ土器・陶磁器　２．黒色土器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
山下峰司1995「Ⅲ土器・陶磁器　４．灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

第１章　遺跡概要とその環境

矢作遺跡は、大阪府八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画の高美町三～六丁目、南本町五～八丁目、松山町二丁目、明美町二丁目、安中町六～八丁目一帯をその範囲とし、東西約0.9km、南北約1.0kmに拡がる。

地理的に見ると、当遺跡は東を生駒山地、西を上町台地、南を河内台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南東部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上の長瀬川の氾濫原に立地する。さらに長瀬川から派生した自然堤防(註１)が、遺跡内中央部を南北方向に伸びるように形成されている。この自然堤防(現地盤T.P.＋10.3m)を基点として東西に広く盛土が堆積する(国土地理院1983)。

当遺跡周辺は、弥生時代以降比較的安定した土地であった為、遺跡が特に密集する地域の一つである。当遺跡の北側には成法寺遺跡、北東側には小阪合遺跡、東側には中田遺跡が存在する。

当遺跡は、昭和56年に八尾市教育委員会(以下「市教委」と呼称)によって実施された南本町五丁目の住宅建設に伴う遺構確認調査によって明らかになった遺跡である。当調査では古墳時代・中世の遺構・遺物が確認された(米田敏幸1987)。本格的な調査としては、昭和61年に市教委によって実施された第１図－㊺調査が最初である。当調査では古墳時代前期の溝、古墳時代後期の掘立柱建物・溝などが検出された。以降、大阪府教育委員会(以下「府教委」と呼称)・市教委・当調査研究会によって数次の発掘調査が行われてきた。

以下、当遺跡周辺地域の既往の調査成果について、時代毎に記述する。なお、当遺跡周辺地域の地理的条件によって、自然堤防上を「Ａ地域」、自然堤防(Ａ地域)より西側部一帯を「Ｂ地域」、自然堤防(Ａ地域)より東側部一帯を「Ｃ地域」に分類した。Ａ～Ｃ地域の範囲は第１図を参照されたい。またゴシック文字で表した囲み文字の算用数字についての詳細は第１表にまとめた。

弥生時代中期では墓域が確認されている。Ｃ地域北端部でのみ検出されており、既往調査の希薄な北部(東郷遺跡)側に拡がる可能性が高い。調査成果について見ると、㊳でマウンド上に３基の木棺と２つの甕棺が残る方形周溝墓が検出されている。

弥生時代後期では居住域が確認されている。Ｂ地域北部とＣ地域北部に点在する。調査成果について見ると、Ｂ地域の①で多数の小穴・土坑・溝などが検出されており、③・④では完形の遺物が多量に出土した土坑や溝などの祭祀遺構が検出されている。おそらくこれらの調査地が居住域の中でも比較的、集落の中心部より離れた場所にあったものと推測できる。

弥生時代後期末～古墳時代初頭(庄内式期)(第２図－Ｉ)では居住域と墓域が確認されている。Ｂ地域北部とＣ地域中部では居住域、Ｃ地域北部では墓域と居住域が確認されており、当時期以降、本格的に土地利用され始めたことが分かる。関連する主な調査成果を見ると、Ｂ地域北部の④・⑧、Ｃ地域中部の㊾・㊿・(63)で土坑・小穴など居住域関連遺構が検出された。Ｃ地域北部では㉟・㊺・㊿で溝・土坑など居住域関連遺構が検出された。㊵では調査区北部で井戸・土坑・小穴など居住域関連遺構が検出され、南部で方形周溝墓など墓域関連遺構が検出されている。これらの成果よりＣ地域北部一帯は、北東側に居住域が集中し、南西部に墓域が拡がる集落が存在していたものと推測できる。

古墳時代前期(布留式期)(第２図－Ⅰ)では居住域と墓域が確認されている。Ｂ地域北部とＣ地域北部～中央部でそれぞれ遺構が検出されている。関連する主な調査成果を見ると、Ｂ地域では、隣接する③と④を合わせて４基の方形周溝墓が検出されている。Ｃ地域北部では、㉝・㊷で数棟の竪穴住居が検出されており、隣接する㊳でも８棟以上の竪穴住居・井戸が検出された。なお㉜では墓域関連遺構が検出されており、Ｃ地域北部一帯は、東側に居住域、西側に墓域が拡がる集落が存在していたものと推測できる。Ｃ地域中部では㊺で検出された溝より銅鏡が出土している。また、㊺では円形周溝墓が確認されており、Ｃ地域中部一帯にも集落が拡がっていたと推測できる。弥生時代後期末～古墳時代前期にかけて、集落が北側に集中しており、居住域と墓域の位置関係より、Ｂ地域北部、Ｃ地域北部、Ｃ地域中部の合わせて３つの小規模集落が存在していたものと推測できる。

古墳時代中期～後期(第２図－Ⅱ)では居住域と墓域が確認されている。Ｂ地域北部では墓域と居住域が共に確認されており、Ｃ地域でも墓域と居住域が点在するように確認されている。関連する調査成果を見ると、Ｂ地域では③で８棟の掘立柱建物がまとまって検出され、⑧でも１棟検出された。なお両調査区に挟まれた④では、円筒埴輪棺が検出され、墓域であった可能性が高いものと推察できる。Ｃ地域を見ると、Ｃ地域北端部の㉟では竪穴住居・井戸など居住域関連遺構が検出された。これより250m程南下した地点の㊽・㊾では円筒埴輪・朝顔形埴輪の小片が多数出土した周溝が検出されており、墓域が拡がっていたものと推測できる。これよりさらに400m前後南下した地点の㊹・㊶・㊸の調査では溝・小穴などが検出された他、㊸の調査では埴輪や鉄刀などの古墳関連遺物が出土しており、近隣に古墳が存在することが推測できる。㊺の調査では３棟以上の掘立柱建物跡やこれを巡るような三重の溝を検出し、大規模な居館の存在を確認した。溝の廃絶時期(６世紀末)や、近接する矢作神社の存在から、物部氏の居館の存在も示唆される。当該時期で確認した集落群の位置関係が、前述した古墳時代前期以前と一致することから、弥生時代後期末より集落が連綿と広がっていたものと推察できる。

奈良～平安時代前期(第２図－Ⅲ)では居住域と生産域が確認されている。居住域はＡ地域縁辺部に点在している。関連する調査成果を見ると、Ａ地域縁辺部西側の⑨・⑪・⑫では、掘立柱建物や井戸など居住域関連遺構が検出されている。特筆すべき成果としては、⑫で同一面上に掘立柱建物跡とそれを切るように耕作溝が多数検出されたことである。この調査成果より、比較的短期間で人為的に建物が廃絶され、再び耕作地として利用が始まったことが伺える。不安定な自然環境であったものと考えられる。Ａ地域縁辺部東側の㊽でも、井戸・溝などの居住域関連遺構が検出されている。

以上のようにＡ地域縁辺部一帯に遺構が集中するのは、Ａ地域一帯が当該時期に河川として機能していたからである。この河川は、古墳時代後期から当該時期に旧大和川の本流の１つであった「矢作ルート」(阪田育功2008) と同一であると考えられる。この為当該時期は、他の時期と比較して遺構の検出数が相対的に少なく、Ｂ・Ｃ地域においても河川氾濫の影響を大きく受けていたことが推察できる。

特筆すべき成果としては、⑯と㊽で確認された自然河川 (以下「河川②」と呼称)の中から墨書人面土器が出土したことである。以下、河川②の流路について若干の考察を加えたい。墨書土器が出土した㊽の地点は、Ａ地域を形成した自然河川(以下「河川①」)より若干東寄りに位置す

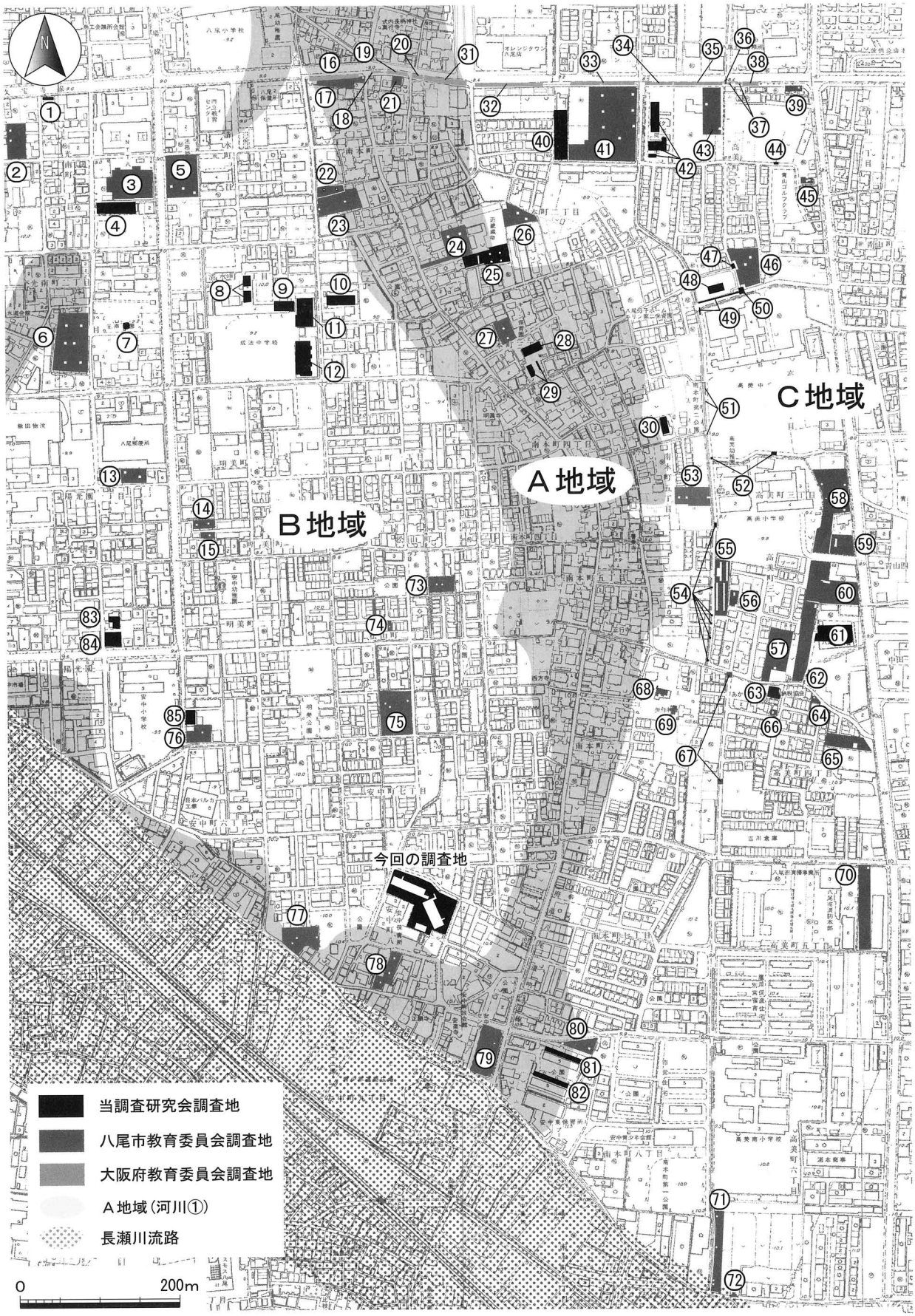
る。また、河川②が、河川①との間に位置する㉚・㊸では河川堆積層が確認されていないことや、河川堆積の層厚の違いより、㊹→㊷→㊾→㊽→⑱→⑯方向に流れるものと推察できる。

平安時代後期～室町時代(第２図－Ⅳ)では居住域と生産域が確認されている。Ａ地域及びＡ地域からさらに派生した高まり上に居住域が確認されており、ＢとＣ地域では生産域が確認されている。Ａ地域(河川①)の埋没時期は平安時代前期頃であり、これ以後安定した土地が続き、広く居住域として利用されていたものと考えられる。関連する調査成果を見ると、Ａ地域北部の⑯・⑰・⑲・⑳・㉛(以下「ａ地区」と呼称)で土坑・井戸・溝など居住域関連遺構が集中して検出された。これより南南東方向に400m前後地点の㉗～㉚(以下、「ｂ地区」と呼称)で井戸・土坑・小穴・溝などの居住域関連遺構が検出され、㉚で検出された溝は集落を区画する堀の可能性も考えられる。これよりさらに南東方向に500m地点の㉑(以下、「ｃ地区」と呼称)で13基の井戸・３棟の掘立柱建物・池状遺構・溝・土坑など、㊾で小穴・土坑、㊺では井戸、㊹では溝など居住域関連遺構が検出されている。さらに南下したＡ地域南部の㉑・㉒(以下、「ｃ地区」と呼称)でも掘立柱建物・井戸・土坑などの居住域関連遺構が検出されている。Ｂ地域について見ると、⑪・⑫では鋤溝群、㉖・㉓・㉔では井戸・小穴・溝・土坑などが検出され、㉓で検出された溝からは呪付木簡が出土していることから、祭祀などに利用された地域であり、周辺に集落が存在するものと推測できる。Ｃ地域では、㉜・㉝・㉟と㊽・㊿で鋤溝群が検出されたが、近接する位置関係から、前者の調査についてはｂ地区の居住域に関連する生産域、後者の調査についてはＡ地域ｂ地区の居住域に関連する生産域と推測できる。これらの調査成果より、ＡとＣ地域ではあわせて４箇所、Ｂ地域では少なくとも１箇所に、集落が存在していたことが示唆できる。

以上、これらの既往の調査成果より、調査地周辺では、弥生時代中期から近世まで連綿と集落が存在することは明らかである。特筆すべき点としては、成法寺遺跡から矢作遺跡にかける地域の中央部に、長瀬川の氾濫によって形成された自然堤防(Ａ地域)が形成されていることである。この自然堤防の形成を境に、成法寺から矢作遺跡に見られる集落の分布が大きく変化し、各集落が立地条件の良い場所に移動していったことが推察できる。

註１　(阪田2008)によると、この長瀬川から派生した自然堤防を、１時期に旧大和川の本流の１つと考える「矢作ルート」の存在を示している。

国土地理院1983　「大阪東南部」『1：25,000土地条件図』
米田敏幸1987　「矢作遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告15　八尾市教育委員会
阪田育功2008　「河内平野における河川形成と流路変遷」『大和川付替えと流域環境』古今書院



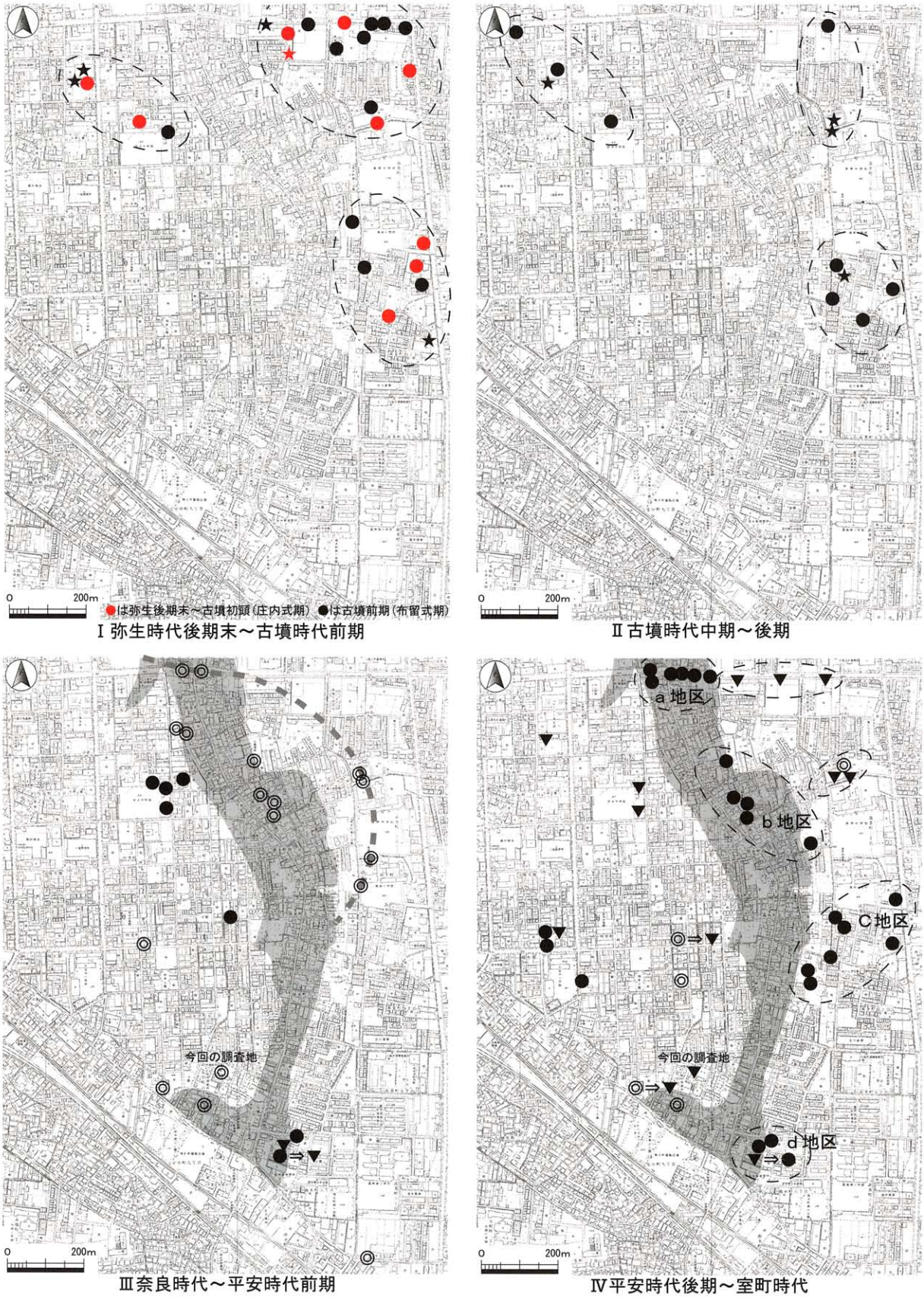
第１図　調査地周辺位置図（S＝1/7000）

第１表　周辺の発掘調査一覧表

番号	調査名略号	所在地（丁目）	面積（㎡）	主な調査成果	文献
①	SH91-９	光南町１	75	古墳時代後期の溝、弥生時代後期の柱穴・土坑	西村公助1993「ⅩⅣ成法寺遺跡第９次調査(SH91-９)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会
②	2007-283	光南町１	12.5	－	成海佳子2008「２．平成19年度４～12月の発掘調査」『八尾市内文化財平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
③	1983年度	光南町１	約1900	古墳時代後期の掘立柱建物、古墳時代前期の方形周溝墓弥生時代後期の土器溜め	高萩千秋・米田敏幸1983『成法寺遺跡－八尾市光南町１丁目29番地の調査』八尾市教育委員会
④	SH89-５	光南町１	400	中世の耕作溝、古墳時代後期の円筒埴輪棺、古墳時代前期の方形周溝墓・土坑・溝・小穴、古墳時代初頭の溝・土坑、弥生時代後期の祭祀遺構	坪田真一1992「Ⅰ成法寺遺跡第５次調査(89-５)」『平成４年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告35　財団法人八尾市文化財調査研究会
⑤	2007-343	清水町１	9	－	坪田真一2008「２－11．成法寺遺跡(2007-343)の調査」『八尾市内文化財平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
⑥	2004-330	光南町２	14	－	原田昌則2006「３．成法寺遺跡(2004-330)の調査」『八尾市内文化財平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53　平成17年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
⑦	SH98-17	光南町２	約49	－	高萩千秋2000「Ⅸ成法寺遺跡第17次調査(SH98-17)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』　財団法人八尾市文化財調査研究会
⑧	SH83-２	清水町２	360	古墳時代後期の掘立柱建物、古墳時代初頭の溝・土坑	高萩千秋1991「第３章第２次調査(SH83-２)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告33　財団法人八尾市文化財調査研究会
⑨	SH82-１	清水町２	207	奈良時代の掘立柱建物	原田昌則1991「第２章第１次調査(SH82-１)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告33　財団法人八尾市文化財調査研究会
⑩	SH91-８	南本町２	約350	奈良時代の溝・落ち込み	坪田真一1996「Ⅱ成法寺遺跡第８次調査(91-８)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団法人八尾市文化財調査研究会
⑪	SH91-７	清水町２	約690	中世の耕作溝、奈良時代の掘立柱建物・井戸、古墳時代前期の溝・土坑	坪田真一1996「Ⅰ成法寺遺跡第７次調査(94-７)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団法人八尾市文化財調査研究会
⑫	SH83-３	清水町２	812	鎌倉時代の耕作溝・井戸、奈良時代の掘立柱建物・土坑、土馬出土	高萩千秋1991「第４章第３次調査(SH81-３)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告33　財団法人八尾市文化財調査研究会
⑬	2004-448	陽光園１	18	－	岡田清一2006「14.成法寺遺跡(2004-448)の調査」『八尾市内文化財平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53　平成17年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
⑭	2007-130	明美町１	12.5	－	西村公助2008「２．平成19年度４～12月の発掘調査」『八尾市内文化財平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
⑮	2007-131	明美町１	6.25	－	西村公助2008「２．平成19年度４～12月の発掘調査」『八尾市内文化財平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
⑯	95-１調査	南本町１	240	中世の井戸・土坑、奈良時代の自然河川(墨書人面土器出土)	地村邦夫1997「第３章－第２節　平成７年度調査の概要」『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅸ』大阪府教育委員会
⑰	2007-32	南本町１	6	鎌倉時代の溝	西村公助2008「２．平成19年度４～12月の発掘調査」『八尾市内文化財平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
⑱	1994年度	南本町１	36	平安後期～鎌倉時代の建物・井戸・溝・土坑	岩瀬　透1995「第Ⅲ章－第１節Ａ地区(成法寺遺跡)」『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅷ』大阪府教育委員会
⑲	JHG93-２	南本町１	－	中世の溝・土坑	中村清美1994「第２章－２　成法寺遺跡(JHG93-1)調査区」『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ－八尾市南本町１丁目所在及び八尾市東本町５丁目所在(東郷遺跡)－』大阪府教育委員会
⑳	JHG93-１	南本町１	－	中世の井戸・溝・土坑	中村清美1994「第２章－２　成法寺遺跡(JHG93-1)調査区」『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ－八尾市南本町１丁目所在及び八尾市東本町５丁目所在(東郷遺跡)－』大阪府教育委員会
㉑	90-356	南本町１	約168	－	吉田野乃1992「４．成法寺遺跡(90-356)の調査」『八尾市内文化財平成３年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25　平成３年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㉒	2007-268	南本町１	6.25	－	樋口　薫2008「２－10．成法寺遺跡(2007-268)の調査」『八尾市内文化財平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㉓	2002-266	南本町１	9	－	西村公助2003「18.成法寺遺跡(2002-266)の調査」『八尾市内文化財平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48　平成14年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㉔	2004-119	南本町２	8	－	西村公助2005「31.成法寺遺跡(2004-119)の調査」『八尾市内文化財平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告50　平成16年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㉕	SH2007-20	南本町２	約22	中世の井戸・溝	河村恵理2008「８．成法寺遺跡第20次調査(SH2007-20)」『平成19年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
㉖	2002-002	南本町２	8	－	樋口　薫2004「３.成法寺遺跡(2002-２)の調査」『八尾市内文化財平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49　平成15年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㉗	2007-137	南本町３	8	鎌倉時代の溝・土坑	西村公助2008「２－８．成法寺遺跡(2007-137)の調査」『八尾市内文化財平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㉘	SH95-15	南本町３	425	中世の井戸・土坑・溝	西村公助2006「Ⅱ成法寺遺跡第15次調査(SH95-15)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』財団法人八尾市文化財調査研究会
㉙	SH94-13	南本町３	約210	中世の井戸・土坑・溝	西村公助1996「Ⅰ成法寺遺跡第13次調査(SH94-13)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』財団法人八尾市文化財調査研究会
㉚	SH90-６	南本町４	168	中世の堀	原田昌則1991「第６章第６次調査報告(SH90-６)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告33　財団法人八尾市文化財調査研究会
㉛	府教委６次	南本町１	約400	中世の井戸・土坑	宮野淳一・西川寿勝1992『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅵ-八尾市南本町１丁目所在-』大阪府教育委員会
㉜	府教委１次	南本町１	－	中世の生産域、古墳時代初頭の墓域	嶋村友子1986『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ－八尾市南本町所在－』大阪府教育委員会
㉝	府教委２次	南本町１	－	中世の耕作溝、古墳時代前期の掘立柱建物・竪穴住居・溝・土坑	岩瀬　透1987『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南本町所在－』大阪府教育委員会
㉞	府教委３次	－	－	－	『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
㉟	府教委４次	高美町１	110	中世の耕作溝、古墳時代中期の竪穴住居・井戸・溝、古墳時代初頭の溝	亀島重則1990『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会
㊱	92-561	高美町１	16.24	－	渕　斎1993「５.成法寺遺跡(93-561)の調査」『八尾市内文化財平成４年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告28　平成４年度公共事業　八尾市教育委員会
㊲	平成４年度	南本町１	－	古墳時代前期の溝	宮野淳一1994「付載　成法寺遺跡　平成４年度の調査」『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ－八尾市南本町１丁目所在及び八尾市東本町５丁目所在(東郷遺跡)－』大阪府教育委員会
㊳	府教委５次	高美町１	360	古墳時代前期の竪穴住居・井戸、弥生時代中期の方形周溝墓	山上　弘1989『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ』大阪府教育委員会
㊴	63-035	高美町１	4.08	古墳時代前期の小穴	近江俊秀1989「５.成法寺遺跡(63-035)の調査」『八尾市内文化財昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19　昭和63年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㊵	SH88-４	南本町１	540	古墳時代初頭の方形周溝墓	高萩千秋1991「第５章第４次調査(SH88-４)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告33　財団法人八尾市文化財調査研究会
㊶	94-300	南本町１	63	－	渕　斎1995「９.成法寺遺跡(94-300)の調査」『八尾市内文化財平成６年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告31　平成６年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㊷	SH2001-18	高美町１	約875	古墳時代前期の竪穴住居・溝	森本めぐみ2002「17.成法寺遺跡第18次調査(SH2001-18)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
㊸	94-189	高美町１	18	古墳時代前期の落ち込み(多量の古式土師器出土)	渕　斎1995「８.成法寺遺跡(94-189)の調査」『八尾市内文化財平成６年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告31　平成６年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

番号	調査名略号	所在地（丁目）	面積（㎡）	主な調査成果	文献
㊹	SH95-16	高美町１	15	－	西村公助1996「Ⅸ成法寺遺跡第16次調査(SH95-16)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』財団法人八尾市文化財調査研究会
㊺	98-502	高美町１	12	中世の土坑・落ち込み状遺構、古墳時代初頭の小穴・溝	吉田野乃2000「３.成法寺遺跡(98-502)の調査」『八尾市内文化財平成11年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告42　平成11年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㊻	2005-86	高美町１	9	－	西村公助2006「14.成法寺遺跡(2004-448)の調査」『八尾市内文化財平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53　平成17年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
㊼	SH93-11	高美町１	約30	古墳時代前期の土坑	高萩千秋1994「Ⅶ成法寺遺跡第11次調査(SH93-11)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』財団法人八尾市文化財調査研究会
㊽	SH93-12	高美町１	180	中世の耕作溝、奈良時代の井戸・溝・自然河川より墨書人面土器出土、古墳時代中期～後期の周溝墓	坪田真一1994「Ⅸ成法寺遺跡第12次調査(SH93-12)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』財団法人八尾市文化財調査研究会
㊾	SH94-14	高美町２	124	奈良時代後期～平安時代前期の自然河川、古墳時代中期の周溝墓、円筒埴輪・朝顔形埴輪片出土、弥生時代後期の溝・土坑	原田昌則1996「Ⅲ成法寺遺跡第14次調査(94-14)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団法人八尾市文化財調査研究会
㊿	SH93-10	高美町１	約50	鎌倉以降の耕作溝、古墳時代初頭の小穴・土坑	高萩千秋1994「Ⅶ成法寺遺跡第12次調査(SH93-10)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』財団法人八尾市文化財調査研究会
(51)	SH2003-19	高美町２	35	－	西村公助2004「Ⅷ成法寺遺跡第19次調査(SH2003-19)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告78』財団法人八尾市文化財調査研究会
(52)	YH98-５	高美町３	約24	奈良時代後期～平安時代前期の自然河川	森本めぐみ2000「ＸⅣ　矢作遺跡第５次調査(YH98-5)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会
(53)	YH97-220	高美町３	約20.5	古墳時代前期の土坑	吉田珠己1998「14-2.矢作遺跡(97-220)の調査」『八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告書Ⅰ』　八尾市文化財調査報告38　平成９年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(54)	YH98-６	高美町３	約23	中世の溝、奈良時代後期～平安時代前期の自然河川、古墳時代後期の溝・小穴・土坑	西村公助2000「ＸＶ矢作遺跡第６次調査(YH98-6)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会
(55)	YH1986年	高美町３	240	中世の井戸、古墳時代後期の掘立柱建物・大溝(物部氏の屋敷跡か)、古墳時代前期の溝(鏡出土)	米田敏幸1987「矢作遺跡遺跡調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』　八尾市文化財調査報告15　昭和61年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(56)	YH2006-104	高美町３	8	平安時代後期の小穴	坪田真一2007「2-25矢作遺跡(2006-104)の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(57)	YH2004-154	高美町３	1.44	－	樋口　薫2005「48矢作遺跡(2004-154)の調査」『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告50　平成16年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(58)	YH63-253	高美町４	16	－	近江秀俊1989「14.矢作遺跡(63-253)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19　昭和63年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(59)	YH91-189	高美町３	20	中世の土坑・小穴、古墳時代初頭の土坑・小穴	澄　斎1992「14.矢作遺跡(91-189)の調査」『八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25　平成３年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(60)	YH87-262	高美町３	約28	古墳時代初頭の土坑・小穴	嶋村友子1988「９.矢作遺跡(87-262)の調査」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告17　昭和62年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(61)	YH86-１	高美町３	1000	平安時代後期～鎌倉時代末期の掘立柱建物・井戸・池状遺構・土坑、古墳時代後期の溝、古墳時代初頭の溝	原田昌則1989「Ⅰ　矢作遺跡(第１次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要－平成元年度－』財団法人八尾市文化財調査研究会報告22　財団法人八尾市文化財調査研究会
(62)	YH89-039	高美町３	8	－	米田敏幸1990「14.矢作遺跡(89-039)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20　平成元年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(63)	YH87-２	高美町４	－	奈良時代後期～平安時代前期の自然河川、古墳時代後期の溝・小穴・土坑、埴輪・鉄刀、古墳時代初頭の土坑	成海佳子1989「Ⅱ　矢作遺跡(第２次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要－平成元年度－』財団法人八尾市文化財調査研究会報告22　財団法人八尾市文化財調査研究会
(64)	YH2004-85	高美町４	4	－	西村公助2005「47　矢作遺跡(2004-85)の調査」『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告50　平成16年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(65)	YH63-078	高美町４	3	古墳時代前期の円形周溝墓	近江秀俊1989「19.矢作遺跡(63-078)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19　昭和63年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(66)	YH2007-119	高美町４	4.5	－	成海佳子2008「2-19矢作遺跡(2007-119)の調査」『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(67)	YH90-201	高美町４	約6	－	吉田野々1991「９.矢作遺跡(90-201)の調査」『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告23　平成２年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(68)	YH86-506	南本町６	75	鎌倉時代以降の神社跡	嶋村友子1988「３.矢作遺跡(86-506・87-404)の調査」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』　八尾市文化財調査報告17　昭和62年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(69)	YH87-404	南本町６	75	鎌倉時代以降の神社跡	嶋村友子1988「３.矢作遺跡(86-506・87-404)の調査」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』　八尾市文化財調査報告17　昭和62年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(70)	YH2007-66	安中町８	12	中世の自然河川と耕作溝	荒川和哉2008「平成19年度4～12月の発掘調査一覧」『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(71)	YH2003-270	高美町６	16	－	西村公助2004「37矢作遺跡(2003-270)の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49　平成15年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(72)	YH2004-302	松山町２	12	中世の自然河川	原田昌則2005「49矢作遺跡(2004-32)の調査」『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告50　平成16年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(73)	YH95-739	松山町２	8	－	吉田野々1997「20.矢作遺跡(95-739)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　平成8年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(74)	YH2007-139	松山町２	2.25	中世の自然河川と耕作溝	荒川和哉2008「平成19年度4～12月の発掘調査一覧」『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(75)	YH90-302	高美町６	約40	奈良時代の自然河川	澄　斎1991「７.矢作遺跡(90-302)の調査」『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告23　平成２年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(76)	YH97-218	明美町２	4	－	吉田珠己1998「14-1.矢作遺跡(97-218)の調査」『八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告書Ⅰ』　八尾市文化財調査報告38　平成９年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(77)	YH2005-66	高美町５	8	中世の自然河川と耕作溝	原田昌則2006「25.矢作遺跡」『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』　八尾市文化財調査報告53　平成17年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(78)	YH2006-188	安中町８	16.5	－	菊井佳弥2007「平成18年度4～12月の調査一覧」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(79)	YH90-72	安中町８	2	－	澄　斎1991「８.矢作遺跡(90-72)の調査」『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告23　平成２年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(80)	YH95-313	南本町３	8	鎌倉時代の土坑、平安時代の土坑	吉田珠己1996「４.矢作遺跡(95-313)の調査」『八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告34　平成７年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
(81)	YH95-３	南本町８	約285	鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・土坑、平安時代初頭の耕作溝・水路	岡田清一2004「Ⅶ矢作遺跡（第３次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会
(82)	YH96-４	南本町８	約276	鎌倉時代前期の掘立柱建物・井戸・土坑、鎌倉時代初頭の耕作溝、平安時代前期の井戸・溝・足跡	岡田清一2004「Ⅷ矢作遺跡（第４次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会
(83)	RK90-１	陽光園２	200	鎌倉時代～室町時代の溝(呪付木簡出土)	坪田真一1990「21.竜華寺跡(RK90-１)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告28　財団法人八尾市文化財調査研究会
(84)	RK93-３	陽光園２	約170	平安時代後期～室町時代の井戸・土坑・小穴・溝	高萩千秋1998「Ⅲ竜華寺跡第３次調査(RK93-３)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告59』財団法人八尾市文化財調査研究会
(85)	RK90-１	陽光園２	200	室町時代の溝	坪田真一1990「21.竜華寺跡(RK90-１)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告28　財団法人八尾市文化財調査研究会

SH・JHG：成法寺遺跡　YH：矢作遺跡　RK：竜華寺跡、府教委：大阪府教育委員会



●居住域　★墓域　▼生産域　◎河川（自然堤防を形成している）　河川①、河川②の範囲を表す

第２図　調査地周辺の既往の調査成果（S＝1/15000）

第２章　調査の方法と経過

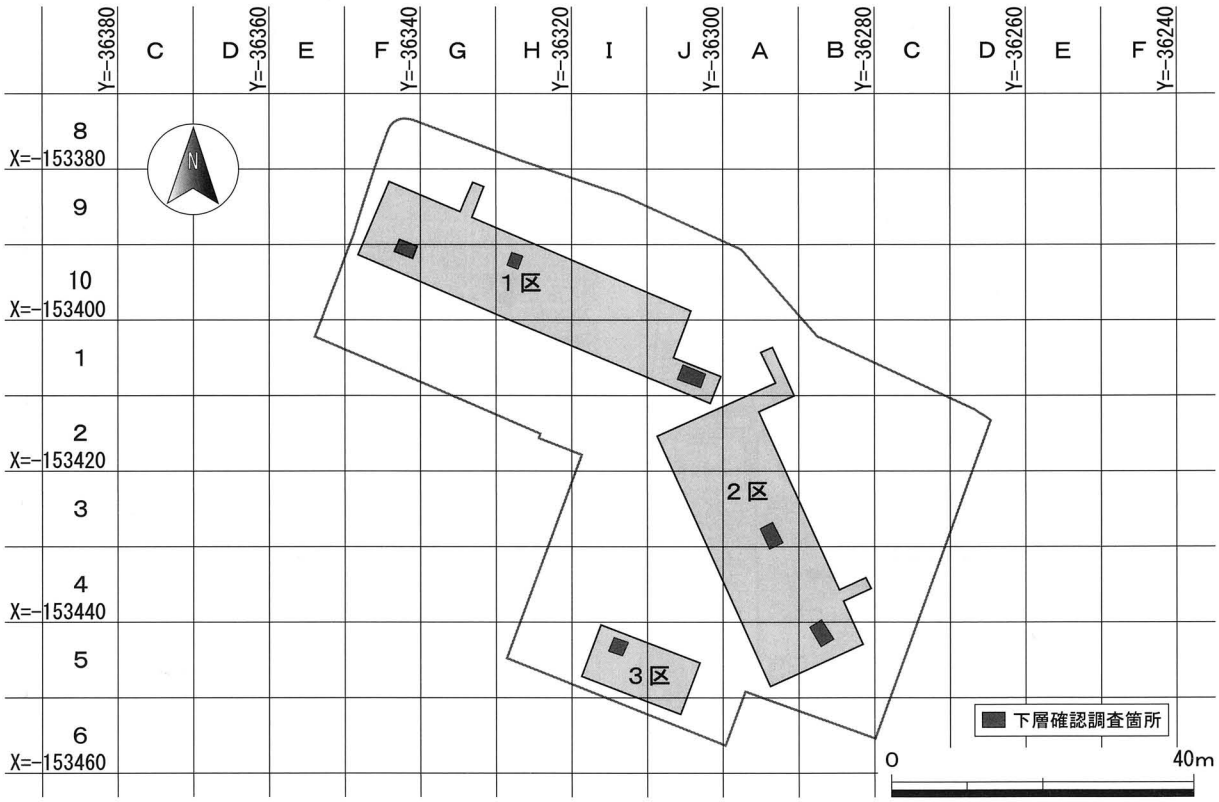
今回の調査は、市営住宅建替えに伴って行われたもので、建物本体の基礎部分に２箇所、浄化水槽設置部分に１箇所の合計３箇所に調査区を設定し、調査を行った。調査地総面積は約1104㎡である。

調査区は、建物本体部の北西側から順に「１・２区」、南隅の浄化水槽設置部を「３区」と呼称した。なお、１・２区については、既往建物の基礎杭や、これらの解体作業により攪拌されており、１区は北東側一帯、２区は南隅の大部分が攪乱であった。ただし一部、破壊の及ばない箇所が残ることから、攪乱部分も慎重に調査を行った。

各調査区の平面形状と規模は、１区は北西－南東方向に長辺をもつ長方形を呈し、北西部と南東部の２箇所に突出部がある。面積は約487㎡を測る。２区は北西－南東方向に長辺をもつ長方形を呈し、北東部と南東部の２箇所に突出部がある。なお、調査設計当初、南西部に一箇所１×２ｍを測る突出部を設定していたが、既往建物による破壊が想定できたので、市教委との協議の上、調査は行わなかった。面積は約513㎡を測る。３区は北西－南東方向に長辺をもつ長方形を呈し、面積は約103㎡を測る。

地区割については、調査地の中央北寄りに、国土座標第Ⅵ系（世界測地系）の通る基準点（X=-153.400、Y=-36.300）を基点とし、地区名を東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｊ）、南北方向は算用数字（北から１～10）で示し、地区の表示は１Ａ～10Ｊ地区と呼称した。

掘削は、重機による機械掘削と、人力掘削によって行った。現地表（T.P.＋10.8m）下0.8～1.2



第３図　調査区配置図（Ｓ＝1/1000）

写真１　調査前状況(南東から)

写真２　１区機械掘削状況(西から)

m前後を機械掘削、以下の0.2～1.2m前後までを人力掘削した。平面調査終了後、各調査区内において１～３箇所(約2.5m四方)を、深さ約1.0mまで機械と人力掘削を併用して下層確認調査を行った。１区については、旧耕作土層を除去する程度で、機械掘削を終了し、人力掘削により慎重に調査を進めた結果、さらに下層部が機械掘削可能であることが判明した為、２・３区ではさらに深くまで機械掘削を行った。

調査は、2007年12月11日に着手し、１区から開始した。１区は2008年１月21日に下層確認調査を終了し、埋め戻しを開始。１区埋め戻し終了後の２月25日より、２区の調査を開始した。３区については、２区の進歩状況に合わせて、２月６日より並行して調査を行った。２区は２月21日に下層確認調査を終了し、埋め戻しを開始。３区は２月28日に下層確認調査を終了し、２月29日をもって全ての調査を完了した。

遺構面は、調査の結果、１区では第１面で近世以降、第２面で近世、第３面で中世以降、第４面で中世及び古代の遺構群を検出した。２区では第１面で近世以降、第２面で近世、第３面で中世以降の遺構群を検出した。３区では第１面で近世以降、第２面で中世以降、第３面で中世の遺構群を検出した。

遺構番号は調査区ごとに付け、前一桁で調査区、次の一桁で遺構面、ただし１区第４面に関しては調査の都合上さらに２面(４・５)に細分、後二桁で通し番号を示す。遺構名は「遺構番号」＋「遺構略号」で表示した。なお、今回の調査地が中世～近世の生産域が重層的に続く地域であり、広く下層部の削平が及ぶことから、同一検出面上で、時期の異なる遺構が多数混在していた。この為、整理作業時に再度、遺構埋土及び出土遺物の特徴より、遺構時期の整理を行った。

第３章　調査概要

第１節　基本層序

今回の調査地は、近世以降の耕作や旧市営住宅建物の建築・解体等によって、調査地全体の地層は広い範囲で削平及び攪拌されていた。当調査で確認できた現地表下2.5mのうち、現地表下1.0～1.4mまでは近世以降に堆積した土層が占め、中世～古代の包含層は層厚0.1～0.2m前後であった。

１～３区について比較したところ、１区に比べて２・３区の中世～古代に相当する堆積層や遺構の残存状況が希薄であった。おそらく、調査地西地点（１区南西端）と調査地東地点（２区南東端）の中世堆積層（第５層）上面の高低差が約0.3mに及ぶことから、標高地の高い南東側の調査区（２・３区）で特に、近世以降の土地利用による削平が顕著に表れているものと言える。以下、各層の特徴を記す。

第０層：既往建物の建築・解体に伴う盛土・攪乱層。解体に伴う攪乱層は、１区では北東側一帯に集中する。浅い部分ではベース面の第７ｂ層上面で収束するが、調査区中央部を南－北に並列する既往建物の基礎杭や北端の旧防火水槽部の破壊深度は深く、第７ｂ層にまで達する。２区南東隅でも既往建物の基礎杭が東－西に並列し、破壊深度は第７ｂ層まで達する。

第１層：旧耕作土層。旧市営住宅建築（昭和40年代）直前の堆積。上部が旧市営住宅建築時の整地土に覆われていた為、畦畔の痕跡が顕著に残る。当該層の堆積は、調査地全体に認められた。層厚0.04～0.2mを測る。土質は黒色粗砂混中～細砂に径0.5cm大の礫が多量に混じる。調査地一帯は広く耕作地として利用されていた。

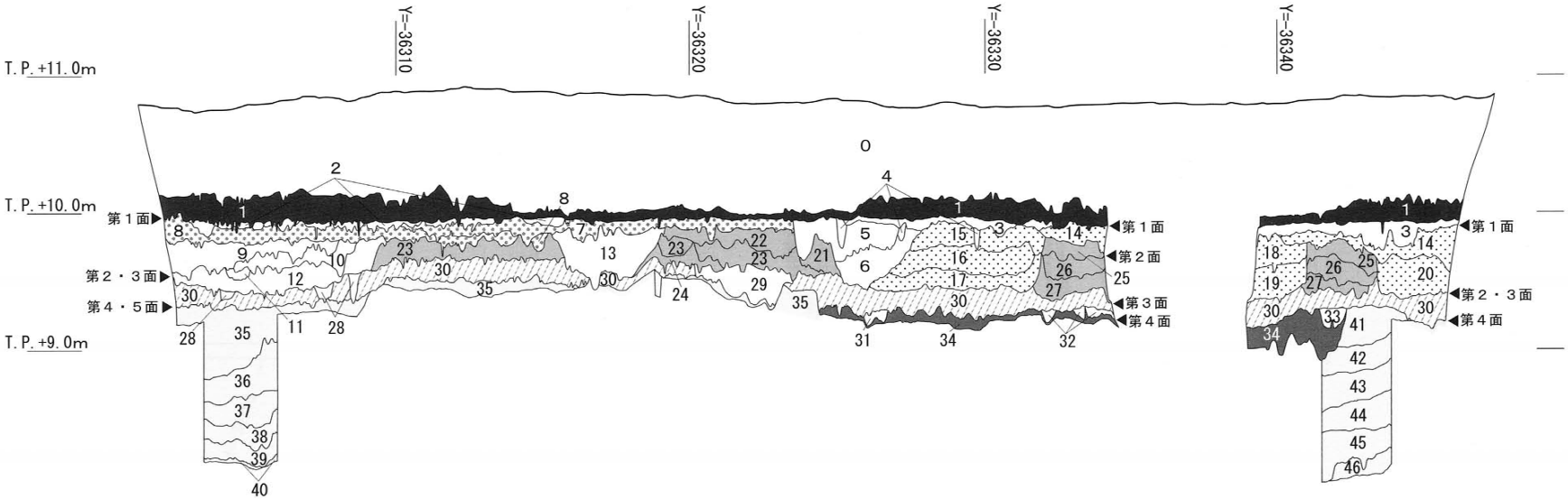
第２層：近世以降耕作土層。土質は灰色細礫～シルトに径0.5～1.0cm大の礫が少量混じる。当該層上面と下面で近世以降の耕作溝を多数検出した。

第３ａ層：近世耕作土層。土質は灰色礫混中砂である。２・３区に堆積が見られることから、調査地の東側を中心に近世耕作地が広がっていたものと推察できる。島畠間を埋めるように堆積しており、水田などの耕作地として利用されていたものと考えられる。

第３ｂ層：島畠埋没時の氾濫堆積土層。土質はにぶい黄色粗礫～中砂に、灰色シルトを巻き上げる。１区の北半部では、層厚0.5mに及び、さらに２層に細分できる。上部は葉理が見られない堆積層であるが、下部は水平方向の葉理が顕著に見られる堆積層であった。以上のことから、少なくとも２度の洪水によって堆積したものと推測できる。当該層の堆積は、前述した１区北半部で顕著に見られ、２区や３区では島畠間に薄く堆積するに留まる。以上のことから、１区北半周辺を中心に流路の氾濫が生じたものと推測できる。

第４層：島畠造成土層。土質は灰オリーブ色粗砂混中～細砂に浅黄色中～細砂が混じる。各調査区で堆積が見られ、調査地全体に島畠が広がっていたことが推測できる。

第５層：水田耕作土層①。土質は灰色中砂混細砂～シルトに灰オリーブ色中～細砂が斑点状に混じる。各調査区で堆積が見られ、調査地全体に耕作地が広がっていたことが推測できる。

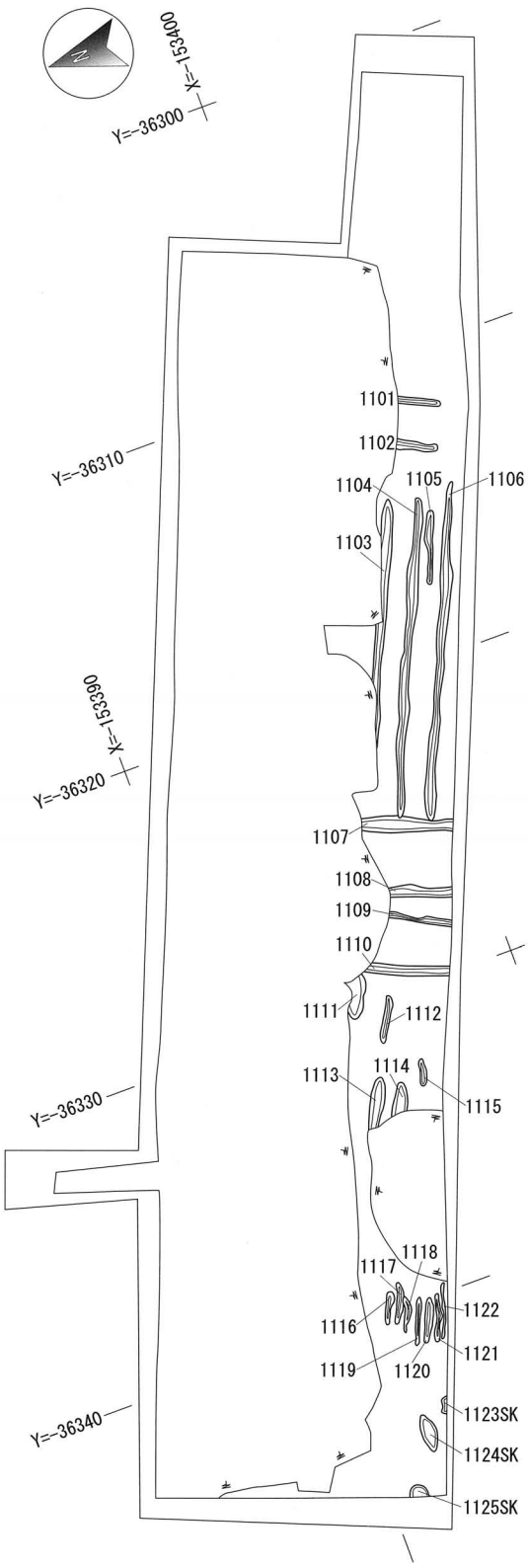


1　5Y2/1黒色粗砂混中～細砂に、径～0.5cm大の礫が多量に混じる
2　7.5Y5/1灰色細礫混粗～中砂(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)
3　10Y4/1灰色細礫～粗砂混中砂に、径～１cm大の礫が少量混じる
4　10Y5/1灰色細礫～粗砂混中砂
5　7.5Y6/2灰オリーブ色細礫混粗砂(径～0.3cm大の礫が少量混じる)
6　5Y5/1灰色細礫混中砂に、23の崩壊ブロック土が混じる
7　10Y5/1灰色中砂混細砂～シルト(径～0.3cm大の礫が少量混じる)
8　5Y6/2灰オリーブ色粗砂混中～細砂に、5Y7/3浅黄色中～細砂が混じる
9　2.5GY5/1オリーブ灰色中礫混粗～細砂(径～0.5cm大の礫を多量に混じる)
10　2.5GY4/1暗オリーブ灰色細礫混中～細砂に、10G4/1暗緑灰色シルトがブロック状に微量に混じる
11　2.5Y5/2灰オリーブ色細礫混中砂に、10に見られたシルトブロックが多量に混じる
12　2.5Y5/3灰オリーブ色細礫混中砂に、10GY4/1暗緑灰色粗砂混細砂～シルトがブロック状に混じる
13　10Y4/1灰色粗砂混細砂と、5Y5/2灰オリーブ色中礫混中砂が混じる。さらに5Y6/3オリーブ黄色細砂が混じる(土師器片を微量に含む)(径～0.8cm大の礫が多量に混じる)
14　2.5Y6/4にぶい黄色粗礫～中砂に、5Y5/1灰色シルトが下層部を中心に微量に混じる
15　5Y7/2灰白色細礫～粗砂(径～1.0cm大の礫が多量に混じる)
16　10Y6/1灰色中～細砂をベースに、7.5Y6/2灰オリーブ色中礫～粗砂がラミナ状に入る
17　5GY5/1オリーブ灰色中～細砂
18　2.5Y6/3にぶい黄色径0.5～1.0cm大の礫と中礫～粗砂の互層
19　2.5Y7/2灰黄色中～細砂(波状のラミナ見られる)肩部に堆積土30の崩壊ブロック土を含む
20　5Y7/3浅黄色細礫～細砂に、10Y4/1灰色シルトに径～0.5cm大の礫が多量に混じる土層が帯状に入る
21　10GY4/1暗緑灰色細砂～シルトと、2.5GY5/1オリーブ灰色粗～中砂が混じる(土師器片含む)
22　5Y5/2灰オリーブ色細礫～粗砂混細砂(径～0.3cm大の礫が少量混じる)
23　5Y6/2オリーブ色粗砂混中～細砂に、5Y7/3浅黄色中～細砂が混じる
24　堆積土23をベースに、5Y7/3浅黄色粗砂が混じる
25　5GY4/1暗オリーブ灰色中礫混粗～細砂(少量の鉄分沈着)(炭化物を微量に含む)
26　10Y4/1灰色粗砂混細砂～シルト(径～1.5cm大の礫が少量混じる)(鉄分が微量に沈着)(土師器片含む)
27　10Y5/1灰色中礫～粗砂混粘質シルト(土師器片含む)
28　7.5GY4/1暗緑灰色シルト(鉄分が多量に沈着)
29　10Y4/1灰色細礫混細砂(鉄分が少量沈着)(土師器皿片含む)
30　10Y5/1灰色中砂混細砂～シルトに、7.5Y6/2灰オリーブ色中～細砂が斑点状に混じる(瓦器片・土師器片を微量に含む)
31　10Y5/1灰色細砂～シルトと、5GY6/1オリーブ灰色細砂が混じる
32　10Y5/1灰色細砂混シルト(土師器片含む)
33　10Y6/1灰色中礫～粗砂(径～1.0cm大の礫が少量混じる)と、10Y5/1灰色中砂混細砂が混じる
34　10Y3/1オリーブ黒色細砂に、同色の粘土ブロック混じる(10Y7/1灰白色中砂が波状に入る)
35　7.5GY5/1緑灰色シルト(鉄分が多量に沈着)
36　10YR5/4にぶい黄褐色細砂
37　2.5GY5/1オリーブ灰色細砂～粘質シルト
38　5GY5/1オリーブ灰色粘質シルト
39　2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂～シルトと、2.5GY6/1オリーブ灰色中～細砂が混じる
40　5GY5/1オリーブ灰色細砂～シルト
41　10Y4/1暗緑灰色粗砂混細砂～シルト(土師器片含む)
42　5GY5/1オリーブ灰色中～細砂
43　10GY4/1暗緑灰色粘質シルト
44　5GY4/1オリーブ灰色粗砂～細砂と、7.5GY4/1暗緑灰色粘質シルトが混じる
45　5GY6/1オリーブ灰色細礫～粗砂

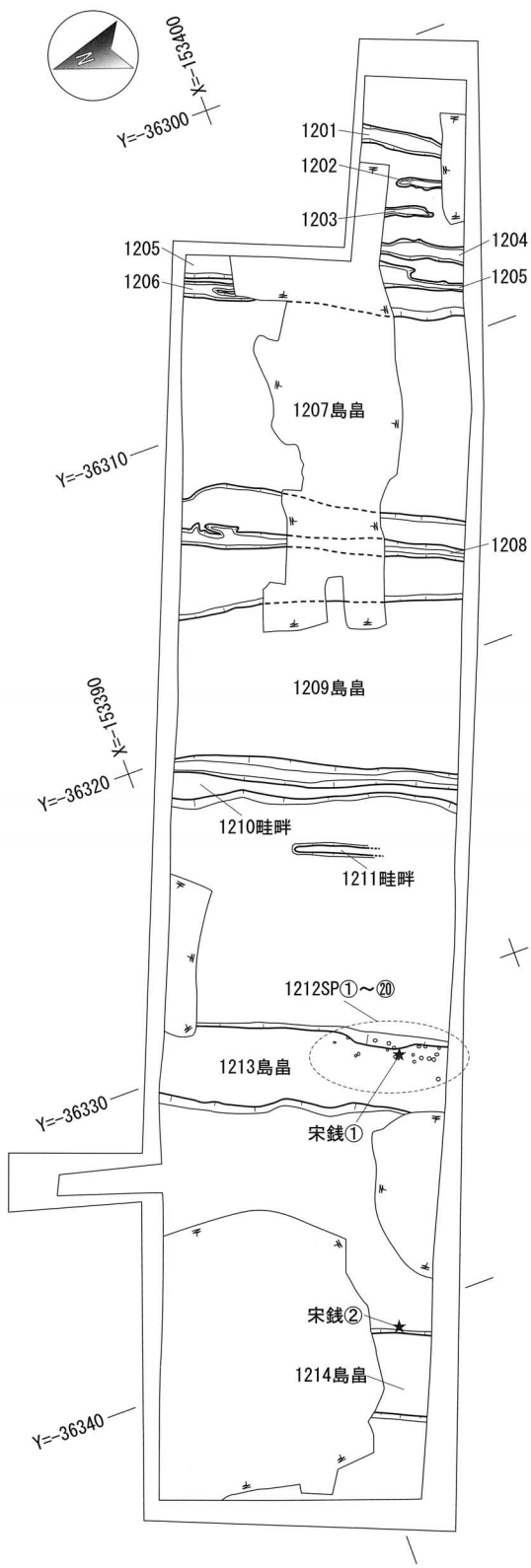
第１層
第２層
第３ａ層
第３ｂ層
第４層
第５層
第６層
第７ａ層
第７ｂ層

1m
0
10m

第４図　１区南壁断面図(Ｓ＝垂直：1/50、水平：1/250)



第１面

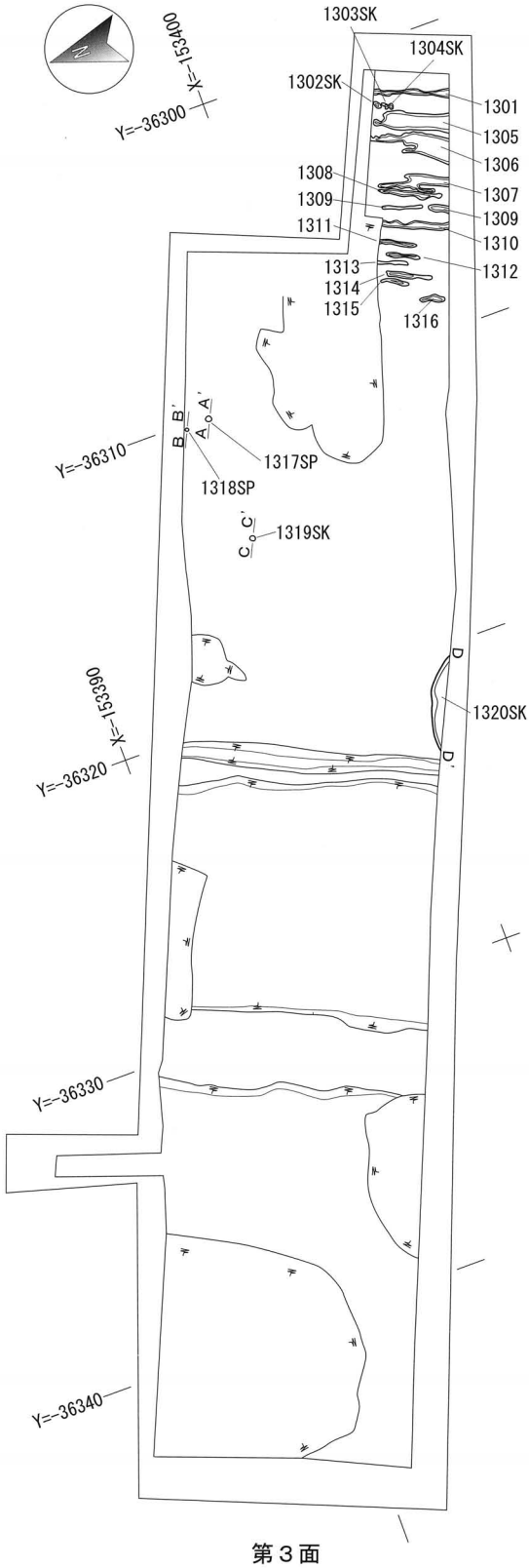


第２面

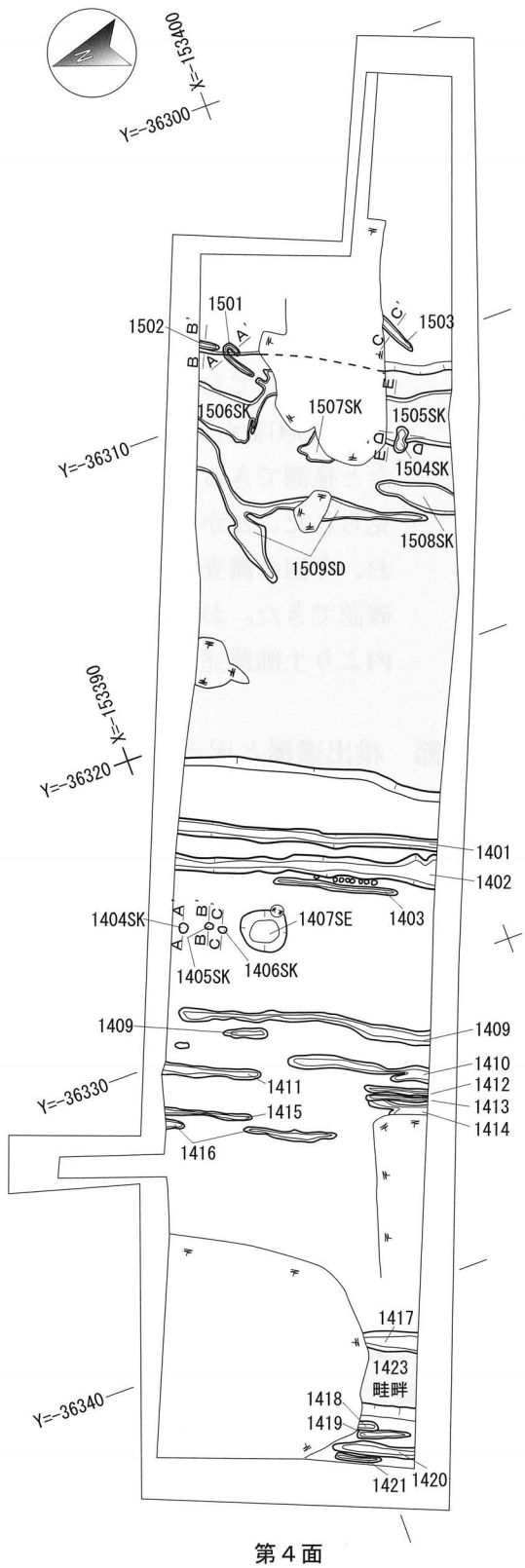
※遺構名のうちＳＤについては遺構略号省略

0　10m

第５図　１区第１・２面平面図（Ｓ＝1/250）



第３面



第４面

微高地状の高まり

※遺構名のうちＳＤについては遺構略号省略

0　10m

第６図　１区第３・４面平面図（Ｓ＝1/250）

第６層：畦畔状の高まりを構築する土層。中世以降の土地利用によって削平され、２区の一部でのみ確認できた。

第７ａ層：水田耕作土層②。土質は暗緑灰色粗砂混細砂～シルトである。当該層の堆積は１区北半のみで確認できたことから、地形的に下がっている土地を利用した水田であったものと推測できる。

第７ｂ層：自然堆積層。下層確認調査より層厚1.0m以上の堆積が確認できた。土質は緑灰色シルトである。当該層の堆積は、調査地全域で確認できた。前章で述べた自然堤防が形成された時期に相当する。時期は奈良時代以降に比定できる。当該層はT.P.+9.5m前後に堆積しており、西側に若干下がっている。１区中央部では、当該層上面で古代の遺構(1500番台遺構)を検出したが、埋土の状況より、本来の遺構構築面は上層部であったと推測できる。１区東端では当該層上部に酸化鉄及び二酸化マンガン斑紋が顕著に見られたことから、この箇所では、これらの遺構はなんらかの影響を受けている。なお、今回の調査では当該層を母材とする土壌化層(第７ａ層)の堆積は１区西側のみで確認できた。おそらく上層による攪拌が著しい為、削平されたものと考えられる。層内より土師器甕(８世紀後半)が数点出土した。

第２節　検出遺構と出土遺物

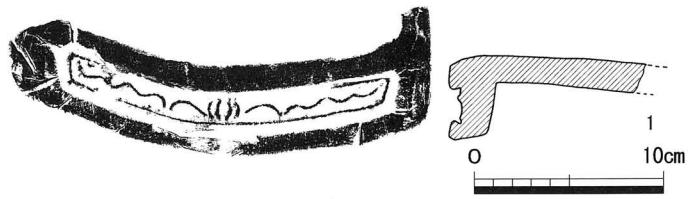
(１)１区(第４～６図)

９Ｆ～２Ｊ地区に位置し、東西43.33m×南北10.49mを測る長方形に、北壁面からのびる東西1.4m×南北4.4mを測る突出部、東壁面からのびる東西6.6m×南北4.0mを測る突出部を持つ調査区を設定した。当調査区の面積は約487㎡を測る。

調査は、現地表面(T.P.+10.7～11.0m)から約0.7～0.8mまで機械掘削し、人力掘削を約0.5～0.6m地点まで行った。なお、調査終了後、調査区東端部と西端部の２箇所で機械掘削により深さ1.0m(T.P.+8.0m前後)までの下層部を確認した。

・第１層出土遺物(第７図-１)

当該層中に包含する遺物の大半は、砕片であった。図化した１は、第１面遺構検出時(第４図－５・６層掘削時)に出土した遺物であり、近世の桟瓦である。凹面の両側縁に縦桟が見られる。瓦当面の文様は、小型宝珠文を中心飾りとする均整唐草文が施される。



第７図　第１層出土遺物実測図(S=1/4)

・第１面(第５図、図版一)

第０層の盛土と第１層の旧耕土を除去したところ、第１層下面で近世以降の耕作溝群22条(1101～1122ＳＤ)、土坑３基(1123～1125ＳＫ)を検出した。現地表面下約1.0m(T.P.+10.0m)地点に広がる。調査区北半部では、後世の土地利用によって広く破壊されており、遺構を検出すること

はできなかった。南半部で検出された遺構は、調査区下面に拡がる島畠が、第３ｂ層によって埋没した後に構築されてから、旧市営住宅建築以前まで存続していたものと推測できる。遺構は、埋土の特徴や遺構の切り合い関係によって、少なくとも２時期に分類できる。当該面で検出された耕作溝・島畠は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第１面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝（ＳＤ）

1101・1102ＳＤ（第２表）

調査区１Ｉ地区で検出した耕作溝群である。ともに10GY4/1暗オリーブ灰色細礫混粗～中砂の単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は各溝から瓦器・須恵器・土師器の砕片が出土した。

1103～1106ＳＤ（第２表）

調査区10Ｈ・Ｉと１Ｉ地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y4/1灰色細礫～粗砂混中～細砂の単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。遺物は各溝から国産陶磁器・瓦質土器・土師器（擂鉢など）、近世平瓦の砕片が出土した。当該溝群のうち1104・1106ＳＤが、1107ＳＤ埋没後に構築されていることから、当該溝群の西側に並列する耕作溝群より新しい時期に相当することが推察できる。

1107～1110ＳＤ（第２表）

調査区10Ｈ地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y5/1灰色細礫～粗砂混中砂の単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は各溝から土師器の砕片が出土した。

1111～1115ＳＤ（第２表）

調査区10Ｇ・Ｈ地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y4/1灰色細礫混粗～中砂の単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。遺物は各溝から瓦質土器・土師器の砕片が出土した。

1116～1122ＳＤ（第２表）

調査区10Ｆ・Ｇ地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y5/1灰色中砂混細砂～シルトの単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。遺物は各溝から土師器の砕片が出土した。

第２表　１区第１面耕作溝（ＳＤ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1101 ＳＤ	１Ｉ	(1.43)	0.24	8.2	1112 ＳＤ	10Ｇ	1.62	0.24	3.9
1102 ＳＤ	〃	(1.38)	0.23	〃	1113 ＳＤ	〃	(1.72)	0.45	3.8
1103 ＳＤ	10Ｈ・Ｉ、１Ｉ	(8.72)	0.38	10.0	1114 ＳＤ	〃	(0.98)	0.48	6.9
1104 ＳＤ	〃	10.65	0.32	12.1	1115 ＳＤ	〃	0.94	0.20	8.2
1105 ＳＤ	１Ｉ	2.52	0.26	11.3	1116 ＳＤ	10Ｆ・Ｇ	1.10	0.25	8.1
1106 ＳＤ	１Ｈ・Ｉ、10Ｈ	11.35	0.38	10.7	1117 ＳＤ	〃	1.40	〃	7.2
1107 ＳＤ	10Ｈ	(3.00)	0.57	16.2	1118 ＳＤ	〃	(1.22)	0.20	6.5
1108 ＳＤ	〃	(2.15)	0.52	16.5	1119 ＳＤ	〃	1.58	0.18	5.8
1109 ＳＤ	〃	(2.10)	0.22	11.3	1120 ＳＤ	10Ｆ	〃	0.28	5.6
1110 ＳＤ	〃	(2.77)	0.30	18.0	1121 ＳＤ	10Ｆ・Ｇ	1.65	0.20	4.2
1111 ＳＤ	10Ｇ・Ｈ	(1.55)	0.68	9.0	1122 ＳＤ	〃	1.90	0.10	8.2

＊（　）内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値

土坑（ＳＫ）

1123～1125ＳＫ（第３表）

調査区10Ｆ地区で検出した。埋土は前述の1116～1122ＳＤ埋土と類似しており、同一時期の遺構であったものと推測できる。遺物は各土坑から土師器の砕片が出土した。

第３表　１区第１面土坑（ＳＫ）法量表

遺構名	地区	平面形	径(cm)	深さ(cm)
1123 ＳＫ	10Ｆ	－	58×(13)	14.0
1124 ＳＫ	〃	楕円形	130×53	10.0
1125 ＳＫ	〃	－	60×(42)	6.2

＊(　)内数値は検出径　　＊表記の数値は最大値

・第２面（第５図、図版二）

第２層の近世以降の耕作土と、第３ｂ層の氾濫堆積土を全て除去したところ、第４層上面で近世の島畠（1207・1209・1213・1214島畠）、耕作溝群７条（1201～1206・1208ＳＤ）、畦畔（1210・1211畦畔）、杭跡20基（1212ＳＰ①～⑳）を検出した。現地表面下約1.1m（T.P.+9.9m）地点に広がる。当該面で検出された島畠・耕作溝・畦畔は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南20°それぞれ傾きをもつ。当該遺構面は調査区北東半部を中心に以前として後世の攪乱がおよび、島畠造成土及び畦畔が一部削平される。

以下、当該面を「第２面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝（ＳＤ）

1201～1206ＳＤ（第４表）

調査区１・10Ｊ地区で検出した耕作溝群である。1201ＳＤは2.5GY5/1オリーブ灰色中礫混粗～細砂、1202～1206ＳＤは2.5Y4/1オリーブ灰色細礫混中～細砂に10GY4/1暗緑灰色シルトがブロック状に混じる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。埋土の特徴などから、1201ＳＤが若干新しい時期の遺構であることが推定できる。遺物は各溝から瓦器・土師器などの砕片が微量に出土した。

第４表　１区第２面溝（ＳＤ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1201 ＳＤ	１Ｊ	(2.70)	0.70	8.3
1202 ＳＤ	〃	(1.50)	0.30	8.2
1203 ＳＤ	〃	(1.20)	0.30	4.5
1204 ＳＤ	〃	(2.70)	0.70	5.3
1205 ＳＤ	１・10Ｊ	(4.10)	0.70	9.3
1206 ＳＤ	10Ｊ	(2.30)	0.30	11.10
1208 ＳＤ	１・10Ｉ	(9.25)	0.80	15.5

＊(　)内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値

1208ＳＤ（第４表）

調査区１・10Ｉ地区で検出した。当該溝は第４図-13層を除去したところ最下部で検出した。南北方向にのび、13層をベースとして、これに5Y6/3オリーブ黄色細砂が混じる単一層の埋土をもつ。排水路の役割を持つ溝である可能性が高く、13層堆積時に埋没したものと考えられる。遺物は、瓦質土器・須恵器・土師器の羽釜などの砕片が微量に出土した。

島畠（島畠）

1207島畠（写真３）

調査区１Ｈ・Ｊと10Ｉ・Ｊ地区で検出した。南北方向にのびる。当該島畠造成土の上部にあたる部分は、後世の耕作地などの土地利用により削平及び攪拌されており、本来の規模は不明である。唯一、残存する造成土1207-①を観察した結果、氾濫堆積物の堆積はなく、人為的な攪拌の

痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると推察できる。遺物は中世の平瓦・瓦器・須恵器・土師器の砕片を包含する。

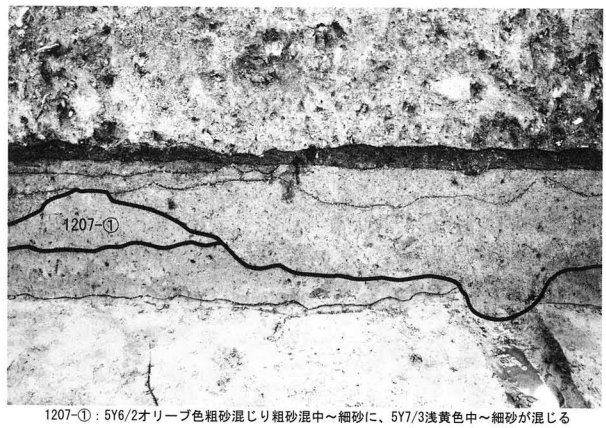
1209島畠(写真４)

調査区１Ｈ・Ｉと10Ｉ・Ｊ地区で検出した。南北方向ものびる。当該島畠造成土の上部は、後世の耕作地などの土地利用により攪拌されており、本来の規模は不明である。残存する造成土1209-①～③を観察した結果、氾濫堆積物などによる堆積ではなく、人為的な攪拌の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると推察できる。遺物は、1209-①は国産陶磁器・瓦器・土師器の擂鉢などの砕片、②・③は国産陶磁器・中世の瓦・土師器・須恵器などの砕片を包含する。

以上より、残存する３層の造成土は、近世以降に堆積したもので、時期差はほとんどないものと考えられる。また、土質の特徴や堆積の標高値などから1209-②と1207-①は同一層である可能性が高いと考えられる。

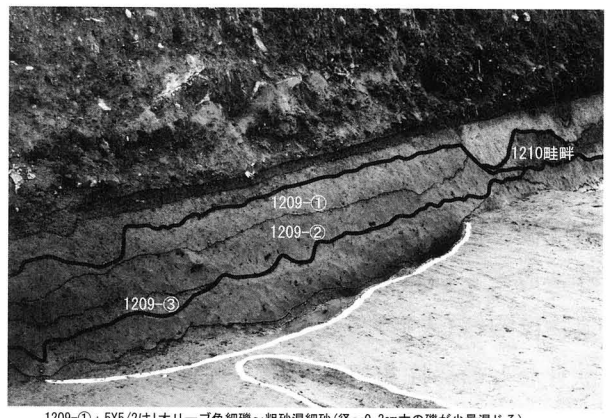
1213島畠(第８図-２、写真５)

調査区１Ｈ・Ｉと10Ｈ・Ｉ地区で検出した。南北方向にのびる。残存する造成土1213-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積はなく、人為的な攪拌の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると推察できる。1213-①上面では径10cm前後の杭跡(**1210ＳＰ①～⑳**)が20個検出した。また周辺では、２の宋銭（「祥符元寶」推定）も出土した。遺物は1213-①は国産陶器・青磁・瓦質土器・須恵器・土師器の砕片、1213-②は青磁・瓦・瓦質土器・須恵器・土師器の砕片、1213-③は平瓦・瓦器・土師器(皿など)の砕片を包含する。



1207-①：5Y6/2オリーブ色粗砂混じり粗砂混中～細砂に、5Y7/3浅黄色中～細砂が混じる

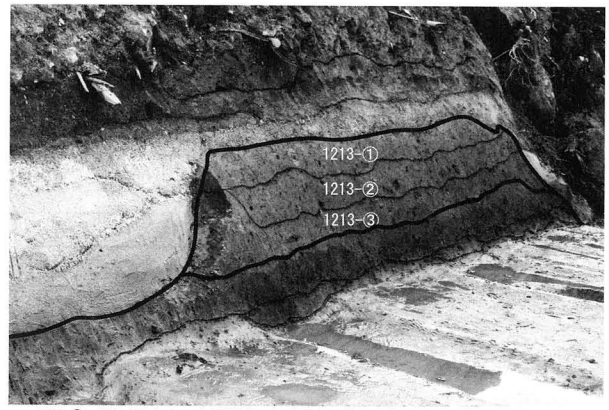
写真３　1207島畠西肩部断面(北から)



1209-①：5Y5/2はIオリーブ色細礫～粗砂混細砂(径～0.3cm大の礫が少量混じる)
1209-②：5Y6/2オリーブ色粗砂混じり粗砂混中～細砂に、5Y7/3浅黄色中～細砂が混じる
1209-③：209-②をベースに5Y7/3浅黄色粗砂が混じる

1210畦畔：10GY4/1暗緑灰色細砂～シルトと、2.5GY5/1オリーブ灰色粗～中砂が混じる
(土師器片含む)

写真４　1209島畠西肩部断面(北から)



1213-①：5GY4/1暗オリーブ中礫混粗～細砂(少量の鉄分沈着)(炭化物を微量に含む)
1213-②：10Y4/1灰色粗砂混細砂～シルト(径～1.5cm大の礫が少量混じる)(微量の鉄分沈着)
(土師器片含む)
1213-③：10Y5/1灰色中礫～粗砂混粘質シルト(土師器片含む)

写真５　1213島畠部断面(北東から)

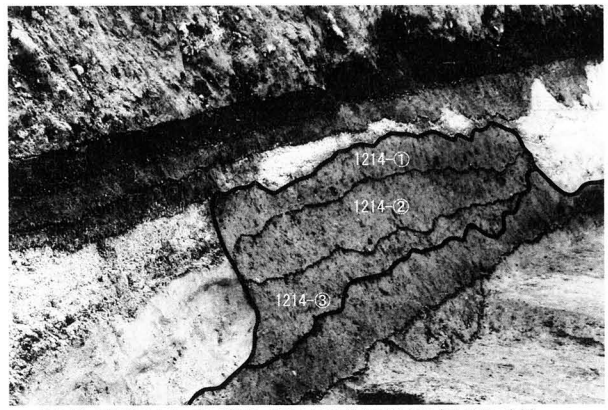
1214島畠(第８図-３、写真６)

調査区１Ｈ・Ｉと10Ｈ・Ｉ地区で検出した。南北方向にのびる。残存する造成土1214-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積でなく、人為的な攪拌の痕跡が顕著に見られた為、水田耕作土であると推察できる。

遺物は、1214-①は青磁・土師器の砕片、1214-②は瓦器・土師器の砕片、1214-③は土師器・

須恵器の砕片を包含する。東肩肩部では、3の宋銭「明道元寳(北宋1032年)」が出土した。出土状況から耕作時に混在したものと推測できる。

以上より、残存する3層の造成土は、中世～近世期に堆積したものと考えられる。また、土質の特徴や堆積の標高値などから1213-①～③と1214-①～③はそれぞれ同一層である可能性が高いと考えられる。



1214-①：5GY4/1暗オリーブ中礫混粗～細砂(少量の鉄分沈着)(炭化物を微量に含む)
1214-②：10Y4/1灰色粗砂混細砂～シルト(径～1.5cm大の礫が少量混じる)(微量の鉄分沈着)(土師器片含む)
1214-③：10Y5/1灰色中礫～粗砂混粘質シルト(土師器片含む)

写真6　1214島畠部断面(北東から)

第8図　第2面出土遺物実測図(S＝1/1)

畦畔(畦畔)

1210畦畔(第5表、写真4)

調査区1・10H地区で検出した。島畠と同様に、南北方向にのびる。当該畦畔は氾濫堆積物の第4図-5・6層を全て除去したところ検出できた遺構であり、**1209島畠**造成時、もしくは造成後に構築されたものと推察できる。当該畦畔造成土を観察した結果、単一層で構築され、遺物は陶器(人形)・瓦器・土師器(羽釜など)や獣骨などの砕片を包含する。近世以降に造成されたものと推察できる。

1211畦畔(第5表)

調査区10H地区で検出した。南北方向にのびる。**1210畦畔**同様に、氾濫堆積物を全て除去したところ検出できた遺構であるが、やや削平されており、全形は確認できなかった。造成土は**1210畦畔**と同様の特徴をもつことから、同時期の畦畔であると推察できる。遺物は出土しなかった。

第5表　1区第2面島畠・畦畔法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)
1207 島畠	1I・J、10I・J	(2.70)	0.70	8.3	1214 島畠	1H・I、10H・I	(2.70)	0.70	5.3
1209 島畠	1H・I、10H・I	(1.50)	0.30	8.2	1210 畦畔	1・10H	(4.10)	0.70	9.3
1213 島畠	〃	(1.20)	0.30	4.5	1211 畦畔	10H	(2.30)	0.30	11.10

＊(　)内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値

小穴(SP)

1212SP①～⑳

調査区10G地区で検出した杭跡群で、20個検出した。平面形態は全て円形であり、直径0.1m前後を測る。護岸等の役割を持つ杭跡である可能性が高い。氾濫堆積物の第4図-14・15層によって一気に埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

・第4層出土遺物(第9図-4)

当該層中に包含する遺物の大半は砕片であった。図化した4は第3面遺構掘削時(**1214島畠**造

成土を掘削時)に出土したサヌカイト製の剥片である。重さ12.75ｇを測る。ａ面は端部に微細な剥離痕が見られ、ｂ面の打面は単剥離打面である。端部や調整が非常に摩滅しており、ローリングを受けたものと考えられる。

・**第３面**(第６図、写真７、図版二)

第４層の島畠構築土を全て除去したところ、第４層下面と第５層上面で、中世以降の耕作溝13条(1301・1305～1316ＳＤ)、土坑５基(1302～1304・1319・1320ＳＫ)、小穴２個(1317・1318ＳＰ)を検出した。現地表面下約1.2～1.4ｍ(T.P.+9.3～9.8m)地点に広がる。当該遺構面は調査区西半部においては畦畔などの痕跡は残存しなかったが、無数の耕作痕跡及び足跡が認められたことから、水田跡である可能性も考えられる。当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第３面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(ＳＤ)

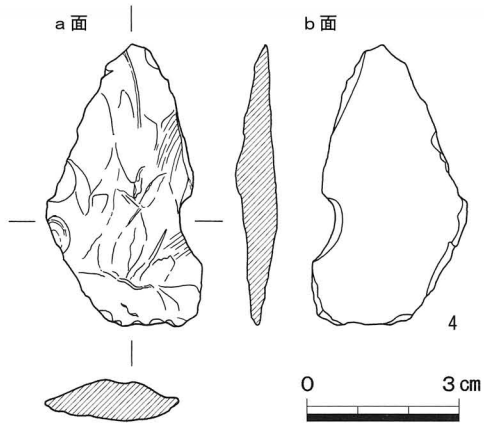
1301・1305～1316ＳＤ(第６表)

調査区１Ｊ地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y5/1灰色中砂混細砂～シルトに7.5Y6/2灰オリーブ色中～細砂が斑点状に混じる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は、各溝から瓦質土器(擂鉢)・土師器等の破片が出土した。

土坑(ＳＫ)

1302～1304ＳＫ(第６表)

調査区１Ｊ地区で検出した耕作関連の痕跡である。ともに10Y5/1灰色中砂混細砂～シルトに7.5Y6/2灰オリーブ色中～細砂が斑点状に混じる単一層の埋土をもつ。遺物は出土しなかった。



第９図　第４層出土遺物実測図(Ｓ＝2/3)

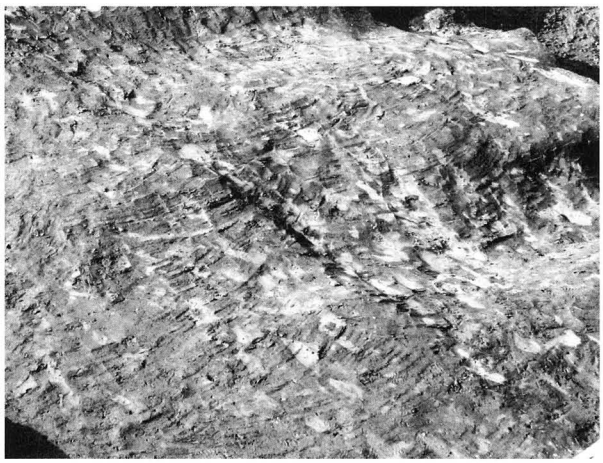
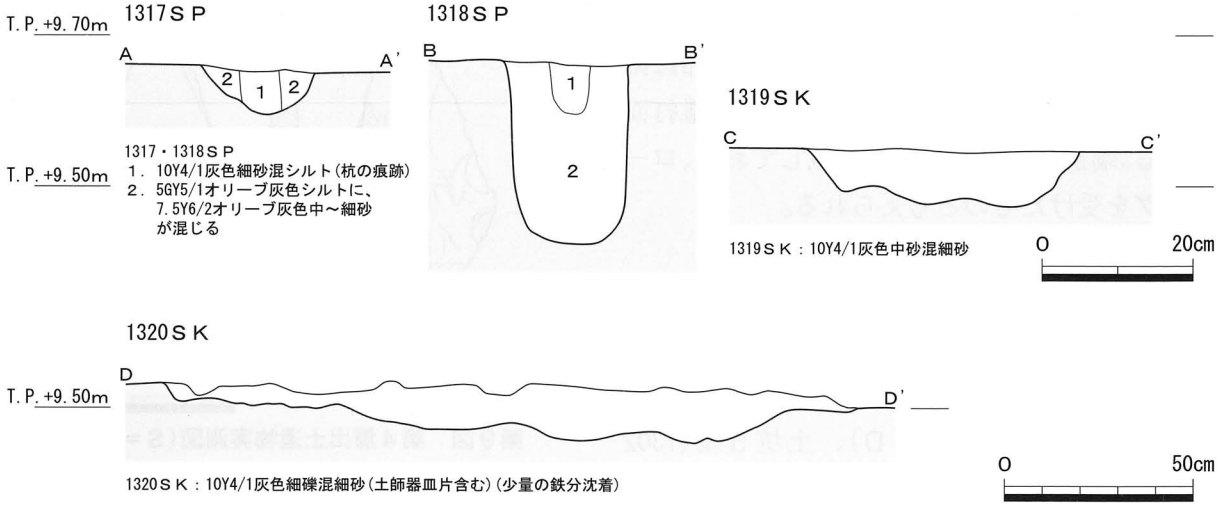


写真７　耕作痕跡及び足跡検出状況(北東から)

第６表　１区第３面耕作溝（ＳＤ）・土坑（ＳＫ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1301 ＳＤ	１Ｊ	(2.57)	0.20	2.8
1305 ＳＤ	〃	(2.58)	0.67	2.0
1306 ＳＤ	〃	(2.72)	0.83	2.2
1307 ＳＤ	〃	(2.44)	0.52	1.9
1308 ＳＤ	〃	2.18	0.24	3.3
1309 ＳＤ	〃	(2.33)	0.23	1.1
1310 ＳＤ	〃	(2.31)	0.28	3.1
1311 ＳＤ	〃	(1.28)	0.18	2.1
1312 ＳＤ	〃	1.19	0.18	2.4
1313 ＳＤ	〃	(1.07)	0.12	2.5
1314 ＳＤ	〃	1.52	0.20	7.0
1315 ＳＤ	〃	0.97	0.14	2.4
1316 ＳＤ	〃	0.84	0.21	5.6
遺構名	地区	平面形	径(cm)	深さ(cm)
1302 ＳＫ	10Ｊ	楕円形	2.8×1.7	5.6
1303 ＳＫ	〃	不定形	2.2×1.4	1.1
1304 ＳＫ	〃	楕円形	1.2×1.2	2.8

＊(　)内数値は検出長及び検出幅及び検出径
＊表記の数値は最大値



第10図　1317・1318ＳＰ、1319・1320ＳＫ断面図

1319ＳＫ（第６・10図）

調査区10Ｈ地区で検出した。単一層の埋土をもつ。遺物は出土しなかった。

1320ＳＫ（第６・10図）

調査区１Ｈ地区で検出した。当該土坑は調査区南側から調査区外にさらに広がる遺構で規模は不明である。遺物は出土しなかった。

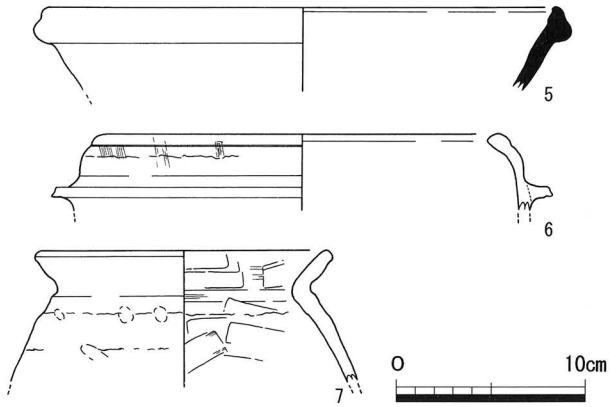
小穴（ＳＰ）

1317・1318ＳＰ（第６・10図）

調査区10Ｉ地区で検出した。埋土を半裁掘削したところ、柱の痕跡が一部見られることから、ともに杭跡の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

・第５層出土遺物（第11図-５～７）

当該層中に包含する遺物の大半は砕片であった。図化した５～７について記述したい。５・６はともに第５層掘削時（1400番台遺構検出時）に出土した。５は須恵器の片口鉢で、上下に拡張する口縁端部をもつ。内外面に回転ナデの痕跡が残る。時期は12世紀末～13世紀初頭に比定できる。６は土師器の羽釜で、復元口径20.5cm、残存器高4.0cmを測る。内湾する口縁部をもち、時期は12世紀後半に比定できる。７は第５層掘削時（1500番台遺構検出時）に出土した土師器の甕である。出土地点が10Ｉ地区であり、当該層中の下部より出土したことから、後述する当該層下面（第４面）で検出した**1509ＳＤ**に伴う遺物の一つであると推測できる。復元口径15.2cm、残存器高7.2cmを測る。形態は、頸部に稜線が見られ、口縁部は肥厚する。調整は、内面に横方向の板ナデが顕著に見られ、粘土紐接合のち指押さえの痕跡が確認できる。時期は９世紀後半～10世紀初頭に比定できる。



第11図　第５層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

・**第４面**(第６図、図版三・四)

第５層の水田耕作土を除去したところ、第５層下面で調査区南半に水田跡、北半に集落跡を検出した。ともに同一面で検出したが、遺構埋土の特徴や包含する遺物から、前者が平安時代後期、後者が平安時代前期から中期に相当し、若干の時期差が生じる。以下、後述する遺構の名称については、前者の水田跡関連遺構を1400番台、集落跡関連遺構を1500番台で記した。なお、水田面については、耕作溝などは検出することができたが、明確に畦畔と判断できる高まりは確認することができなかった。中世期(1400番台)の生産遺構によって広く削平及び削平されて残存しなかった可能性が高い。

1400番台遺構については、耕作溝群17条(**1401～1403・1408～1421ＳＤ**)、小穴３個(**1404～1406ＳＫ**)、井戸１基(**1407ＳＥ**)を検出した。1500番台遺構については、溝４条(**1501～1503・1509ＳＤ**)、土坑４基(**1505～1508ＳＫ**)を検出した。なお検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

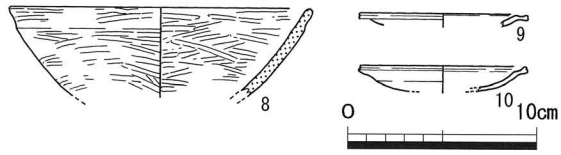
以下、当該面を「第４面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については図面や表などを参照されたい。

①1400番台遺構

溝(ＳＤ)

1401～1403・1408～1421ＳＤ(第12図-10、第７表)

調査区９・10Ｈと９・10Ｇと９・10Ｆ地区で検出した耕作溝群である。**1401～1403ＳＤ**は10Y5/1灰色細砂～シルトと5GY6/1オリーブ灰色細砂が混ざる単一層の埋土、**1408～1416ＳＤ**は10Y5/1灰色粗砂混シルトに土師器片含む単一層の埋土、**1417ＳＤ**は10Y6/1灰色中礫～粗砂(径～1.0cm台の礫が少量混じる)と10Y5/1灰色中砂混細砂が混じる単一層の埋土、**1418～1421ＳＤ**は10Y5/1灰色中砂混細砂～シルトに7.5Y6/2灰オリーブ色中～細砂が斑点状に混じる単一層の埋土をそれぞれもつ。全て南北方向に並列する。遺物は、**1401～1403ＳＤ**から土師器などの砕片、**1408～1416ＳＤ**から土師器(羽釜など)の砕片、**1417～1421ＳＤ**から瓦器・黒色土器・土師器の砕片が出土した。このうち**1417ＳＤ**から出土した**10**を図化した。**10**は土師器の小皿で、復元口径8.7cm、残存器高1.3cmを測る。「て」の字状口縁をもつ。時期は11世紀中頃に比定できる。

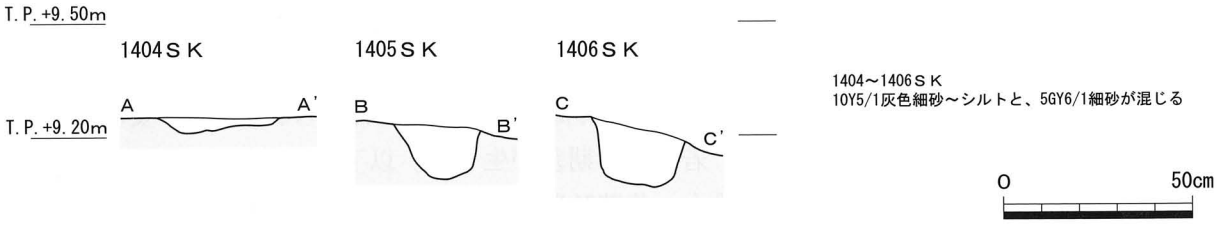


第12図　1406ＳＫ・1407ＳＥ・1417ＳＤ出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

第７表　１区第４面耕作溝（ＳＤ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1401　ＳＤ	10Ｈ	(8.80)	0.55	5.2
1402　ＳＤ	〃	(8.80)	0.6	4.3
1403　ＳＤ	〃	4.20	0.3	4.2
1408　ＳＤ	９・10Ｈと10Ｇ	(8.50)	0.52	8.5
1409　ＳＤ	〃	(1.54)	0.38	6.4
1410　ＳＤ	10Ｇ	(4.75)	0.50	4.2
1411　ＳＤ	９・10Ｇ	(3.27)	0.40	3.1
1412　ＳＤ	10Ｇ	(1.92)	0.20	3.0
1413　ＳＤ	〃	(1.88)	0.20	1.7
1414　ＳＤ	〃	(1.88)	(0.34)	2.6
1415　ＳＤ	９Ｇ	(2.82)	0.27	2.1
1416　ＳＤ	９・10Ｇ	(5.50)	0.40	4.7
1417　ＳＤ	10Ｆ	(1.84)	0.73	7.8
1418　ＳＤ	９・10Ｆ	(0.62)	0.30	1.4
1419　ＳＤ	〃	1.80	0.28	2.6
1420　ＳＤ	〃	(2.74)	0.48	5.1
1421　ＳＤ	９Ｆ	1.50	0.22	1.1

＊(　)内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値



第13図　1404～1406ＳＫ断面図（Ｓ＝1/20）

土坑（ＳＫ）

1404～1406ＳＫ（第６・12図-９、第13図）

調査区９・10Ｈ地区で検出した土坑である。ともに10Y5/1灰色細砂～シルトと5GY6/1オリーブ灰色細砂が混じる単一層の埋土をもち、南北方向に並列する。柱穴跡などの痕跡は見られず、詳細は不明である。遺物は、1404・1405ＳＫからは出土しなかった。唯一、1406ＳＫから９の土師器小皿が出土した。９は復元口径8.8cm、残存器高0.7cmを測り、「て」の字状口縁をもつ。時期は11世紀中頃に比定できる。

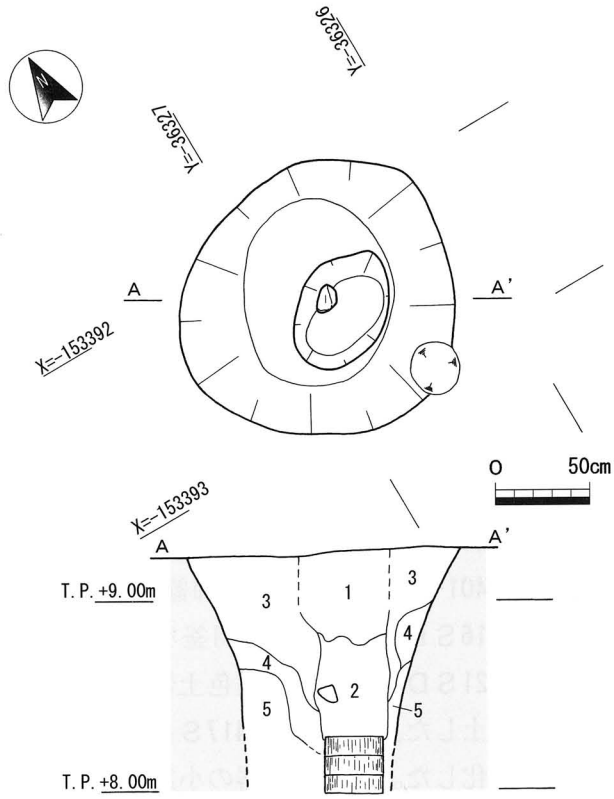
井戸（ＳＥ）

1407ＳＥ（第12図-８、第14図）

調査区10Ｈ地区で検出した。平面形態は径1.4～1.45mのほぼ円形を呈し、深さ約1.3mを測る。井戸側は底部に径0.5m前後、高さ0.1mの曲げ物を３段積み上げた状態で検出された。なお、井戸側埋土内のT.P.+8.5m地点で0.1m前後の自然石を検出した。特に加工痕などは見られず、用途は不明である。

当該遺構は、ベースが粘土層であり、検出時より湧水が顕著であった為、調査は困難を極めた。掘り方検出当初は井戸側の掘り方を確認することはできず、検出面がヘドロ状になった為、掘り方内部を約0.3m掘り下げ精査を行った。その結果、径0.68m前後の井戸側掘り方が検出された。さらに埋土の掘削を進めたが、湧水が著しく、下層部の基盤層が河川堆積であった為、崩壊の危険があり、人力による調査は遺構検出面より1.3m（T.P.+8.3m）地点で断念せざるを得なかった。なお調査終了後に、機械掘削によって、当該井戸底部の確認を試みたが、曲げ物を３段有することを確認するに留まった。

遺物は、須恵器・土師器などの砕片が出土し、唯一図化できたのは８の黒色土器椀であった。８は復元口径15.8cm、残存器高4.7cmを測る。



1　10Y4/1灰色細砂混シルト（少量の土師器片含む）
2　10Y3/1オリーブ黒色細砂混粘質シルト
3　7.5GY5/1緑灰色細砂に、7.5Y6/2灰オリーブ色細礫がブロック状に混じる
4　5GY5/1オリーブ灰色細砂に、10GY5/1緑灰色粘質シルトがブロック状に多量に混じる
5　5GY5/1オリーブ灰色細砂に、10GY5/1緑灰色粘質シルトが微量に混じる

第14図　1407ＳＥ平面図・断面図（Ｓ＝1/40）

調整は、内外面に緻密なヘラミガキ調整が見られる。内外面全面を黒色に仕上げる。時期は10世紀後半～11世紀前半に比定できる。

畦畔(畦畔)

1423畦畔(写真８)

調査区10Ｇ地区で検出した。検出地点が1214島畠造成地点と重複することから、当該畦畔箇所に島畠を再度造成したものと推察できる。調査当時は当該遺構を認識できなかったが、整理作業時に、調査区南壁断面図や平面遺構検出状況図から、畦畔であると考えられた。検出規模は北半一帯の攪乱により、大部分が削平されている為、検出長は2.0m、幅1.9mを測る。当該遺構東側に隣接する1417ＳＤは当該遺構に機能時に伴う排水路であった可能性も考えられる。

1423-①：10Y4/1暗緑灰色粗砂混細砂～シルト(土師器片含む)

写真８　1423畦畔断面(北西から)

②1500番台遺構

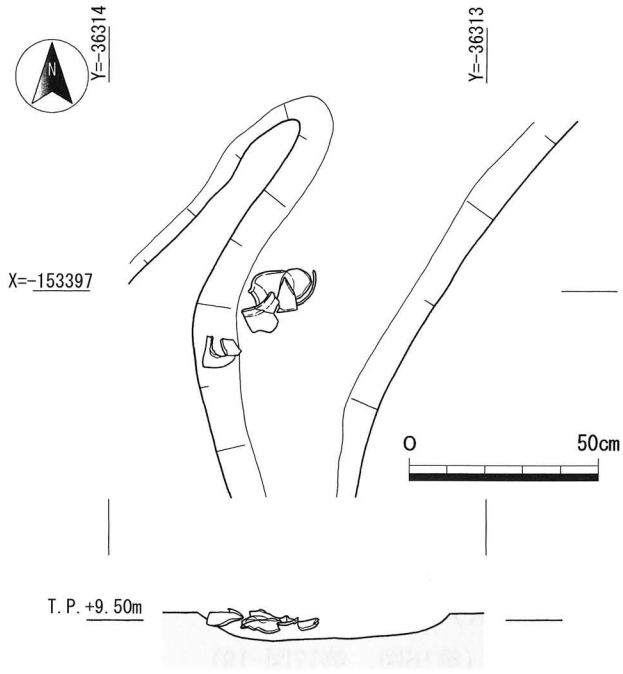
溝(ＳＤ)

1501～1503ＳＤ(第16図)

調査区１・10Ｊ地区で検出した溝群である。ともに幅0.25m前後、検出深度0.3mの比較的規模が小さな溝で、単一層の埋土をもつ。方向に規則性がなく、役割は不明である。遺物は、1501ＳＤから土師器(小皿など)の破片、1503ＳＤから土師器の破片がそれぞれ出土した。

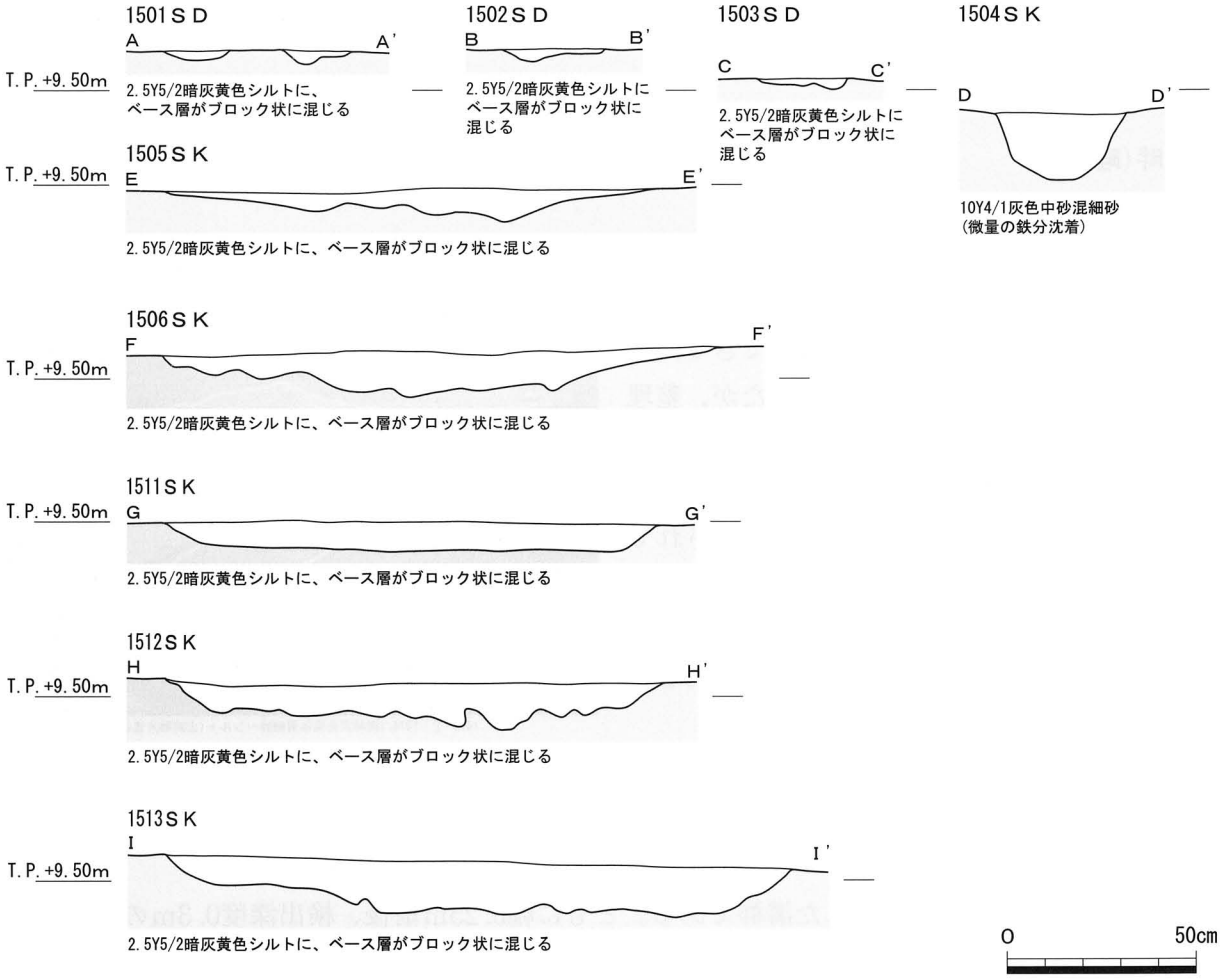
1509ＳＤ(第15図、第17図-12・13・17)

調査区10Ｉと１Ｊ地区で検出した溝である。幅0.55m前後、検出深度0.7mで単一層の埋土をもつ。東を基点に、西方向と南西方向へ分岐する溝である。遺構検出面がT.P.+9.52mに対して、ほぼ完形の遺物がT.P.+9.53mを最頂点として出土したことから、本来の遺構面は若干上部に存在したものと推測できる。おそらく本来の遺構面が後世の土地利用による攪拌及び削平された為、上部で確認できなかったものと推測できる。また、検出溝の幅が0.55mに対して検出深度が0.7m以下であることから、今回検出した箇所は遺構最下部であった可能性が高く、先端部分で収束して検出された溝が、本来は調査区外まで伸びていた可能性が極めて高い



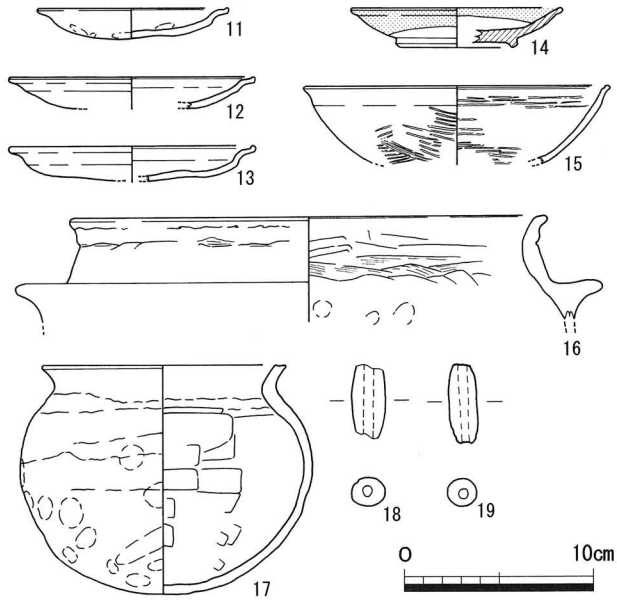
2.5Y5/2暗灰黄色シルトに、第７ｂ層がブロック状に混じる

第15図　1509ＳＤ土器出土状況平面図・立面図（Ｓ＝1/20）



第16図　1501～1503ＳＤ、1504～1506・1511～1513ＳＫ断面図（Ｓ＝1/20）

と考えられる。遺物は、土師器小皿(12・13)、土師器の甕(17)が出土した。12・13は共に「て」の字状口縁をもち、復元口径12.8cm、残存器高1.8cmを測る。12は９世紀後半、13は口縁部の屈曲が顕著に見られることから、10世紀後半に比定できる。17は口径12.2cm、高さ12.2cmを測る。口縁部形態は、緩やかに外反した後短く立ち上がり、端部に面をもつ。体部形態は球形を呈し、上半部に最大径をもつ。調整は内面に横方向の板ナデが顕著に見られ、粘土紐接合のち指押さえの痕跡が確認できる。時期は９世紀後半～10世紀初頭に比定できる。以上より、当該溝の廃絶期は10世紀後半に比定できる。



第17図　1504・1508ＳＫ、1509ＳＤ出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

土坑（ＳＫ）

1504ＳＫ（第16図、第17図-19）

調査区１Ｉ地区で検出した。平面形態は瓢箪型を呈し、長径0.9m、短径0.4m前後を測る。

遺物は土師器の砕片と土錘(19)が出土した。19は管状土錘で、長さ4.2cm、径1.5cm、孔0.5cm、重さ9.85ｇを測る。

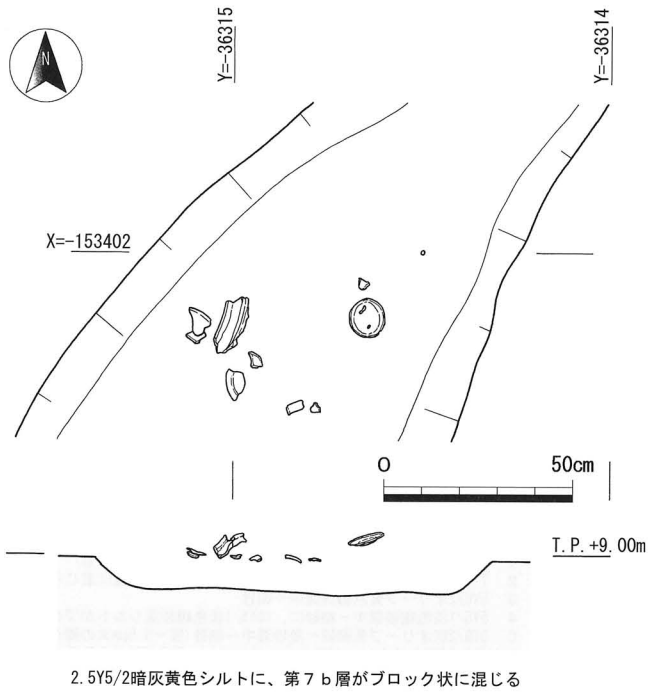
1505～1507ＳＫ(第16図)

調査区10Ｊと１・10Ｉ地区で検出した。検出時は土坑として1505～1507ＳＫを単独の遺構として調査したが、埋土の特徴や遺構深度が全て0.1m前後と類似することから、同一の遺構であった可能性が極めて高いと考えられる。

遺物は、1505ＳＫから土師器(小皿など)、1506ＳＫから土師器(羽釜など)の砕片が出土した。

1508ＳＫ(第17図-11・14～16・18、第18図)

調査区１Ｉ地区で検出した。北東－南西方向に広がる楕円形を呈し、長径2.8m、短径1.9m前後を測る。遺構検出面がT.P.+9.49m前後に対して、ほぼ完形の遺物がT.P.+9.56mを最頂点として検出したことから、本来の遺構面はやや上部に存在したものと推測できる。おそらく、本来の遺構面が後世の土地利用による攪拌及び削平された為、上部で確認できなかったものと推測できる。

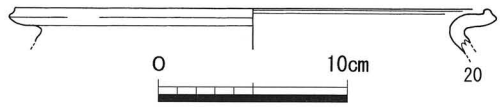


第18図　1508ＳＫ土器出土状況平面図図・立面図(Ｓ＝1/20)

遺物は土師器小皿(11)、灰釉陶器の皿(14)、黒色土器(15)、羽釜(16)、土錘(18)が出土した。11は口径10.0cm、高さ1.6cmの完形の小皿で、「て」の字状口縁をもつ。時期は10世紀中頃に比定できる。14は復元口径10.9cm、器高2.1cmを測る。全体の３分の１が残存する。灰釉は内外面上半部に施される。時期は10世紀前半〔Ｏ53窯式(山下峰司1995)〕に比定できる。15は復元口径16.0cm、残存器高4.1cmを測る。調整は、内外面に緻密なヘラミガキ調整が見られ、さらに内面には暗文が見られる。内黒仕上げである。９世紀後半に比定できる。16は復元口径24.9cm、残存器高5.5cmを測る。生駒山西麓産。時期は９世紀後半～10世紀前半に比定できる。18は管状土錘で、長さ3.6cm、径1.8cm、孔0.6cm、重さ10.45ｇを測る。以上より、当該土坑の廃絶期は10世紀前半に比定できる。

・第７ｂ層出土遺物(第19図-20)

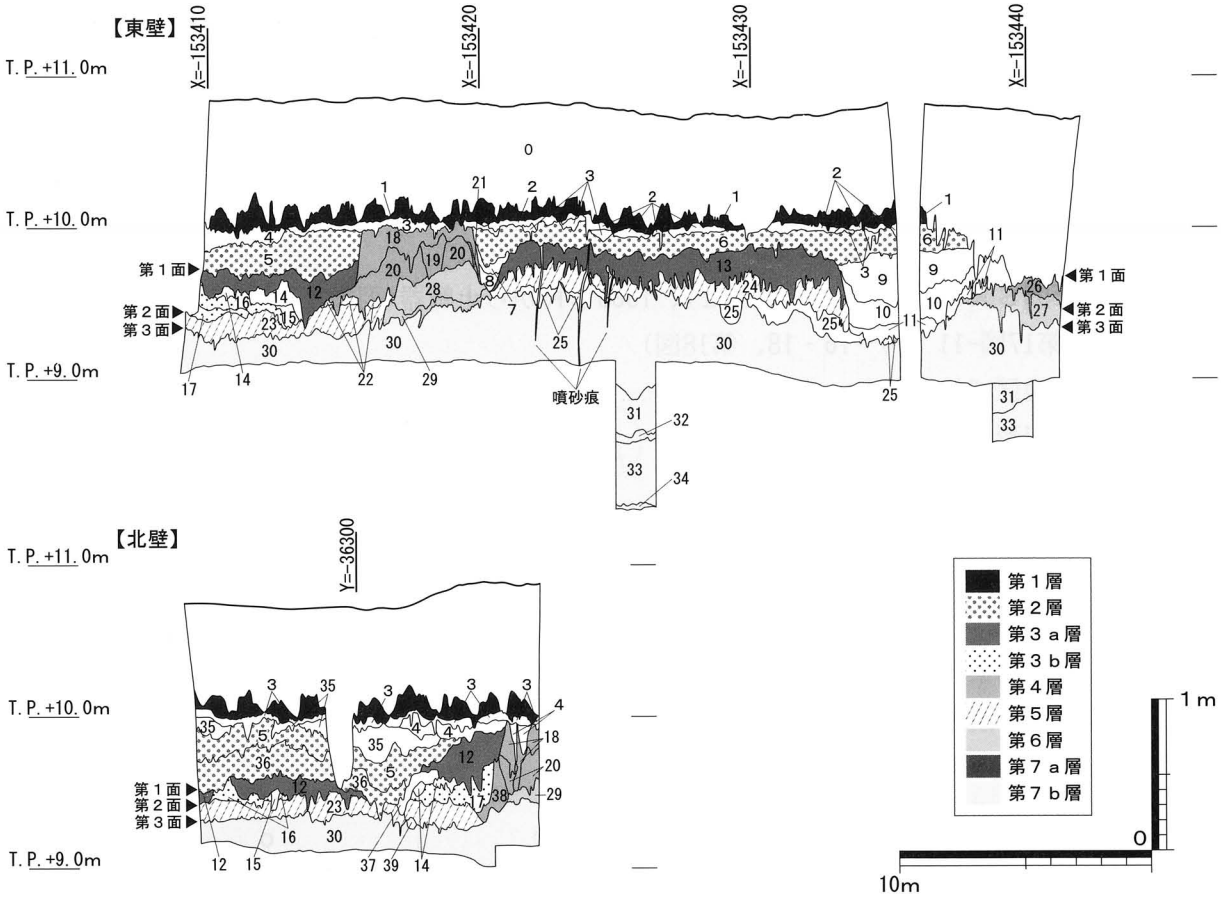
当該層中にはほとんど遺物が含まれていなかった。図化した20は、第４面精査時に当該層中から出土した遺物である。20は口縁端部が上方に肥厚し、端部に面をもつ土師器の甕である。時期は８世紀後半に比定できる。



第19図　第７ｂ層出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

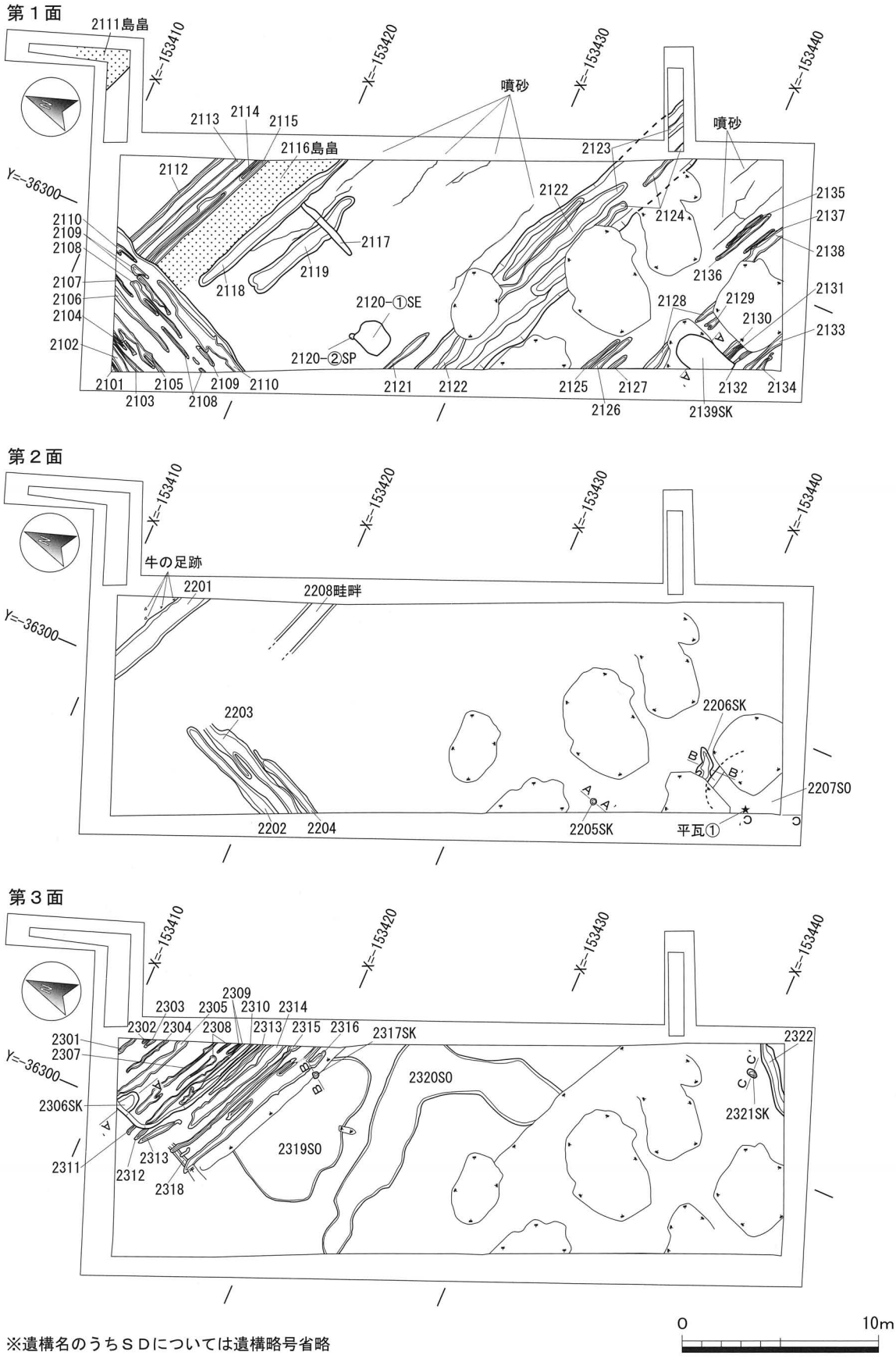
(２)２区(第20・21図)

２Ｊ～５Ｂ・１Ａ地区に位置し、東西13.2m×南北36.8m前後を測る長方形に、北東端壁面か



1　2.5Y3/1黒褐色粗砂混細砂(径～0.5cm大の礫が少量混じる)
2　7.5Y5/1灰色粗砂混中～細砂(径～1.0cm大の礫が多量に混じる)
3　5Y6/2オリーブ黄色細礫混中～細砂
4　5Y5/1灰色粗砂混中～細砂に、10Y5/1灰色細砂混シルトがブロック状に混じる
5　5Y5/2灰オリーブ色細礫～粗砂混中～細砂(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)と、10Y4/1灰色細砂混シルトが混じる
6　①2.5GY4/1暗オリーブ灰色中砂混細砂に、5Y7/2灰白色粗砂混細砂が混じる(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)
7　6-①に、5Y7/2灰白色細砂が、5cm角のブロックで入る
8　10Y5/1灰色粗砂混細砂に、5Y7/3浅黄色中～細砂が斑点状に少量混じる(微量の土師器片・炭片含む)
9　5Y5/1灰色細礫～粗砂混中～細砂に、2.5Y6/4にぶい黄色中～細砂が混じる(少量の土師器片含む)(径～0.5cm大の礫が少量混じる)
10　10Y5/1灰色粗砂混中～細砂と、2.5Y5/4黄褐色細礫混中砂が混じる(少量の土師器片含む)(径～0.5cm大の礫が少量混じる)
11　7.5Y4/1灰色細礫混中砂に、5GY5/1オリーブ灰色シルトがブロック状に混じる(上部に多量の鉄分沈着)
12　5Y5/1灰色細礫混粗～中砂に、①5GY5/1オリーブ灰色中砂混細砂～シルトがブロック状に混じる(少量の鉄分沈着)
13　7.5Y5/1灰色粗～中砂混細砂に、7.5Y6/1灰オリーブ色中礫～細礫混粗～中砂が混じる(径～1.5cm大の礫が多量に混じる)
(少量の土師器片含む)
14　5GY5/1オリーブ灰色中砂混細砂～シルト(少量の鉄分沈着)
15　5Y5/1灰色粗砂混粘質シルトに、2.5Y7/2灰黄色細礫混粗～中砂が混じる
16　2.5Y7/3浅黄色粗～中砂
17　2.5Y6/1黄灰色細砂～シルト(上部に鉄分目立つ)
18　①2.5Y5/2暗灰黄色中砂混細砂と、②2.5Y7/2灰黄色中～細砂が混じる(径～1.0cm大の礫が少量混じる)
19　18-①に18-②が入る
20　①2.5Y6/2灰黄色中砂混細砂に、18-②細砂が斑点状に混じる(微量の炭片含む)
21　20-①と18-①が混じる(少量の鉄分沈着)(微量の炭片含む)
22　17に23-①を巻き上げる
23　①7.5Y5/1灰色粗砂混細砂～シルトに、7.5Y7/1灰白色中砂が混じる(植物根痕が多量に見られる)
24　5GY5/1オリーブ灰色中砂混細砂～シルトに、2.5Y6/1オリーブ灰色中砂混粗～中砂が混じる(径～1.5cm大の礫が多量に混じる)
(少量の土師器片を含む)
25　10Y6/1灰色中砂混細砂～シルト
26　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混中～細砂に、10YR5/4にぶい黄褐色細礫混中砂が混じる(径～1.0cm大の礫が多量に混じる)
27　10YR4/3にぶい黄褐色中砂混細砂～シルトに、2.5Y6/2灰黄色細砂～シルトが斑点状に微量に混じる
(微量の土師器片含む)(植物根痕が管状に多量に見られる)
28　2.5Y5/2暗灰黄色中～細砂混細砂～シルトに、植物根痕状に2.5Y7/2灰黄色細砂が入る(少量の炭片)(微量の土師器片含む)
29　2.5Y6/1黄灰色粗～中砂混細砂に、2.5Y7/3浅黄色細砂を巻き上げる
30　2.5Y5/3黄褐色細砂(管状に5Y7/1灰白色細砂が多量に入る)
31　2.5Y4/2暗灰黄色粗～中砂と、2.5Y6/3にぶい黄色中～細砂の互層に、10YR4/2灰黄褐色中～細礫がラミナ状に入る
32　2.5Y5/2暗灰黄色シルトに、5Y7/2灰白色細砂～シルトが植物根痕状に入る
33　10GY4/1暗緑灰色細砂～粘質シルト
34　7.5GY5/1緑灰色粗砂
35　7.5Y4/1灰色粗砂混細砂に、5Y7/2灰白色中～細砂が入る
36　7.5Y4/1中砂混細砂～粘質シルトに、10Y5/1灰色細礫混細砂が混じる
37　5Y5/2灰オリーブ色細礫混細砂に、5GY5/1オリーブ灰色中～細砂がブロック状に混じる
38　2.5GY4/1オリーブ灰色粗砂混細砂に、5Y6/2灰オリーブ色中～細砂が混じる(少量の鉄分沈着)(少量の土師器片含む)
39　5Y5/1灰色粗砂混中～細砂に、ベース層がブロック状に混じる(少量の鉄分沈着)

第20図　２区東・北壁断面図(Ｓ＝垂直：1/50、水平：1/300)



※遺構名のうちＳＤについては遺構略号省略

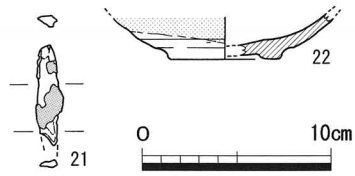
第21図　２区第１～３面平面図（Ｓ＝1/300）

ら逆Ｌ字状にのびる東西5.0m×南北7.0m、幅1.8m前後を測る突出部、南よりの東壁面から長方形にのびる東西4.8m×南北1.6mを測る突出部を持つ調査区を設定した。当調査区の面積は約513.04㎡を測る。調査当初の予定では、南よりの西壁面に２m四方の突出部が含まれていたが、既往建物の基礎杭部分にあたる為、市教委と協議の上、調査は行わなかった。

調査は、現地表面(T.P.+10.72～10.98m)から約1.1mまで機械掘削し、人力掘削を約0.4m地点まで行った。なお、調査終了後、調査区南端部と中央部の２箇所で機械掘削により深さ1.1m(T.P.+8.1m)までの下層部を確認した。

・第２層出土遺物(第22図-21・22)

当該層中に包含する遺物の大半は瓦器・土師器などの砕片であった。図化した21・22は、第１面遺構検出時に出土した遺物である。21は鉄製の釘で、残存長5.2cm、重さ7.2gを測る。22は唐津系陶器碗で、残存器高2.5cmを測る。体部外面には灰釉が見られる。時期は17世紀中～後半に比定できる。



第22図　第２層出土遺物実測図(S＝1/4)

・第１面(第21図、写真９、図版五)

第０層の盛土と第１層の旧耕作土、第２層の近世以降の耕作土を除去したところ、第２層下面で近世以降の耕作溝群35条(2101～2110、2112～2115、2117～2119、2121～2138ＳＤ)、島畠(2111・2116島畠)、井戸１基(2120-①ＳＥ)、小穴１個(2120-②ＳＰ)、土坑１基(2139ＳＫ)を検出した。現地表面下約1.2m(T.P.+9.7～9.8m)地点に広がる。なお当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

写真９　噴砂検出状況(北西から)

調査区南半部では、後世の土地利用によって広く破壊されており、部分的な遺構検出に留まった。調査区北半では、幾度にも切り合い関係の生じる耕作痕跡が検出された。また、中央から南半部でも耕作痕跡が一部確認できた。耕作痕の希薄な箇所はおそらく島畠に利用されていたもの推測できるが、顕著な痕跡は確認できなかった。当該面で検出された遺構は、埋土の特徴や遺構の切り合い関係によって、少なくとも２時期以上に分類できる。

なお、調査区中央部から南部では、地震の痕跡である噴砂を確認した。東西方向より南に20°傾きをもち、顕著なもので長さ6.0m、幅0.5mを測る。第20図-13層上面及び層中から延びることから、この時期に起きた地震の痕跡と考えられる。

以下、当該面を「第１面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝（ＳＤ）

2101～2110ＳＤ（第23図-27、第８表）

調査区２Ｊ地区で検出した耕作溝群である。ともに7.5Y5/1灰色粗砂混中～細砂に5Y7/2灰白色中～細砂が波状に混じる。なお径0.8cm大の小石を少量含み、植物根痕が少量見られる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。

遺物は、各溝から瓦器・土師器（小皿など）・瓦質土器（擂鉢など）の砕片が出土した。このうち2110ＳＤから出土した27を図化した。27は瓦質土器の風炉で、口縁部のみ残存する。復元口径26.6cm、残存器高3.6cmを測る。口縁部形態は、短く直立しており、口縁端部に面をもつ。外面調整は、幅２cm前後のヘラ状工具による刻み目を縦方向に施し、内面に鉄分の付着が見られる。時期は15世紀前半に比定できる。

2112～2115ＳＤ（第23図-28、第８表）

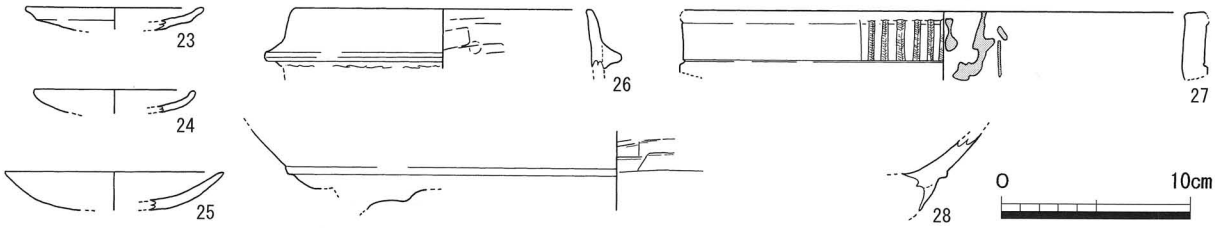
調査区２Ｊ・Ａ地区で検出した耕作溝群である。ともに2.5Y5/2暗灰黄色中～細礫混中～細砂に2.5Y7/6明黄褐色中礫混中砂が混じる単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。なお遺構の切り合い関係より、当該溝群埋没後に前述の2101～2110ＳＤが構築されていることが確認できた。

遺物は、各溝から瓦器・須恵器・土師器の砕片が出土した。このうち2115ＳＤから出土した28を図化した。28は瓦質土器の奈良火鉢で、底部の一部分が残存する。体部と脚部の境目に削り出し突帯を巡らす。時期は13世紀後半～14世紀初頭に比定できる。

第８表　２区第１面耕作溝（ＳＤ）法量法

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
2101 ＳＤ	２Ｊ	(0.65)	0.14	1.2	2122 ＳＤ	４Ａ・Ｂ	(5.85)	0.60	7.7
2102 ＳＤ	〃	(1.60)	0.40	5.5	2123 ＳＤ	３Ｊ・Ａ、４Ａ・Ｂ	(17.80)	0.80	8.9
2103 ＳＤ	〃	(0.20)	0.22	6.0	2124 ＳＤ	４Ａ・Ｂ	(10.80)	0.70	14.5
2104 ＳＤ	〃	(1.00)	0.14	3.3	2125 ＳＤ	４Ａ	(2.21)	0.30	5.8
2105 ＳＤ	〃	(3.97)	0.20	5.1	2126 ＳＤ	〃	(2.55)	〃	4.4
2106 ＳＤ	〃	(4.35)	0.44	5.9	2127 ＳＤ	〃	(1.20)	0.20	4.5
2107 ＳＤ	〃	(6.72)	0.18	3.0	2128 ＳＤ	４・５Ａ	(5.10)	〃	3.3
2108 ＳＤ	〃	(3.82)	0.42	2.5	2129 ＳＤ	５Ａ	(0.72)	0.30	5.7
2109 ＳＤ	〃	(6.58)	0.36	4.2	2130 ＳＤ	〃	(1.03)	0.20	2.9
2110 ＳＤ	〃	(9.00)	0.98	5.9	2131 ＳＤ	〃	(〃)	0.10	2.1
2112 ＳＤ	２Ｊ・Ａ	(7.32)	0.30	9.4	2132 ＳＤ	〃	(1.10)	0.20	3.2
2113 ＳＤ	〃	(8.83)	〃	4.0	2133 ＳＤ	〃	(2.87)	0.60	3.4
2114 ＳＤ	〃	(9.82)	0.20	9.2	2134 ＳＤ	〃	(1.20)	0.40	3.5
2115 ＳＤ	〃	(10.50)	0.30	5.0	2135 ＳＤ	４・５Ａ	2.51	0.20	1.8
2117 ＳＤ	２・３Ａ	3.58	0.35	4.1	2136 ＳＤ	〃	3.60	0.30	3.6
2118 ＳＤ	２Ｊ・Ａ、３Ａ	(9.70)	0.80	9.7	2137 ＳＤ	５Ｂ	1.95	0.20	2.5
2119 ＳＤ	〃	(6.80)	1.12	8.2	2138 ＳＤ	〃	(2.75)	0.50	6.8
2121 ＳＤ	３Ｊ・Ａ	(2.90)	0.40	〃					

＊（　）内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値



第23図　2110・2115・2118・2122～2124・2135ＳＤ出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

2117～2119ＳＤ(第23図-23・26、第８表)

調査区２・３Ｊと２・３Ａ地区で検出した耕作溝群である。なお遺構埋土の特徴や切り合い関係より2118・2119ＳＤ埋没後に2117ＳＤが構築されていることが確認できた。2117ＳＤは7.5Y6/2灰オリーブ色粗砂混中～細砂、2118・2119ＳＤは7.5Y6/2灰オリーブ色粗～中砂混細砂に、10Y5/1灰色中砂混細砂～シルトが混じる。なお径0.8cm大の礫が少量混じる単一層の埋土をもつ。2117ＳＤは南北方向に伸び、これに直交するように2118・2119ＳＤが並列する。当該溝群は前述の耕作溝群より幅広であり畦畔脇の側溝の可能性も示唆できる。

遺物は、2118ＳＤから瓦器・瓦質土器(羽釜など)・土師器(小皿など)、2119ＳＤから土師器の砕片が出土した。このうち2118ＳＤから出土した23と26を図化した。23は土師器の小皿で、口縁部から底部まで残存する。復元口径8.9cm、器高1.3cmを測る。時期は13世紀中頃に比定できる。26は瓦質土器の小形の羽釜で、口縁部が残存する。復元口径15.4cm、残存器高3.1cmを測る。時期は12世紀後半～13世紀前半に比定できる。

2122～2124ＳＤ(第23図-25、第８表)

調査区３・４Ｊと３・４Ａと４Ｂ地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y5/1灰色粗砂混細砂～シルトと5Y6/1灰色粗～中砂が混じる。なお多量の鉄分が沈着する単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。

遺物は、各溝から国産陶磁器・瓦質土器・瓦器・瓦・土師器(小皿・甑など)・須恵器の砕片が出土した。このうち25を図化した。25は土師器の小皿で、口縁部から底部まで残存する。復元口径12.2cm、器高1.3cmを測る。時期は13世紀中頃に比定できる。

2125～2138ＳＤ(第23図-24、第８表)

調査区４・５Ａと４・５Ｂ地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y5/1灰色粗砂混細砂に径0.3cm大の礫が少量混じる。少量の鉄分が沈着する単一層の埋土をもつ。全て東西方向に並列する。

遺物は、各溝から瓦器・須恵器・土師器(小皿・羽釜など)の砕片が出土した。このうち2135ＳＤから出土した24を図化した。24は土師器の小皿で、口縁部が残存する。復元口径8.3cm、残存器高1.2cmを測る。口縁部は丸みを帯びており、内外面全体にナデ調整が見られる。時期は13世紀後半に比定できる。

島畠(島畠)

2111島畠(写真10)

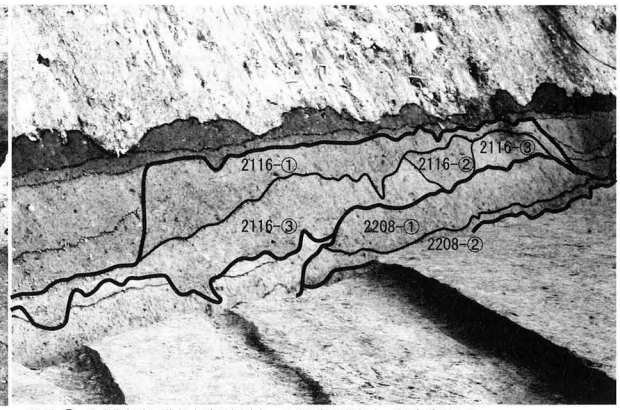
調査区１Ａ地区で検出した。検出地点が面積の狭い突出部分であり、水ハケの悪い箇所であった為、平面調査時には当該遺構を認識できなかった。その後、調査地点の北壁及び南壁断面精査時に、東西方向に傾きをもつ島畠であると推察できた。推定できる法量は、長さ2.0m以上、幅0.9m以上、残存高0.5m前後を測る。残存する造成土2111-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積はなく、耕作による人為的な攪拌の痕跡や、植物根の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると考えられる。遺物は、2111-③から土師器の砕片が出土した。

2116島畠(写真11)

調査区２Ｊと２・３Ａ地区で検出した。東西方向に傾きをもつ島畠であると推察できた。機械掘削時に2116-①及び2116-②の大半を除去してしまったので、平面調査では当該遺構を認識でき

2111-①：2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混中砂に、10YR4/3にぶい黄褐色細砂が混じる
（径～0.5cm大の礫が多量に混ざる）なお2.5Y6/1黄灰色中礫～粗砂が波状に混じる
2111-②：10YR4/3にぶい黄褐色中砂混細砂～シルトに、2.5Y6/2灰黄色中砂混細砂が
植物根痕状に縦方向に無数に入る
2111-③：2.5Y4/1オリーブ灰色粗砂混細砂に、5Y6/2灰オリーブ色中～細砂が混じる
（少量の鉄分沈着）（少量の土師器片含む）なお2.5Y6/1黄灰色中礫～粗砂が波状に混じる

写真10　2111島畠北壁断面（南から）



2116-①：2.5Y5/2暗灰黄色中砂混細砂と、2.5Y7/2灰黄色中～細砂が混じる
（径～1.0cm大の礫が少量混じる）
2116-②：2116-③をベースに、2116-①がブロック状に入る（径～1.0cm大の礫が多量に混じる）
（微量の炭片含む）
2116-③：2.5Y6/2灰黄色中砂混細砂に、2.5Y7/2灰黄色細砂が斑点状に混じる（微量の炭片含む）
2208-①：2.5Y5/2暗灰黄色中～細砂混細砂～シルト（植物根痕が多数見られる）（少量の炭片含む）
2208-②：2.5Y6/1黄灰色粗～中砂混細砂に、2.5Y7/3浅黄色細砂（ベース層）を巻き上げる

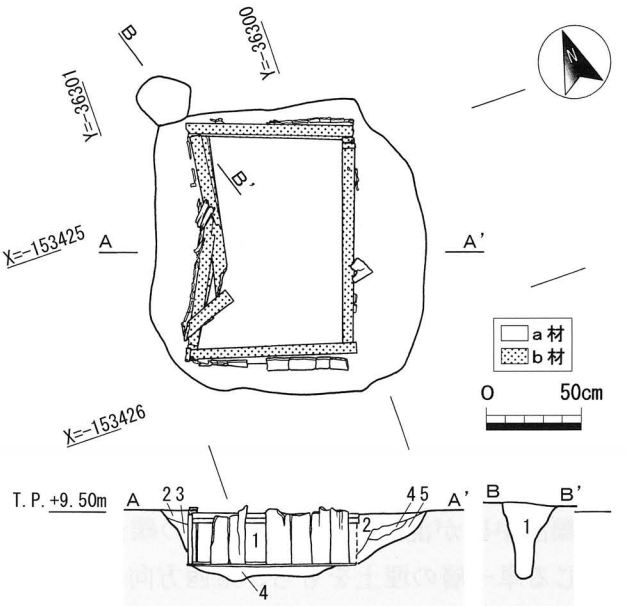
写真11　2116島畠・2208畦畔断面（西から）

なかった。調査地点の東壁断面状況より、推定できる法量は、長さ10.0m以上、幅2.0m前後、残存高0.5m前後を測る。残存する造成土2116-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積はなく、人為的な攪拌の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると考えられる。2116-②は埋土の特徴から、2116-③造成時に構築された遺構である可能性が高い。遺物は確認できなかった。

井戸（ＳＥ）・小穴（ＳＰ）

2120-①ＳＥ・2120-②ＳＰ（第24図）

調査区３Ｊ・Ａ地区で検出した。2120-①ＳＥの掘方の平面形態は径1.5m前後の隅丸方形を呈し、深さ約0.37mを測る。井戸側に方形木枠をもつ。木枠の形態は、長辺1.25m、短辺0.9mを測る周囲に板材（ａ材）を並べ、その内側にコの字状に組まれた板材（ｂ材）を組み合わせたものである。井戸枠の構築方法は、組立て式（鐘方正樹2003）で、あらかじめ「コ」の字状の作製しておいた部材（ｂ材）とａ材をもち込んで井戸側を組立てる方法である。埋土を観察したところ、井戸側埋土にブロック土が目立ち、人為的に埋没したものと推測できる。今回の調査で検出された方形木枠は一段であったが、当初は上部にも続いており、廃絶時に転用などによって抜き取られた可能性が考えられる。



1　7.5GY4/1暗緑灰色粘土ブロックと、5Y6/1灰色細礫～粗砂が混じる
2　10Y4/1灰色細礫混中～細砂に、5Y6/2灰オリーブ色粗～中砂が混じる
（炭化木を含む）
3　10Y5/1灰色細砂に、7.5Y5/2灰オリーブ色中～細礫がブロック状に混じる
4　10Y6/1灰色中～細砂（第７ｂ層）に、10Y8/1灰白色中砂が混じる

第24図　2120-①ＳＥ、2120-②ＳＰ平面図・断面図（Ｓ＝1/40）

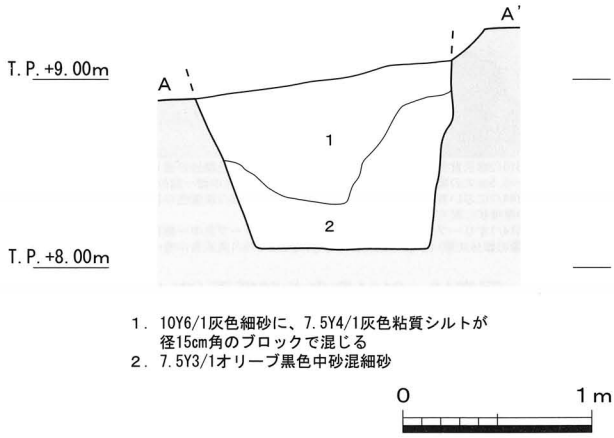
また当該井戸の北隅には、径0.3m弱、深さ0.4mを測る円形の杭跡（2120-②ＳＰ）が存在する。検出地点が近接することや、埋土が2120-①ＳＥの埋土１と類似することから、井戸に関連するものと推測できる。

当該井戸及び杭跡から遺物は出土しなかったが、井戸の形態と埋土の特徴より、構築時期は中世以降に比定でき、旧市営住宅建築直前まで使用されていたものと考えられる。

土坑（ＳＫ）

2139ＳＫ（第21・25図）

調査区４・５Ａ地区で検出した。当該土坑上部は既往建物の解体に伴う掘削で破壊されている。平面形態は長辺2.85m、短辺1.7mの楕円形を呈し、深さ1.0m以上を測る。２層に分層でき、このうち埋土１には各層の土がブロック角状に入っており、人為的に埋没したものと推測できる。また、埋土２の底部が湧水層に達することから、かつては井戸であり、井戸側も存在したものの、転用などによって抜き取られた可能性が考えられる。遺物は、須恵器の砕片が出土したのみであった。



第25図　2139ＳＫ断面図（Ｓ＝1/40）

・第２面（第21図、図版五）

第３ａ層の近世以降の耕作土と、第３ｂ層の氾濫堆積土を全て除去したところ、第４・５層上面で、近世の溝（**2201～2204ＳＤ**）、土坑（**2205・2206ＳＫ**）、落ち込み１箇所（**2207ＳＯ**）、畦畔（**2208畦畔**）を検出した。現地表面下約1.0～1.4m（T.P.+9.8～9.4m）地点に広がる。なお当該面で検出された溝・畦畔は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第２面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝（ＳＤ）

2201ＳＤ（第９表、写真12）

調査区２Ｊ・Ａ地区で検出した耕作溝である。2.5Y5/2暗灰黄色中～細砂に2.5Y7/6明黄褐色中礫混中砂が混じる。径0.5cm大の礫が多量に混じる単一層の埋土をもち、東西方向に並列する。溝からは遺物は出土しなかった。当該溝の北側では牛の足跡が検出されており、牛耕が盛んに行われていたものと推察できる。

写真12　牛の足跡検出状況（北西から）

2202～2204ＳＤ（第９表）

調査区２・３Ｊ地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y4/1灰色中砂混細砂～シルトと

7.5GY5/1緑灰色中砂混シルトが混じる。2.5Y7/3浅黄色粗～細砂がブロック状に混じる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は、各溝から瓦器・土師器・瓦質土器・須恵器・瓦の砕片が出土した。時期は中世以降に比定できる。

第９表　２区第２面耕作溝（ＳＤ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
2201 ＳＤ	２Ｊ・Ａ	(5.72)	1.20	10.0	2203 ＳＤ	２・３Ｊ	(6.42)	1.16	10.2
2202 ＳＤ	２・３Ｊ	(6.28)	0.84	17.3	2204 ＳＤ	〃	(4.45)	0.60	8.7

＊(　)内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値

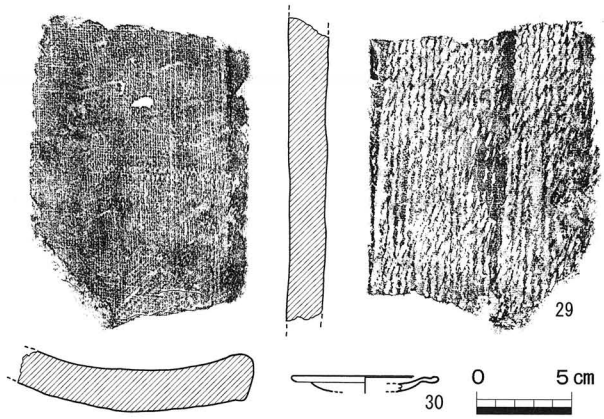
土坑（ＳＫ）

2205ＳＫ（第27図）

調査区４Ａ地区で検出した土坑である。上面遺構の2125ＳＤに南半分は削平されている。平面形態は径0.28m前後の円形を呈し、深さ0.05m前後を測る。埋土は単一層で、遺物は出土しなかった。

2206ＳＫ（第26図-30、第27図）

調査区５Ａ地区で検出した土坑である。上面遺構の2128・2129ＳＤによって上部が削平されている。平面形態は長辺1.8m前後、短辺0.6m前後の不定形を呈し、深さ0.05m前後を測る。埋土は単一層である。遺物は、黒色土器・土師器(小皿など)・須恵器の砕片が出土した。このうち30を図化した。30は土師器の小皿で、復元口径7.6cm、器高0.8cmを測る。「て」の字状口縁をもち、時期は11世紀中頃に比定できる。

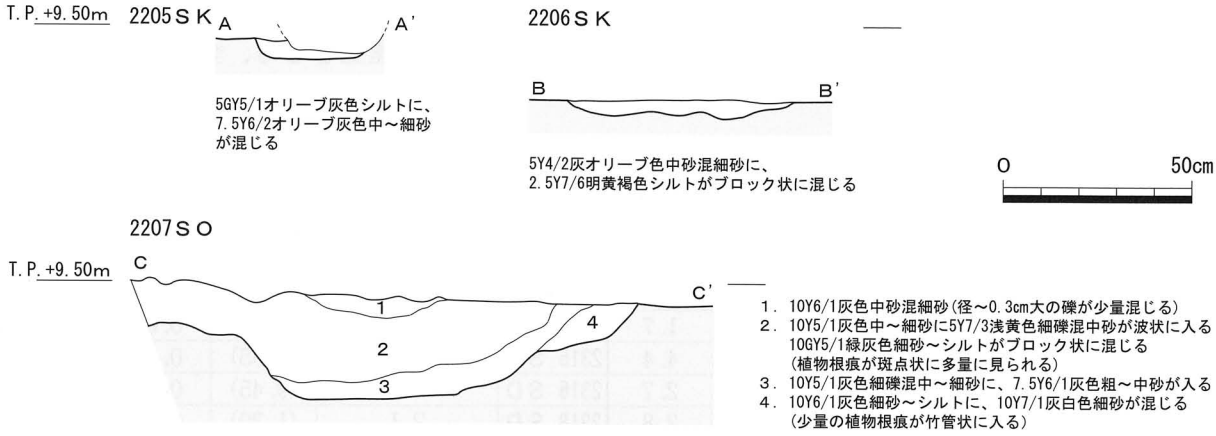


第26図　2206ＳＫ、2207ＳＯ出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

落ち込み（ＳＯ）

2207ＳＯ（第26図-29、第27図）

調査区５Ａ地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、攪乱に一部破壊されており、



第27図　2205・2206ＳＫ、2207ＳＯ断面図（Ｓ＝1/20）

調査区の南西隅部から調査区外に延びるが、調査区西壁及び南壁断面状況より、深さ2.58mを測るものと推測できる。埋土を観察したところ、埋土２では耕作工具による痕跡及び、植物遺体が顕著に見られ、埋土４においても植物遺体が確認されていることから、水田などの耕作に関連する遺構であったことが推察できる。

遺物は平瓦(29)が出土した。29は平瓦の破片で、焼成は良好である。成形及び調整を見ると、凹面に布目痕、凸面に縄目痕を残す。時期は中世期に比定できる。

畦畔(畦畔)

2208畦畔(写真11)

調査区２Ａ地区で検出した。東西方向に傾きをもつ畦畔である。当該畦畔は2116島畠造成土を全て除去したところ検出できた遺構であり、2116島畠は当該畦畔の高まりを利用して、造成したものと推察できる。造成土を観察した結果、2208-①・②の２層で構築され、土師器の砕片を包含する。

・第３面(第21図、図版六)

第５層の水田耕作土を全て除去したところ、第５層下面で、耕作溝17条(2301～2305・2307～2316・2318・2322ＳＤ)、土坑３基(2306・2317・2321ＳＫ)、落ち込み２箇所(2319・2320ＳＯ)を検出した。現地表面下約1.2～1.4m(T.P.+9.3～9.8m)地点に広がる。当該遺構面は近世及び中世以降の土地利用が盛んな為削平や攪拌を受けており、遺構の検出は希薄であった。北東隅を中心として検出した耕作溝群(2301～2305・2307～2316ＳＤ)は、地形の低い箇所であった為、遺構が残存していたものと考えられる。なお当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第３面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(ＳＤ)

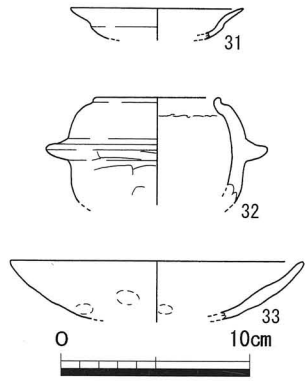
2301～2305・2307～2310ＳＤ(第28図-31・33、第10表)

調査区２Ａ地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y5/1灰色中～細砂混シルトに、5Y7/2灰白色中～細砂が波状に入る。多量の植物根痕が見られる単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。

第10表　２区第３面耕作溝（ＳＤ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
2301 ＳＤ	２Ａ	(1.15)	0.20	2.2	2311 ＳＤ	２Ｊ	(0.70)	0.20	1.8
2302 ＳＤ	〃	(0.35)	0.10	1.8	2312 ＳＤ	〃	(1.00)	0.22	2.7
2303 ＳＤ	〃	(0.70)	0.22	〃	2313 ＳＤ	２Ｊ・Ａ	(8.15)	0.33	5.4
2304 ＳＤ	〃	(2.72)	0.25	1.7	2314 ＳＤ	２Ａ	(6.55)	0.62	4.5
2305 ＳＤ	〃	(5.05)	0.50	4.4	2315 ＳＤ	２Ｊ・Ａ	(8.55)	0.28	5.7
2307 ＳＤ	〃	(4.55)	0.45	2.7	2316 ＳＤ	〃	(9.45)	0.83	6.8
2308 ＳＤ	〃	(4.65)	0.25	2.8	2318 ＳＤ	２Ｊ	(1.30)	0.34	12.0
2309 ＳＤ	２Ｊ・Ａ	(6.30)	0.33	6.0	2322 ＳＤ	４・５Ｂ	(3.65)	0.63	7.5
2310 ＳＤ	２Ａ	(4.80)	0.24	3.8	＊(　)内数値は検出長及び検出幅　＊表記の数値は最大値				

遺物は、2305・2308・2309ＳＤから土師器(小皿など)の破片、2307ＳＤから瓦質土器・須恵器・土師器の破片が出土した。このうち2308ＳＤから出土した31、2309ＳＤから出土した33を図化した。31は土師器の小皿で口縁部が残存する。復元口径9.0cm、残存器高1.7cmを測る。時期は10世紀後半～11世紀前半に比定できる。33は土師器椀の口縁部で、復元口径15.4cm、残存器高3.2cmを測る。時期は11世紀前半に比定できる。



第28図　2301～2310・2315ＳＤ出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

2311～2316ＳＤ(第28図-32、第10表)

調査区２Ｊ・Ａ地区で検出した耕作溝群である。ともに2.5Y5/2暗灰黄色中砂混シルトに、2.5Y6/3にぶい黄色細砂が斑点状に混じる。多量の鉄分沈着する単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。

遺物は、2313ＳＤから瓦質土器・土師器、2314～2316ＳＤから土師器(羽釜など)の破片が出土した。このうち2315ＳＤから出土した32を図化した。32は土師器の小型羽釜で、復元口径6.4cm、残存器高5.6cmを測る。時期は11世紀前半に比定できる。

2318ＳＤ(第10表)

調査区２Ｊ地区で検出した耕作溝である。2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混細砂～シルトに、10YR3/3暗褐色中砂混細砂～シルトが斑点状に混じる。さらに2.5Y7/2灰黄色粗砂混細砂が混じる単一層の埋土をもち、南北方向に並列する。遺物は、土師器・弥生土器の破片が出土した。当該遺構は、第７ｂ層上面遺構に帰属する遺構であると推察できる。

2322ＳＤ(第10表)

調査区４・５Ｂ地区で検出した耕作溝である。10YR4/4褐色中砂混細砂～シルトに微量の植物遺体と炭片を含む単一層の埋土をもち、東西方向に並列する。遺物は出土しなかった。

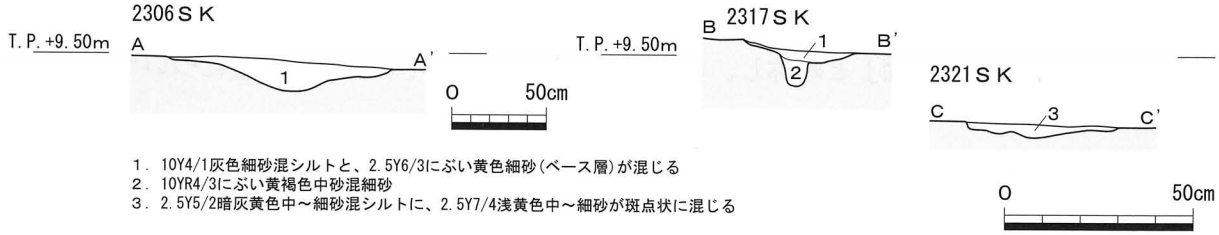
土坑(ＳＫ)

2306ＳＫ(第21・29図)

調査区２Ｊ・Ａ地区で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長辺1.1m、短辺0.9m、深さ18.8cmを測る。遺物は出土しなかった。

2317ＳＫ(第21・29図)

調査区２Ａ地区で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、径0.3m、深さ0.45mを測る。遺物は出土しなかった。



第29図　2306・2317・2321ＳＫ断面図

2321ＳＫ(第21・29図)

調査区４・５Ｂ地区で検出した土坑である。平面形態はほぼ円形を呈し、径0.39m、深さ0.4mを測る。遺物は出土しなかった。

落ち込み(ＳＯ)

2319ＳＯ

調査区２Ｊ・Ａと３Ｊ・Ａ地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、後世の土地利用によって広く削平されている為、 明確な遺構としては検出できなかった。深さ0.16mを測り、7.5GY4/1暗緑灰色中砂混細砂に5Y6/2灰オリーブ色中砂混細砂が混じる単一層の埋土をもつ。ベース層との攪拌が顕著に見られるため、おそらく水田などの耕作に関連する遺構である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

2320ＳＯ

調査区２Ｊ・Ａと３Ｊ・Ａ地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構も**2319ＳＯ**と同じく広く削平されている為、明確な遺構としては検出できなかった。深さ0.5mを測り、10Y4/1灰色中砂混細砂～シルトに5Y7/3浅黄色中砂が混じる単一層の埋土をもつ。ベース層との攪拌が顕著に見られるため、**2319ＳＯ**と同様に、水田などの耕作に関連する遺構である可能性が高い。遺物は土師器の砕片が出土した。

(3) 3区(第30・31図)

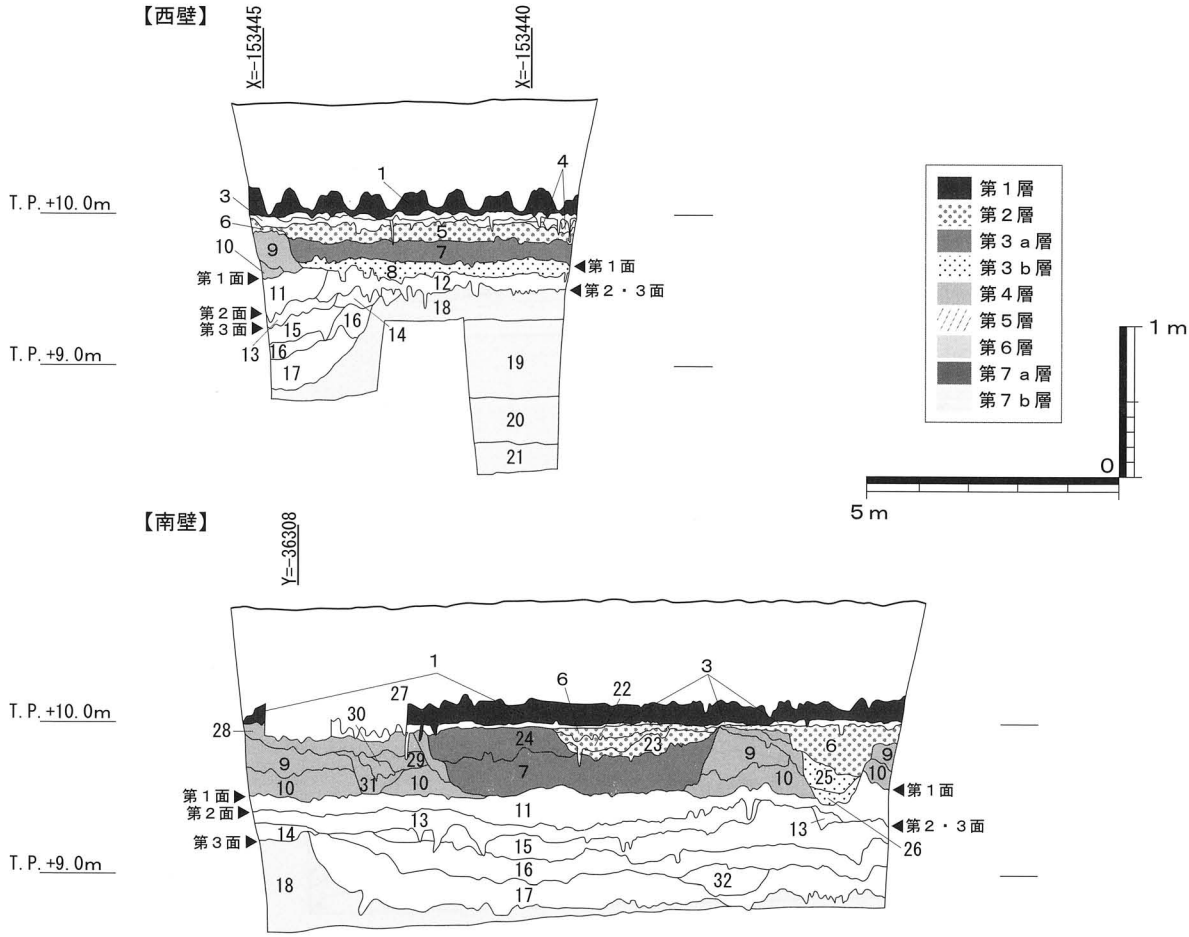
５Ｉ・Ｊと６Ｉ・Ｊ地区に、東西13.8m×南北7.5m前後を測る長方形を呈する調査区を設定した。当調査区の面積は約103.5㎡を測る。

調査は、現地表面(T.P.+10.8m前後)から約0.9mまで機械掘削し、人力掘削を約0.3～1.0m地点まで行った。なお、調査終了後、調査区北西端部の１箇所で機械掘削により深さ1.0m(T.P.+8.3m)までの下層部を確認した。

・第１面(第31図、図版七)

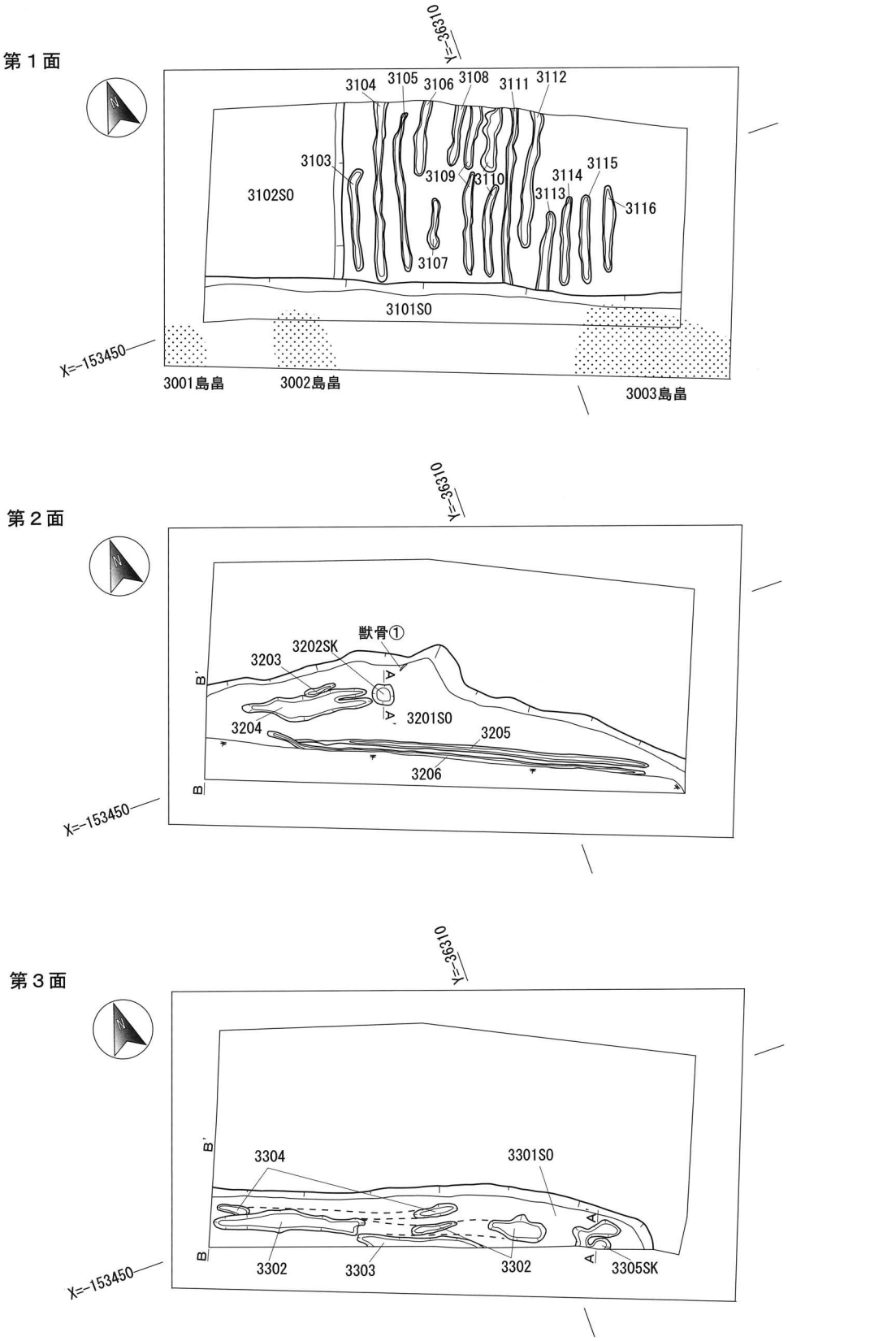
第０層の盛土と第１層の旧耕作土、第２層と第３ａ層の耕作土を除去したところ、第３ｂ層の堆積を確認した。これをさらに掘削したところ、第３ｂ層下面で島畠(**3001～3003島畠**)を検出した。当該遺構は平面調査では確認できなかったが、西壁及び南壁断面の状況より、ともに調査区南端から3.0mの地点より南西方向に広がっていくものと推察できた。さらに第４層の島畠造成土層を全て除去したところ、落ち込み２箇所(**3101・3102ＳＯ**)、近世の耕作溝14条(**3103～3116ＳＤ**)を検出した。現地表面下約1.15m(T.P.+9.35m)地点に広がる。なお当該面で検出された島畠・耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20° それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第１面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。



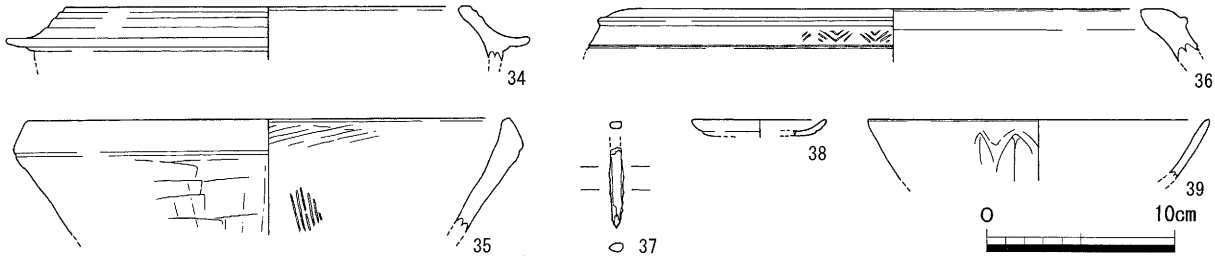
1　5Y3/1オリーブ黒色細礫混細砂(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)
2　5Y4/1灰色細礫～粗砂混細砂(径～0.3cm大の礫が少量混じる)
3　5Y5/1灰色細砂混中砂に、5Y6/1灰色細礫～粗砂が混じる(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)
4　7.5Y5/1灰色細砂混シルトと、5Y7/2灰白色細砂が波状に入る
5　5GY5/1オリーブ灰色中砂混シルトと、5Y7/2灰白色細礫混粗砂が混じる(径～0.5cm大の礫が少量混じる)
　(炭片が少量混じる)
6　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混中～細砂に、5Y6/1灰色細砂混シルトがブロックで混じる(径～0.5cm大の礫が少量混じる)
　(土師器片が少量混じる)
7　7.5Y5/1灰色細礫混粗～中砂(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)に、10GY4/1暗緑灰色粗砂混細砂がブロック状に混じる
8　5Y6/2灰オリーブ色細礫～粗砂に、直下層を巻き上げる(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)(炭片が微量に混じる)
9　10Y4/4褐色細礫混粗砂に、7.5Y5/1灰色粗砂混中～細砂が混じる(径～0.5cm大の礫が少量混じる)
10　2.5Y6/1黄灰色粗砂混中砂に、2.5Y7/6明黄褐色細砂がブロック状に混じる
11　2.5Y6/1黄灰色粗砂混中～細砂に、2.5Y7/3浅黄色粗～中砂が斑点状に混じる(径～3cm大の礫が少量混じる)
12　10GY4/1暗緑灰色粗～中砂混細砂に、植物根痕状に7.5Y5/2灰オリーブ色粗砂混中砂が入る(径～0.5cm大の礫が少量混じる)
13　10Y4/1灰色粗砂混中～細砂に、植物根痕状に5Y6/2灰オリーブ色粗砂混中～細砂が入る
14　10GY5/1緑灰色細砂に、ベース層を巻き上げる
15　2.5Y6/2灰黄色中～細砂と、5Y7/1灰白色中砂が混じる
16　7.5Y6/1灰色粗砂混中砂と、2.5Y6/3にぶい黄色中砂混細砂が混じる
17　10Y4/1灰色中砂混細砂と、10Y3/1オリーブ黒色細砂混シルトが混じる
18　10Y6/1灰色細砂
19　10YR4/1褐色細砂～粘質シルトに、5Y6/1灰色細砂～粘質シルトが植物根痕状に入る
20　5GY5/1オリーブ灰色粘質シルト(下部に中～細砂が目立つ)
21　2.5GY6/1オリーブ灰色粗～中砂に、2.5GY5/1オリーブ灰色細砂～粘質シルトがブロック状に混じる
22　2.5Y5/3暗灰黄色粗砂混中～細砂(径～0.5cm大の礫が少量混じる)に、2.5Y6/4にぶい黄色粗～中砂が混じる
23　5Y5/1灰色中砂混細砂
24　7.5Y4/1灰色細礫～粗砂混中～細砂に、5Y8/2灰白色細礫～粗砂が入る(径～1.0cm大の礫が少量混じる)
25　10GY6/1緑灰色中砂と、7.5YR5/6明褐色中～細砂の互層
26　5Y4/1灰色細礫混中砂に、7.5Y4/1灰色粘質シルトがブロック状に混じる(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)
27　7.5Y5/1灰色中砂混細砂と、2.5Y5/2暗灰黄色細礫混中砂が混じる(径～1.5cm大の礫が微量に混じる)
　(植物根痕が微量に見られる)
28　2.5Y6/2灰黄色細礫～粗砂混中砂(植物根痕が多量に縦方向に見られる)に、2.5Y7/3浅黄色粗～中砂がブロックで微量に入る
29　2.5Y6/1黄灰色粗砂混中砂(径～0.3cm大の礫が少量混じる)(植物根痕が微量に見られる)
30　2.5Y5/2暗灰黄色中砂混細砂と、上層の29が混じる(少量の鉄分沈着)(炭片を微量に含む)(植物根痕が微量に見られる)
31　5Y6/1灰色細礫混細砂に、2.5Y6/1黄灰色粗砂混中～細砂がブロック状に混じる(径～0.5cm大の礫が多量に混じる)
　(土師器・須恵器の砕片を含む)
32　7.5Y6/1灰色粗砂混中砂と、2.5Y6/3にぶい黄色中砂混細砂が混じる

第30図　3区西・南壁断面図(S＝垂直：1/50、水平：1/150)



※遺構名のうちＳＤについては遺構略号省略

第31図　３区第１～３面平面図（Ｓ＝1/150）



第32図　3101・3102ＳＯ、3108ＳＤ出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

落ち込み（ＳＯ）

3101ＳＯ（第32図-34・35・39）

調査区５Ｉと６Ｉ・ＪＡ地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、南側に下がりながら調査区外に延びるが、調査区西壁及び南壁断面状況より、深さ0.3m以上を測るものと推測できる。2.5Y6/1黄灰色粗砂混中～細砂に2.5Y7/3浅黄色粗～中砂が斑点状に混じる単一層の埋土をもつ。埋土の攪拌が顕著に見られることから、耕作などに利用されていたものと推測できる。

遺物は瓦質土器・青磁・瓦器・土師器・須恵器の破片が出土した。このうち34・35・39を図化した。34は土師器の羽釜で、復元口径21.4cm、残存器高2.9cmを測る。時期は14世紀前半に比定できる。35は瓦質土器の擂鉢で、復元口径25.4cm、残存器高6.2cmを測る。時期は14世紀末～15世紀前半に比定できる。39は龍泉窯系の青磁碗で、復元口径17.9cm、残存器高3.2cmを測る。時期は14世紀末～15世紀前半（青磁Ⅳ類）に比定できる。

3102ＳＯ（第32図-36・38）

調査区５・６Ｉ地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、調査区外にのびるが、調査区西壁断面の状況より、深さ0.13m前後の浅い皿状の窪地であったものと推測できる。10GY4/1暗緑灰色粗～中砂混細砂に植物根痕状に7.5Y5/2灰オリーブ色粗砂混中砂が入る単一層の埋土をもつ。埋土に植物根痕跡が観察できることから、耕作などに利用されていたものと推測できる。

遺物は、瓦質土器・瓦器・土師器・須恵器の破片が出土した。このうち36・38を図化した。36は瓦質土器の奈良火鉢（浅鉢Ⅴ）で、復元口径26.5cm、残存器高3.8cmを測る。時期は13世紀後半～14世紀初頭に比定できる。38は土師器の小皿で、復元口径7.0cm、器高0.9cmを測る。体部下半に稜線が見られることから、時期は13世紀後半に比定できる。なお、当該遺構埋没後に、3101ＳＯを構築しており、若干の時期差が生じる。

溝（ＳＤ）

3103～3116ＳＤ（第32図-37、第11表）

調査区５Ｉ・Ｊと６Ｉ・Ｊ地区で検出した耕作溝群である。ともに2.5Y4/1暗オリーブ灰色粗砂混中～細砂に5Y7/2灰白色中～細礫が斑点状に混じる単一層の埋土をもつ。全て南北方向に並列する。

遺物は、3103・3107ＳＤから土師器の破片、3104・3113ＳＤから瓦器・須恵器・土師器の破片、3106ＳＤから土師器（羽釜など）の破片、3108ＳＤから土師器の破片と鉄製の釘、3109ＳＤから瓦器・土師器と瓦の破片、3110ＳＤから瓦器の破片、3114・3116ＳＤから瓦器・土師器の破片がそれぞれ出土した。このうち3108ＳＤから出土した37を図化した。37は鉄製の釘で、残存長4.3cm、

第11表　３区第１面耕作溝（ＳＤ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
3103 ＳＤ	５・６Ｉ	2.50	0.30	7.0	3110 ＳＤ	５Ｉ・Ｊ、６Ｉ	(3.78)	0.40	7.8
3104 ＳＤ	〃	(4.40)	0.28	2.0	3111 ＳＤ	〃	(4.30)	0.24	6.9
3105 ＳＤ	〃	3.90	0.24	3.7	3112 ＳＤ	５Ｉ、５・６Ｊ	(3.22)	0.30	4.8
3106 ＳＤ	〃	(1.84)	0.30	2.4	3113 ＳＤ	６Ｉ・Ｊ	1.94	0.28	9.0
3107 ＳＤ	〃	1.24	0.30	〃	3114 ＳＤ	６Ｊ	2.20	0.20	7.3
3108 ＳＤ	〃	(1.49)	0.30	4.3	3115 ＳＤ	〃	2.14	0.26	4.1
3109 ＳＤ	５Ｉ・Ｊ、６Ｉ	(4.06)	0.28	9.8	3116 ＳＤ	〃	2.10	0.30	6.1

＊(　)内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値

重さ1.85ｇを測る。なお、埋土の状況や切り合い関係から、当該耕作溝群の廃絶時期は3102ＳＯと同時期に比定できる。

・**第２面**(第31図、図版七・八)

第１面で検出した遺構埋土を全て除去したところ、第７ｂ層上面で南方向に下がる落ち込み状遺構１箇所(3201ＳＯ)を検出した。さらに、この埋土を全て除去したところ中世の土坑１基(3202ＳＫ)、耕作溝４条(3203～3206ＳＤ)を検出した。当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。調査区北半分は、後世の土地利用によって第７ｂ層まで削平されていた為、遺構は確認できなかった。調査区南半分に位置する遺構についても、中世期の遺物が多数出土していることから、本来はより上層部から切り込む遺構であったと推察できる。現地表面下約1.25m(T.P.+9.25m)地点に広がる。

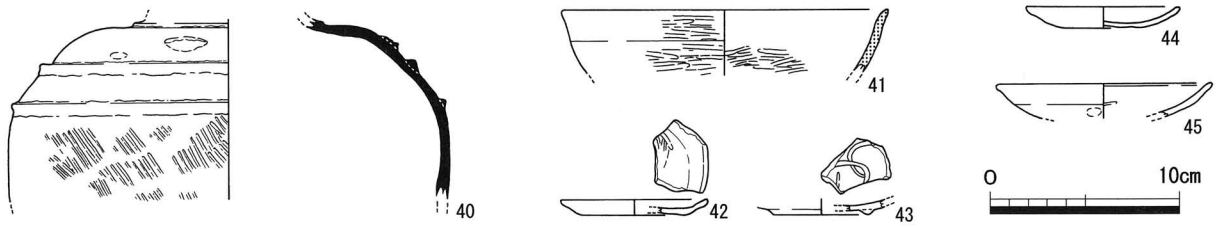
以下、当該面を「第２面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

落ち込み(ＳＯ)

3201ＳＯ(第33図-40～44、第36図)

調査区５Ｉと６Ｉ・Ｊ地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、調査区外に延びるが、調査区西壁及び南壁断面の状況より、深さ0.1m前後の浅い皿状の窪地であったものと推測できる。埋土の攪拌が顕著に見られ、植物根痕跡が観察でき、埋土除去時に下層部で多数の耕作溝(3203～3206ＳＤ)が検出されたことから、耕作などに利用されていたものと推測できる。落ち込み肩部では獣骨の一部(獣骨①)が検出された。

遺物は瓦器(椀・皿など)・黒色土器(椀など)・土師器(羽釜など)・須恵器(壺など)の破片が出土した。このうち40～44を図化した。40は須恵器の壺で、口径は不明、残存器高9.7cmを測る。体部に貼り付け突帯を２条施し、外面に叩きの痕跡が顕著に見られることから、播磨系土器と推



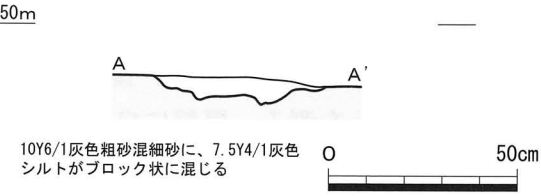
第33図　3201ＳＯ・3202ＳＫ出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

察できる。時期は11世紀後半に比定できる。なお詳細は44頁を参照されたい。**41**は黒色土器の椀で、復元口径15.2cm、残存器高3.4cmを測る。外面全体及び内面の下半に丁寧なヘラミガキを施す。時期は11世紀(黒色Ｂ類畿内系Ｖ類)に比定できる。**42**・**44**は瓦器の小皿で、それぞれ復元口径7.5cm・8.0cm、器高0.8cm・1.1cmを測る。時期は13世紀前半に比定できる。**43**は瓦器の椀で、口径は不明、残存器高0.8cmを測る。高台がかろうじて残ることから、時期は13世紀前半に比定できる。

土坑(ＳＫ)

3202ＳＫ(第31・33図-**45**、第34図)

調査区５Ｉ地区で検出した。平面形態は径0.55m前後のほぼ円形を呈し、深さ0.06mを測る。埋土は単一層で、ブロック土が混じることから、人為的に埋められたものと推測できる。遺物は、瓦器(皿など)・土師器などの砕片が出土した。このうち**45**を図化した。**45**は瓦器の皿で、復元口径11.1cm、残存器高0.8cmを測る。時期は13世紀前半に比定できる。



第34図　3202ＳＫ断面図(Ｓ＝1/40)

溝(ＳＤ)

3203～3206ＳＤ(第12表)

調査区５Ｉと６Ｉ・Ｊ地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y6/1灰色粗砂混中砂に2.5Y5/3黄褐色細砂が混じる。少量の鉄分が沈着する単一層の埋土をもつ。全て東西方向に並列する。

遺物は、**3204ＳＤ**から瓦器・土師器の砕片、**3205ＳＤ**から瓦器・黒色土器・土師器の砕片、**3206ＳＤ**から瓦器(小皿など)の砕片がそれぞれ出土した。これらの遺物より、当該耕作溝の構築時期は中世に比定できる。

第12表　３区第２面耕作溝（ＳＤ）法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
3203 ＳＤ	５Ｉ	0.70	1.60	3.0	3205 ＳＤ	５・６Ｉ、６Ｊ	8.40	0.80	2.9
3204 ＳＤ	〃	5.46	1.90	2.8	3206 ＳＤ	〃	9.20	0.16	8.3

＊(　)内数値は検出長及び検出幅　　＊表記の数値は最大値

・**第３面**(第31図、図版八)

第２面で検出した**3201ＳＯ**埋土を全て除去したところ、**3201ＳＯ**下部で南方向に下がる落ち込み１箇所(**3301ＳＯ**)を検出した。さらに、この埋土を全て除去したところ耕作溝３条(**3302～3304ＳＤ**)、土坑１基(**3305ＳＫ**)を検出した。第２面と同様に、現地表面下約1.25m(T.P.+9.25m)地点に広がる。また、遺構から出土した遺物を観察した結果、本来はより上層部から切り込む遺構であった可能性が高く、遺構構築面が第２面構築時及びそれ以降に削平されたものと推察できる。

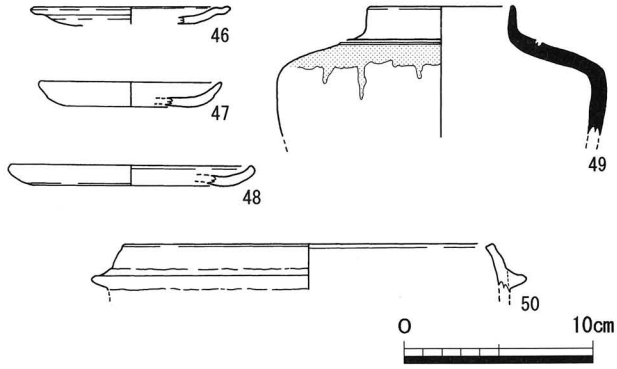
以下、当該面を「第３面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

落ち込み（ＳＯ）

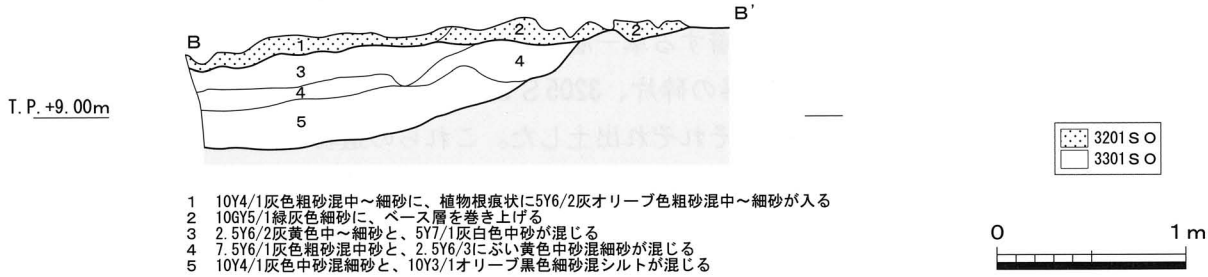
3301ＳＯ（第31・35図-46～50、第36図）

調査区５Ｉと６Ｉ・Ｊ地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、調査区外にのびるが、調査区西壁及び南壁断面の状況より、深さ0.5m以上を測る。埋土除去時に下層部で多数の耕作溝（3302～3304ＳＤ）が検出されたことから、耕作などに利用されていたものと推測できる。

遺物は瓦器・瓦質土器（羽釜など）・土師器（小皿・羽釜など）・須恵器・平瓦の砕片が出土した。このうち46～50を図化した。46は土師器の小皿で、復元口径5.6cm、器高0.8cmを測る。口縁部形態は「て」の字状を呈す。時期は11世紀中ごろに比定できる。47・48は土師器の皿で、それぞれ復元口径9.6cm・12.35cm、器高1.2cm・1.0cmを測る。49は須恵器の壺で、復元口径7.6cm、残存器高6.9cmを測る。肩部に自然釉が見られる。頸部に２条の突帯が見られ、下部の突帯に沿って釉が溜まっている状況が確認できた。おそらく焼成時に他の土器を蓋状に重ねていたものと推測できる。時期は10世紀中頃に比定できる。50は瓦質土器の羽釜で、復元口径19.4cm、残存器高2.3cmを測る。京都型瓦質土器で、時期は11世紀後半に比定できる。



第35図　3301ＳＯ出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



第36図　3201・3301ＳＯ断面図（Ｓ＝1/20）

溝（ＳＤ）

3302～3304ＳＤ（第13表）

調査区５Ｉと６Ｉ・Ｊ地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y4/1灰色粗砂混中～細砂と、ベース層が攪拌する単一層の埋土をもつ。全て東西方向に並列する。遺物は出土しなかった。

第13表　３区第３面耕作溝（ＳＤ）法量表

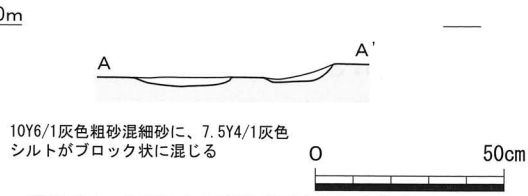
遺構名	地区	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）	遺構名	地区	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）
3302 ＳＤ	５・６Ｉ	(8.05)	0.35	11.5	3304 ＳＤ	５・６Ｉ	(5.56)	0.3	7.5
3303 ＳＤ	６Ｉ	3.03	(0.15)	5.0	＊（　）内数値は検出長及び検出幅　＊表記の数値は最大値				

土坑（ＳＫ）

3305ＳＫ（第31・37図）

調査区６Ｊ地区で検出した土坑である。当該遺構は、上面遺構の3201ＳＯによって上部が削平

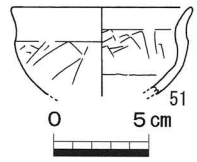
されており、詳細は不明である。残存する平面形態は不定形で、深さ0.02m前後を測る。埋土は単一層で、ベース層との攪拌が顕著に見られることから、耕作に関連する遺構であったと推測できる。遺物は出土しなかった。



第37図　3305ＳＫ断面図（Ｓ＝1/20）

・第７ｂ層出土遺物（第38図-51）

当該層中にはほとんど遺物は含まれていなかった。図化した51は、調査区北半の第７ｂ層中に埋没していた遺物である。51は土師器の小形の壺で、復元口径9.4cm、残存器高4.6cmを測る。調整は内面に板ナデ、外面にケズリが見られ、口縁部は横ナデで仕上げる。時期は８世紀後半に比定できる。



第38図　第７ｂ層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

第４章　まとめ

今回の調査では、比較的土地環境が安定している平安時代前期頃は居住域の末端地域として利用されており、平安時代後期以降から近代まで広く生産域として利用されていたことは明確である。当該調査地の土地利用の変遷は、調査地南西部に流れる長瀬川の氾濫と密接な関係をもっていたことが分かった。以下、各時期についての概要を述べたい。

平安時代前期以前

調査では、第７ｂ層の堆積に相当する。当該層は、包含する遺物がローリングを受けており、調査地全域で確認できたことから、第１章-河川①を形成する河川堆積層に相当するものと考えられ、調査地一帯も、河川氾濫の影響を多大に受けていたものと推測できる。

平安時代中期～後期

調査では、ほぼ完形の遺物が廃棄された溝・土坑などを検出した。調査地を含む周辺地域に居住域が広がっていたものと推察できる。調査で建物に関連する遺構などが確認できなかった原因としては、当該遺構面が後世の土地利用によって全体に削平及び攪拌されていた為と考えられる。

鎌倉～室町時代

調査地では耕作溝・島畠・井戸など耕作関連遺構が広範囲にわたって確認できた。耕作溝が切り合い関係をもつ箇所が多く見られ、さらに３時期以上に細分することができることから、調査地一帯が、長期間にわたって、連綿と生産域として利用されていたことが分かる。

近世以降

調査では、耕作溝・島畠・畦畔・井戸など耕作関連遺構が広範囲にわたって確認できた。このうち、調査地で検出された島畠の造成土に、氾濫堆積物の堆積は全く見られなかった。これは、造成方法に、溝を掘り下げた部分を水田面、掘り残した部分を島畠として利用する「地下げ」を取り入れたからである（註１）。今回の調査地は、旧大和川の主流である長瀬川に隣接する土地に立地しており、調査地一帯が大和川の付け替えの影響を受け（註２）、広く島畠として土地利用されていたことが推察できる。

特筆すべき遺物について

３区の3201ＳＯから出土した40について、若干の考察を述べたい。

40は須恵器の広口壺または広口瓶とも呼称される器種である。肩部に２条の貼り付け突帯がみられ(特徴Ⅰ)、調整は外面に併行叩き後ナデ、内面に回転ナデが見られる。口縁部形態は、頸部上半部が破損している為、詳細は不明であるが、破損状態や、明瞭に屈曲する頸部の形状から、頸部が別作りの可能性が高い(特徴Ⅱ)。肩部には粘土を貼り付けようと試みた痕跡が見られる(特徴Ⅲ)。

特徴Ⅰに類似する資料としては、兵庫県三田市相野古窯跡(兵庫県教育委員会1992)や岡山県邑久村佐山東山奥窯跡(岡山県教育委員会1987)から出土した土器が挙げられる。前者の窯跡から出土した壺は10世紀前半～中頃、後者の窯跡から採集された壺は10世紀後半～11世紀前半に位置付けられる。また特徴Ⅱから、十瓶山窯産須恵器の特徴の一つである口頸部から底部まで叩き成形を基本とする「一連叩打技法」(吉岡康暢1994)の可能性は低い。特徴Ⅲは双耳の名残と考えられる。特徴Ⅰ・Ⅲから、播磨地域で10世紀から続く広口壺の系統と類似することは明確である。

以上から、当該土器の発見は、祖型となる広口瓶が10世紀代に相生窯(播磨)で出現し、神出窯・勝間田窯・邑久窯及び十瓶山窯へ11世紀後半に伝播する(佐藤竜馬1993)と同時期に、畿内にも伝播した可能性が示唆できる貴重な資料といえる。

【註・参考文献】

註１　(井上智博1998)によると、「調査地の第２－１面で検出した島畠の造成方法は、島畠作土の下に水田作土の堆積が見られ、この水田作土が島畠直下部の堆積土より高くなっている。」とあり、今回の調査で検出した島畠がこれに類似する。

註２　(八尾市1960)によると、「先年（1704年)大和川御川違以後、用水不自由、田高悉く稲作仕り候ては早損仕り候故、田毎に畔を築き、田床を下げ、用水を請け・・・」と島畠が表現されており、大和川の付け替え後、農業用水の不足から、田をできるだけ低くして水が溜まりやすいように稲を育てていたと記されている(八尾市立歴史民俗資料館2002)。この記述から、18世紀には地下げ型島畠が存在していたことが想像できる。

井上智博1998「Ⅴ．調査成果」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要ＸＸＩ』(財)大阪府文化財センター
　　1999「島畠の考古学的研究－池島・福万寺遺跡の事例の再検討」『光陰如矢』「光陰如矢」刊行会
岡山県教育委員会1987『桑瀬ほか/土佐貝塚ほか/美土路遺跡ほか　昭和61年度圃場整備事業に伴う確認調査』
金田章裕1993「大阪府八尾市福万寺遺跡の島畑遺構」『微地形と中世村落』吉川弘文館
佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室
兵庫県教育委員会1992『相野古窯跡群　近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XⅢ)本文編』
廣瀬時習2007『池島・福万寺遺跡３　本文・考察編』(財)大阪府文化財センター
八尾市1960「亀井村等三か村願書、宝暦10年(1760)付、」『八尾市史史料編』
八尾市歴史民俗資料館2002『河内の綿作りと木綿生産』河内木綿関係資料集１
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
鐘方正樹2003『井戸の考古学』同成社

図　　版

図版一　1区（第1面）

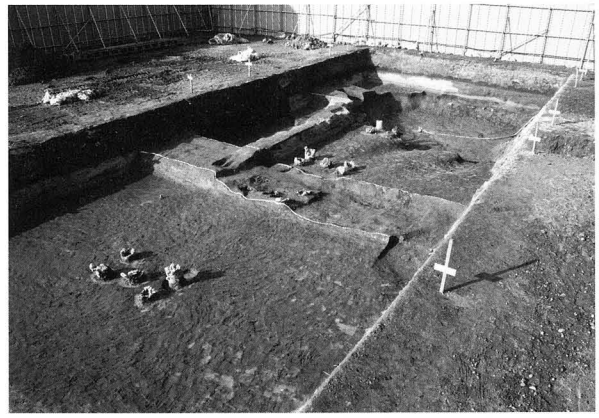
調査地遠景（南東から）

1区第1面全景（南東から）

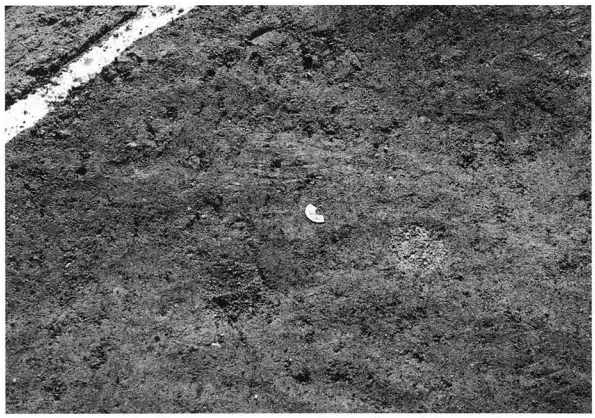
図版二　1区（第2・3面）

1区第2・3面全景（南東から）

1区第2面1211畦畔検出状況（北から）



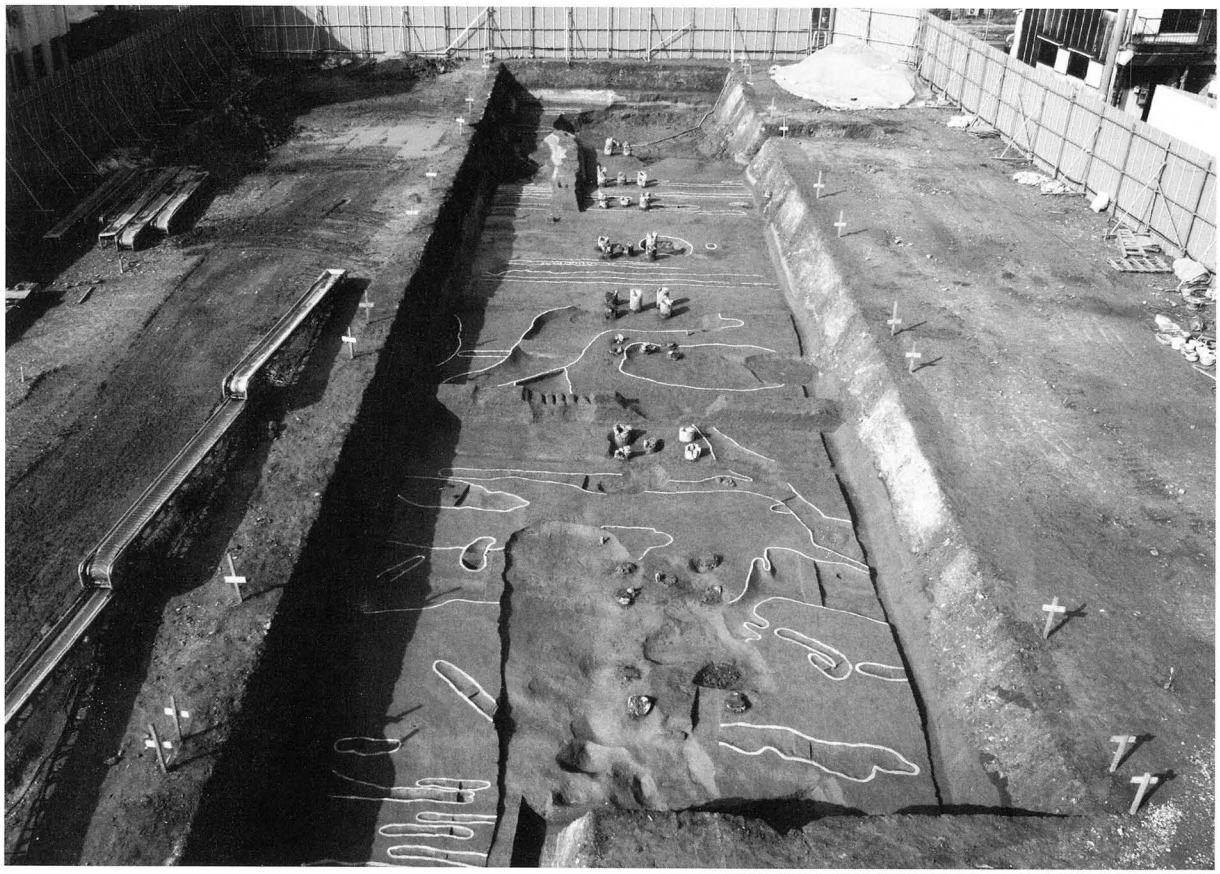
1区第2面1213・1214島畠検出状況（北東から）



1区第2面宋銭①・1212ＳＰ検出状況（北から）

1区第3面1301～1316検出状況（東から）

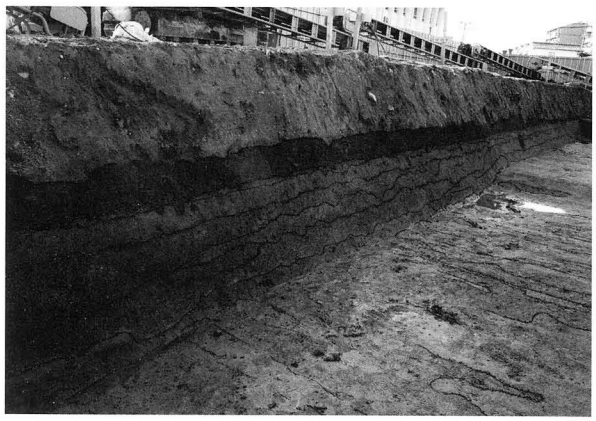
図版三　1区（第4面）



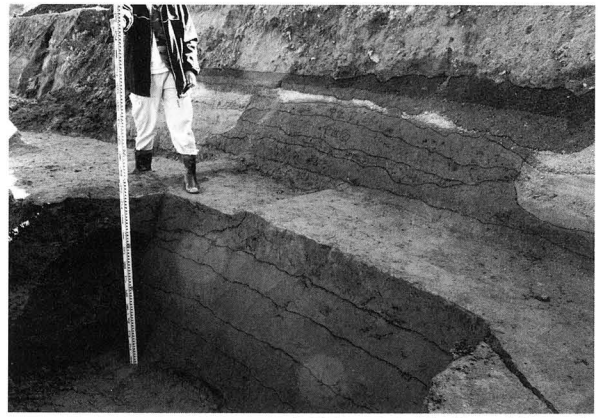
1区第4・5面全景（南東から）

1区第4面1407ＳＥ断面（南南西から）

1区第4面1407ＳＥ曲げ物検出状況（南南西から）

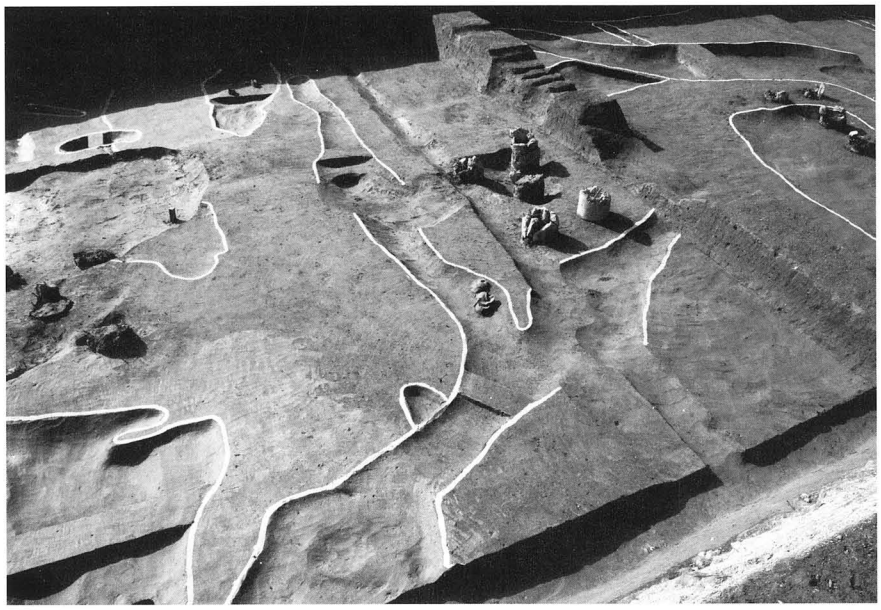


1区調査区南壁断面（北東から）



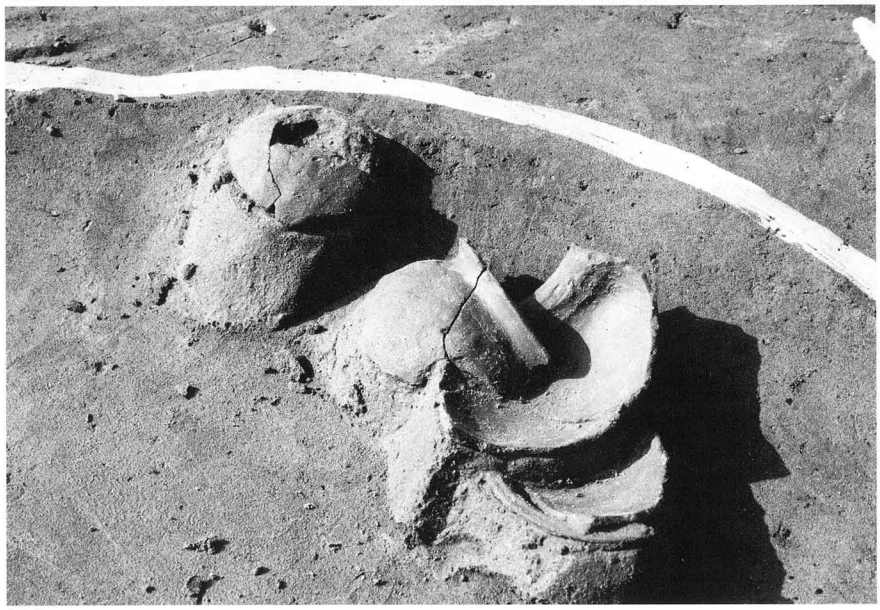
1区東端部下層確認状況（北から）

図版四　1区（第5面）



1区第5面
1508ＳＫ・1509ＳＤ検出状況
（北東から）

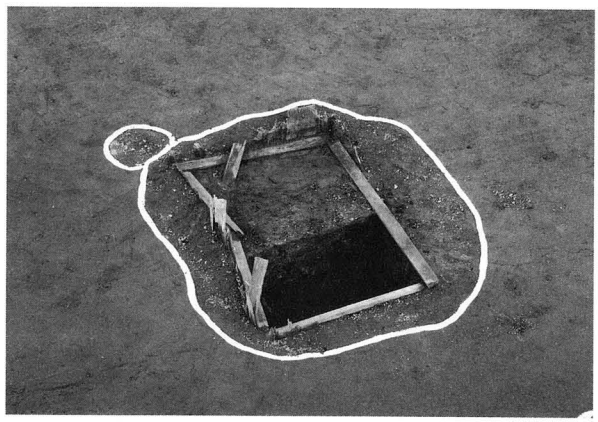
1区第5面
1508ＳＫ土器出土状況
（西から）



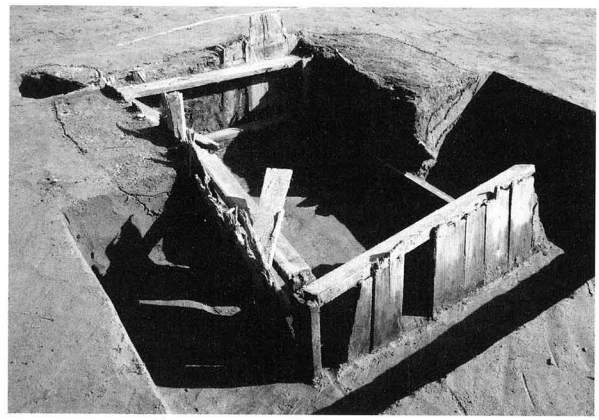
1区第5面
1509ＳＤ土器出土状況
（南東から）

図版五　２区（第１・２面）

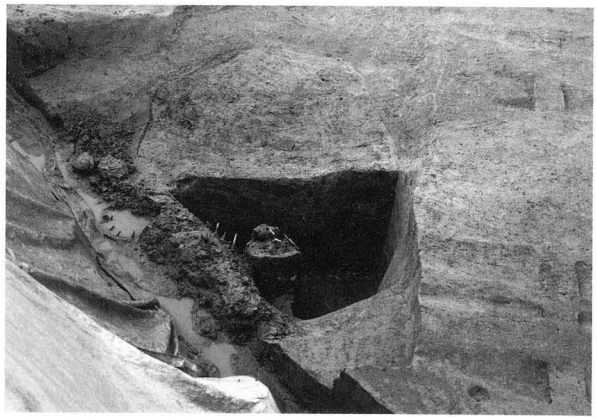
２区第１・２面全景（南南東から）



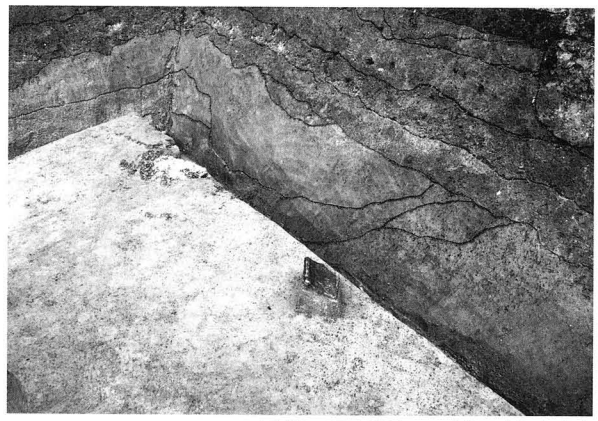
２区第１面1120-①ＳＥ断面（南から）



２区第１面2120-①ＳＥ木枠検出状況（南から）



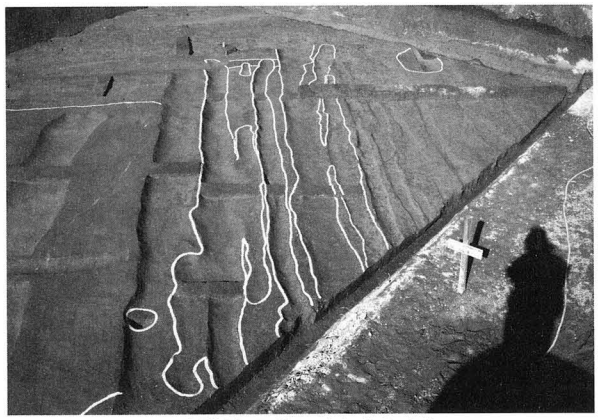
２区2139ＳＫ断面（北から）



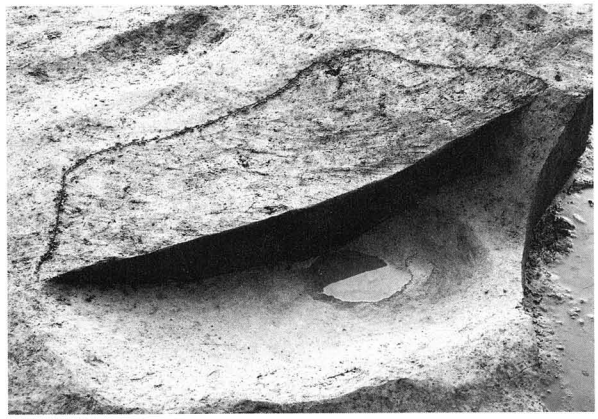
２区第２面2207ＳＯ断面（北から）

図版六　２区（第３面）

２区第３面全景（南東から）

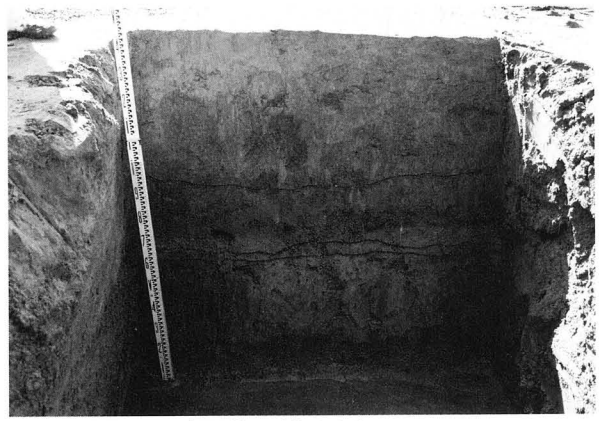


２区第３面北半遺構検出状況（南東から）



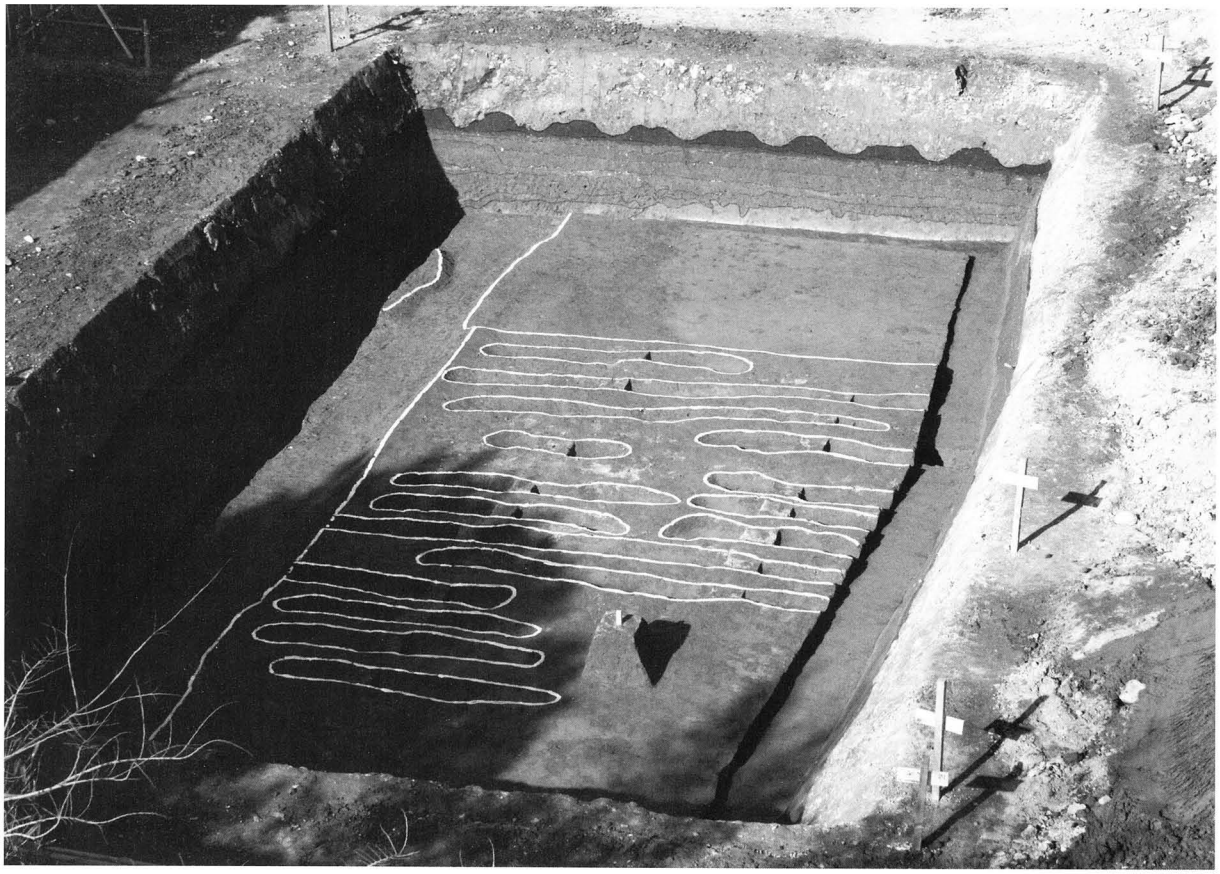
２区第３面2306ＳＫ断面（北から）

２区調査区東壁断面（北西から）

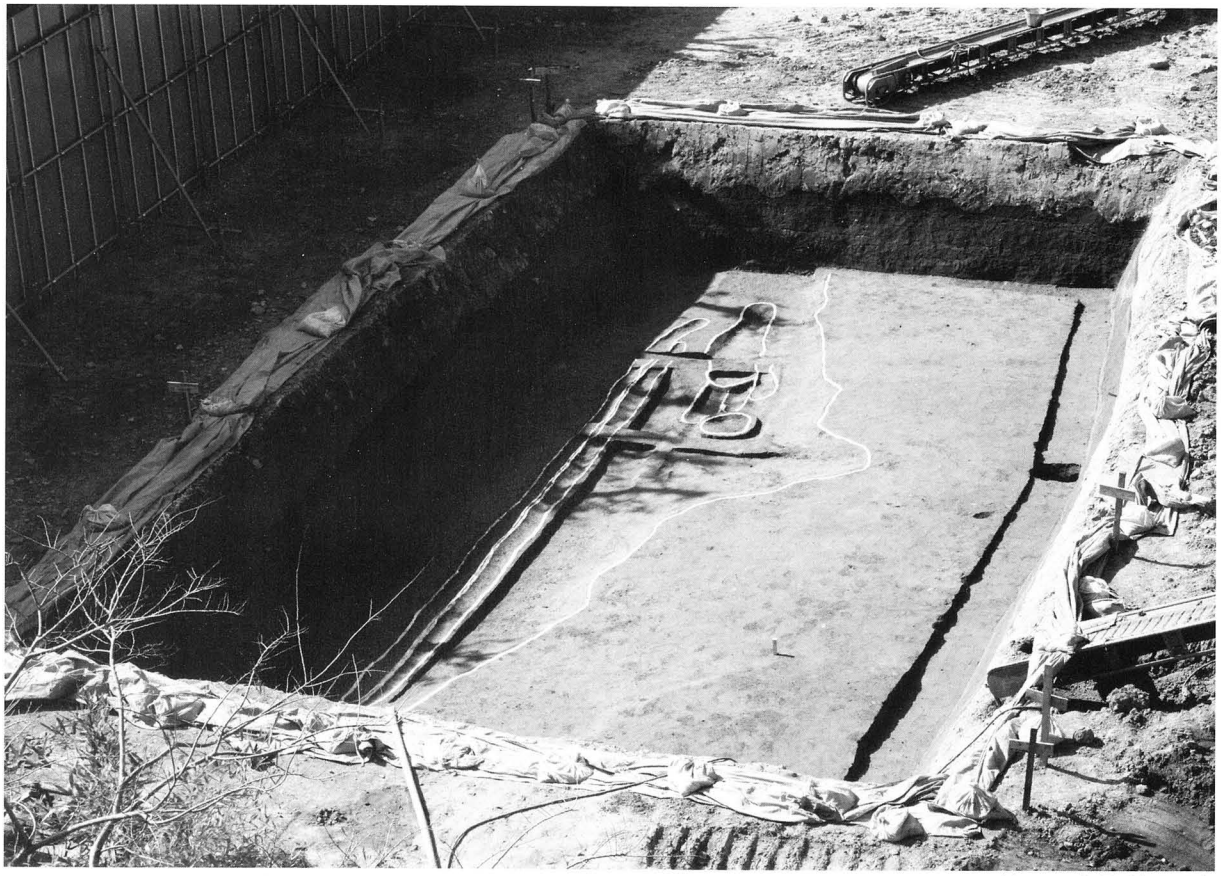


２区中央部下層確認状況（北から）

図版七　３区（第１・２面）



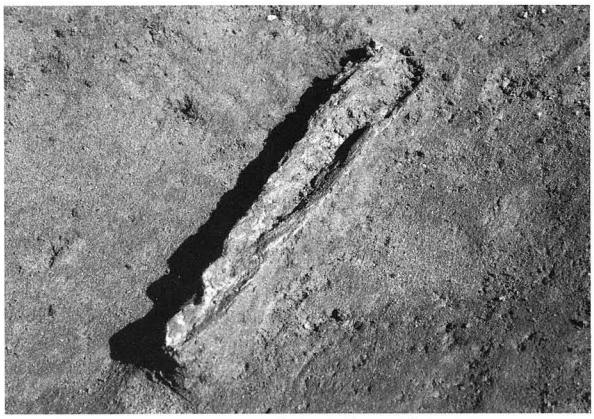
３区第１面全景（東から）



３区第２面全景（東から）

図版八　３区（第２・３面）

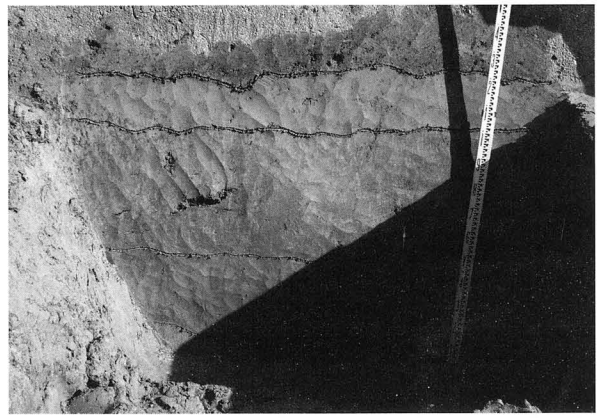
３区第３面全景（東から）



３区第２面3201ＳＯ獣骨①出土状況（南から）

３区調査区西壁断面（北東から）

３区調査区南壁断面（東から）



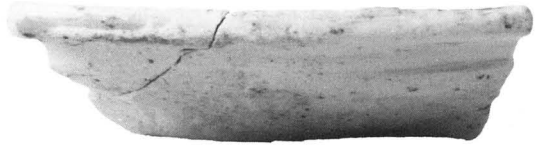
３区西端部下層確認状況（南南西から）

1

11

2

3

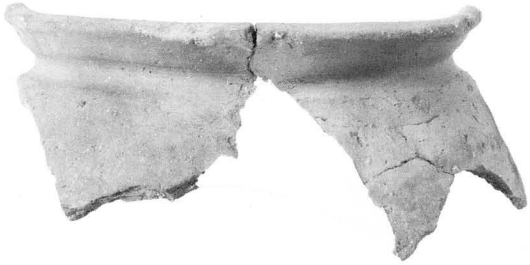


12

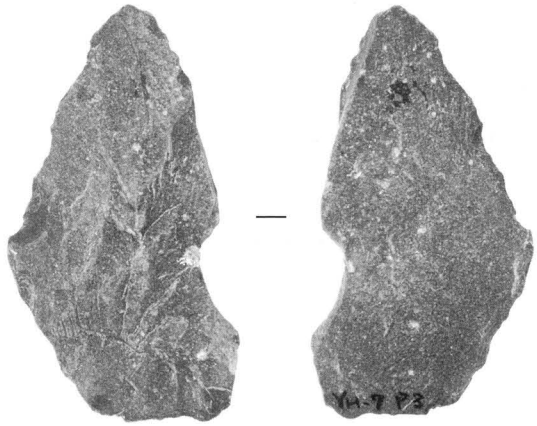
6

13

14



7



4

8

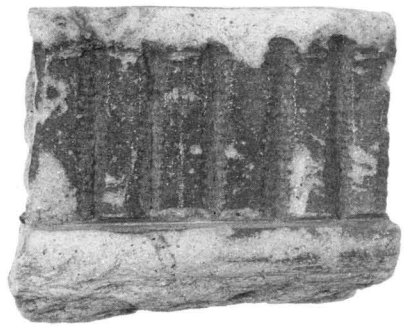
1区第1層(1)、第2面(2・3)、第4層(4)、1407ＳＥ(8)、1508ＳＫ(11・14)、1509ＳＤ(12・13)出土遺物

15

18

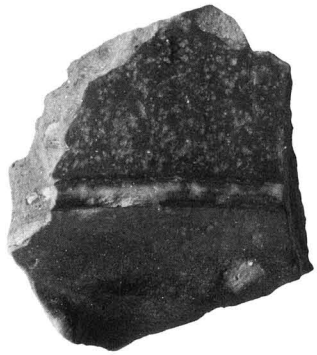
19

16

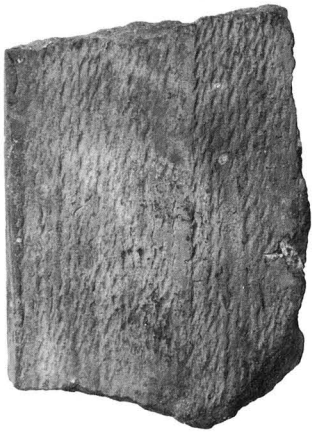


27

17



28



29

21

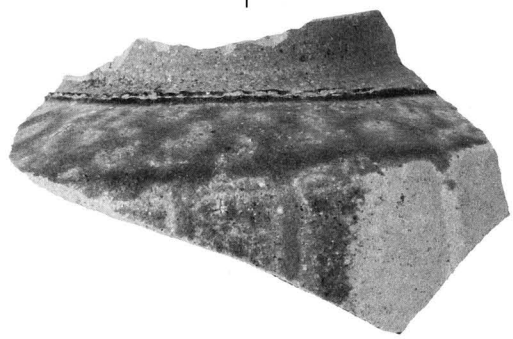
１区1508ＳＫ(15・16・18)、1509ＳＤ(17)、1504ＳＫ(19)　２区第２層(21)、2110ＳＤ(27)、2115ＳＤ(28)、2207ＳＯ(29) 出土遺物

32

40

36

39



49

37

51

２区2315ＳＤ(32)、３区3102ＳＯ(36)、3108ＳＤ(37)、3201ＳＯ(40)、3301ＳＯ(49)、第７ｂ層(51)出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく120
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告120
副書名	矢作遺跡（第７次調査）
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	120
編著者名	河村恵理
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2008年12月26日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢作遺跡（やはぎいせき）（第７次調査）	大阪府八尾市安中町八丁目（おおさかふやおしやすなかちょう）	27212	74	36度31分00秒	153度34分20秒	20071211～20080229	1104	住宅建替

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢作遺跡（第７次調査）	集落	平安時代	溝・土坑	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・土錘	・11世紀後半に播磨地域から伝播したと推察できる須恵器の広口壺（瓶）が出土
	生産域	中世	水田・井戸・土坑	土師器・瓦器・瓦質土器・曲げ物	
	生産域	近世以降	島畠・水田・井戸・杭跡・土坑・噴砂	国産陶磁器・青磁・瓦・鉄製品・宋銭	

要約	平安時代前期：調査地一帯は大規模な河川氾濫の影響を受けた。 平安時代中期～後期：調査地を含む周辺地域に集落の存在が推定できる。 中世～近世：調査地一帯は連綿と続く生産域であった。

財団法人　八尾市文化財調査研究会報告120

矢　作　遺　跡

第７次調査

発　行　　2008年12月26日
編　集　　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　　㈱近畿印刷センター
〒581－0033　八尾市志紀町南二丁目131番地
TEL 072－920－3488
表　紙　　レザック66　　＜260Kg＞
本　文　　ニューエイジ　＜ 70Kg＞
図　版　　ニューエイジ　＜ 70Kg＞